
セカイに対するあたしの使用法

塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカイに対するあたしの使用法

【Nコード】

N2431F

【作者名】

塩

【あらすじ】

史上最悪な夢をみたあたしの前に現れた、二人の少年。指ばっちんで不思議なことが起きたり、シャツのボタン全開だったり、普通の人間なんかじゃない。そこで、あたしはイケニエ？それともアシガカリ？はんぶんこのあたしは、セカイをどう変えていくのだろう。半ファンタジー半ラブ半コメディ半半裸！《1/5更新止まってすみません。…早めに必ずや！》

今朝見た夢はさいあくだった。

あたしが家族と住む一軒家は火事で燃え尽きて、命からがら逃げ出したあたしは通り魔にナイフで一突きされたし、どうにか急所をはずれたかと思えばよるめいたはずみで道路に飛び出し、大型なダンプカーで轢かれてはい、ジエンド。

なんていう絶望的な夢だ。夢はよく自身の経験や記憶に基づいて構築されるものだと聞くけれど、果たして今まで身の危険を感じたことがあっただろうか、いやない。もう一度言うけど、いやない。もはや誰かの陰謀を感じる。そつとあたしを殺したがつてるヤツでもいるんだろうか。

「死神よ、あなたには死神が憑いてるのよ…」

地を這うような、震えた声が絶望まっただ中のあたしの背中を撫でた。

驚いて飛び退くと、そこにいたのは学校でも噂の魔法使い。とは言えどこはそのようなファンタジーな世界などではないのでもちろん、自称ではある。黒いローブと、ビン底メガネが特徴で、放課後迷える子羊を救済して回っているらしい。

初めて声を掛けられたと少しドキドキしながら、まるで他人事のように救済の言葉を待っていると、にやりと笑った自称魔法遣いさ

んは恐ろしいことを口にした。

「あなたは死んだのね…」

「……えっ？」

「屋上が吉と出ているわ」

魔法使いさんは言うだけ言うと、くるりとロープを翻してあたしの目の前から去っていった。虚を突かれたあたしはそのまま黙ってその背中を見送ってしまい、今更真意を聞くことなどできなかった。

それから屋上へ向かってみたことが、本当に吉だったのかどうか、今となっては分からない。

「ボクは嫌いだ」

「俺は好きだ」

「嫌いだ」

「好きだ」

「きらいだ」

「好きだ」

なんだこれ。

どうしても不毛としか思えないやりとりをしている中、突入していいものか…少し考えて、否と答えが出た。

今日も屋上は立入禁止の鎖で繋がれている。どちらにしろ、入れはしないのだ。屋上へと続く扉の向こうから聞こえる声の主二人が一体どのようにして向こうへと行ったのかは分からないが、あたしにはここからこのガチガチに巻かれた鎖を突破して中に入ることはできそうもない。

「…ユーゼンの側にいると疲れる」

「へへ、我慢しろって。俺らの干渉なしに、オージもコチラ側にいることは出来ねーんだから」

「だいたいソチラ側は管理がなってないんだよ。だから、コチラとバランスがとれない」

「だから、そこは悪かったって言ってるだろ？」

「ああもう、寄りかかるな重いっ」

アチラとかコチラとか、一体何の話をしているんだろう？ 会話の内容も内容だけど、二人の関係も微妙そうだなあ…。乱暴なボーイソプラノと、快活なテノール…仲良く振る舞おうとしているのはテノールだけだ。

そのとき、ガチャリ、と音がした。

「え…？」

磨りガラスごしに中の様子ばかり気にしていたあたしは、その音がどこから鳴ったのか、一瞬分からなかった。けれど、分からないと、分かる前にまたそれは鳴り出した。

「えええっ！」

それ——、決して人間の力では破れそうもない鎖のカタマリが金属音をまき散らしながら、するするとスムーズにほどけたのだ。…ひとりで。

「ええっ、うそっ」

あたしは両手を上げて、ホールドアップ状態。自分は何もしてないという確認をする…やっぱり、勝手にほどけてる！

ぐるぐるに巻き付けられていたはずの鎖は地面にきれいにとぐるを巻いていく、そうして全てするりと地面に落ちたかと思うと。

「とにかく、早く——」

扉が開いた。

戦う

ごまかす

叫ぶ

逃げる

不測の事態に、あたしの脳は混乱を極め、ぴぴん！ と瞬時に戦闘コマンドを打ち出した。

どれっ、どれだ！ カーソルは上から下へと一巡し、叫ぶで一度止まったが、あたしがハラハラするうちにまたカーソルはルーレットのごとく回る。

あたしの頭がそんなことになつてるとは知る由もない、視界に現れた少年二人は驚いた顔で立ち止まっている。

手前にいる少年——肩まで伸びて切り揃えられた黒髪が特徴の彼の背は、あたしと同じか、少し高いくらい。顔立ちは、女の子と見

間違っばかりの女顔で、印象としては儂げな美少女ってところだ。男だと判断できる制服のズボンの存在が惜しいと言わざるを得ない。

それとは真逆に、黒髪の少年の後ろに控える少年は、眩しいほど光に輝く銀髪だった。それも野性的で胸当たりまでざんばらに伸びきっているため、燃えるような赤い瞳と相まって野蛮な印象を受ける。あたしが見上げなくてはならないほどの長身で、何が問題かって、その半裸だ。上はボタンを止めてないシャツ一枚ってどういうことだ。おかげでアツイ胸板がちらちらと見える。…見ているのではなく、見える。

二人とも同じ学校の制服を着ているけれど、こんな目立つ人たちが同じ学校にいたのだろうか…？

まじまじと観察しているうちに、向こう二人組は機能を再始動させたらしい。気付けば、どちらともなく手があたしに向かって伸びていた。

ぴこん！ 慌てて戦闘コマンドのカーソルを止める。そうだ、こっちはしてられない。

「っ……！」

逃げるが勝ちだ！

「オージ！」

「分かってる」

正直、勝ちも負けも得る前に、戦闘といえる状況にすら陥っていないことに気付くのは今更だ。けれど、どうしても逃げなければいけないと本能が告げていた。何か、どうしても、不吉が降りかかるような…。魔法使いが言う「吉」とは「不吉」のことだったんじゃないだろうな。だったらあんにやるただじゃおかねえ！

めらつと燃やした闘志のおかげか、あたしの逃走スピードは極みへと達し、なんとか二人から逃げ切れ……。

「……ん？」

屋上から逃走を試みて、今ようやく気付く。…二人は追いかけてきてない？ あたしがあまりにも早かったのだろうか。だが、後ろから人が来る気配がない。スパイラル状の階段を下りてきたのだから、足音が頭上から響いてきてもいいはずなのに、それもなし。

ここでまた、ぞつと不吉な予感。

「あきらめた…？」

あたしが足を止めたそのとき。
ぱちん、と指を鳴らすときの小気味よい音があたしの耳に直に響いた。

「あつ、あわあつ、わあ！」

同時に、あるうことが足下の階段が崩れ出す。慌てて元来た道を戻るが、その階段もがらがらと崩れ落ちていくため追い立てられるように上へ上へと登るしかない。こんなことって起こるのだろうか！学校の校舎の中だというのに、崩れ落ちるのは階段だけで、その下に見えるのは漆黒の暗闇だけ。けれど考えている余裕なんてない。必死に階段を駆け上がる。

「つーかまえた！」

気付けば両腕を銀髪の少年に拘束されていた。

「はーなーしーてー!」

ただ今、あたしは屋上にいます。結局、無理矢理引きずられるように屋上へと連れられ、逃げないようにと拘束されている。うつつ…どうしてこんなことに。階段なくなっちゃったし…。

「離れたら逃げるだろ?」

「そんな問題じゃないってば!」

拘束…それは紐やら縄やらを想像してはいけない。あたしを拘束するもの…それはどこで間違ったか、人間の両手。

「暴れんなって。俺だってお前みたいなやつにこうしてんの不本意なんだぜ? だったらまだオージの方が美人だし、いい匂いがするからぜひそつちに…」

「何の話をしてるんですか汚らわしい」

そう、汚らわしい! セクハラまがいな発言も含めて、今のあたしは拘束されていると言っても、後ろから抱きしめられているというなんとも変態的なことをされている。手近な拘束具といえばこれ

しかなかったらしいが、考えてもみてよ。あたしってば、うら若き女の子なのに。

「なに、照れてんの？」

「ねえよ」

おっと、つい地が。

照れてるとか照れてないとかそれ以前に、慣れてない。彼氏いない歴イコールで年齢のあたしにとってはピンとこない。ただ、半半裸という銀髪の状態を思い出せば…なんか嫌だ。

「仕方ない、話が進まないから、ユーゼン」

「えー。逃げたら困るだろ？」

「わっ、ちよっ！」

黒髪さんと並ぶとそう気付かないけど、この人だって結構なイケメンだ。やっぱり黒髪さんとは真逆な男らしい格好良さ。そんな顔を近づけられて、いくら半半裸とは言えど冷静でいられる女の子はいない。

ひーっ、やっぱり離れてほしい！

「いいよ、閉めておくから」

「あ、そっか」

あれ、あっさり離れてくれた。今の内に、とあたしは二人から距離を取っておく。

すると、黒髪さんがあたしとは反対側、屋上の扉に向かって右手をかざした。軽く親指と中指をこすりあわせている。

…何してるんだろう？

「いつ見てもたのしーよな！」

銀髪も余計なちゃちゃを入れているのか、黒髪さんから不機嫌な視線を頂戴している。

と、思えば、黒髪さんの指が弾かれた。聞き覚えのあるぱちん、という音が響いて、次いでまた聞き覚えのある金属音。…扉の向こうで立入禁止の鎖が巻かれたようだ。…またひとりでに。

「な…」

驚いて、絶句する。隣では銀髪が両手を叩きながらぎゃあぎゃあわめき散らしているが、正直それは正気の沙汰じゃないです。

「なんなのそれ、さっきから！」

あたしがようやく絞り出した声は、自分でも分かるくらい震えていた。だって、こんなの、見たことない。だって、だってまるで、

こんなの、…魔法みたいじゃん！

「それを教えてやるから、逃げるなよ」

「あああ、ちよつと待って、本当にわかんないよー」

頭を抱える。自称魔法使いが頭をよぎったけど、あんなの魔法使いじゃない！ いや、それは知ってたことだけど、違う違う、そうじゃない。この世には魔法使いなんて、そんなの、存在してなんか

「うわあ、おもしろいくらい混乱してるな」

「そんなもんだろ、コチラ側ではあり得ないことだ」

「まあなー。こうやって他人に見せるの初めてだよな」

「見せてるんじゃない、あとから口封じすんだから」

くちふっじ…！

混乱しているあたしの耳にその物騒な単語だけは滑り込み、あたしは一瞬で血の気が引いた。まさか、ころ、殺されて…！

今朝見た夢がフラッシュバックする。やっぱりあれは陰謀だったんだ。この人たちにかけられた悪い魔法で。指を突きつけて「この死神！」と吐き捨ててやりたかったけど、につこりと綺麗な笑みを投げかけられちゃあ、しぶしぶカムバックするしかない…。

「分かるよな」

うっ…。深窓の美少女がそんな怖い脅し文句を言っではいけない。
ん。それはつまり「他人にばらすと承知しねえからな、ええ？」と
いうことデスカ…。右手をあたしの顔の正面に持ってこられて、分
からないなんて返答は口が裂けても言えない。どうやらその指はっ
ちんは怪奇現象のトリガーのようだから、鳴らさせてはいけないの
だ。

あたしは諦めて頷いた。

じゃあ自己紹介でも、と突然切り出したのが、へんたい銀髪の方。脱出口を塞がれて、自主的に屋上の真ん中で正座をするあたしの肩においてにこにこ陽気に笑っている。

「俺は、神代^{かみしろ}ユーゼン。獅子座のO型、趣味は体を鍛えることと、んー、オージに抱きつくことかな」
「ばかなこというな」

それー、と伸ばした手をいとも簡単にはたき落とされる、銀髪と神代サン。何となく二人の関係も見えてきたような、そうでないような…。

「で、こっちのが、帝王^{みかとおうじろう}子朗。通称オージだ。オージ、趣味は？」
「ユーゼンいじめ」
「え、もしかやそれって、愛情表現の…」
「ばかなこというな」

それでもいちど、ぺちり、と。…神代サンって懲りないなあ。わざと？ わざとなの？ あえて狙っていつてるの？ あんまり考えるのも怖いからやめておこう。

それにしても二人とも凄い名前。ユーゼン、なんて日本人ですら

ないじゃん。髪色や目の色は確かに外人風ではあるけれど…。帝サ
ンはまた人の上に立つために生まれてきたような名前だなあ。うわ、
この二人のあとにあたしの名前披露したくないな…。

「で、あんたが、千草ちくさ二子にこね」

「うん、そうなの、あまり言いたくなくて…」

——おい？

「って、ちょっと！　なんであたしの名前！」

「ん」

帝サンが指さしたのは、神代サンの手の内。…って、それあたし
の生徒手帳！

「いつの間に！」

「さっき、抱きしめてるとき」

「何スリみたいなことやってんの！　か、返してっ」

伸ばした手はひよいと避けられて、あたしはべしやりと地面にダ
イブすることになった。痛い上に屈辱。

「にこ、って変な名前だよなー」

「ああ『二個』のイントネーションで呼ばないで！」

「って言われても、他にどんなイントネーションが？ に（↑）こ（→）？ それはそれでオカシイ」

「名字で呼んでください、名字で！」

だから嫌なのに…。親も一体なんの願いを込めてこんな名前にしたんだろう。せめて違う漢字ならまだしも『二』って。どうあがいても一番になれない絶望感を感じる。

「チグサ、か」

「へえ、千の草ねえ」

…そうね、神や帝の下じゃあ草なんて簡単に吹き飛ばされてしまっ
うね…。名前だけで格の違いを見せつけられた。

気が付けばもう、あたりは暗い。知らない間に結構な時間が流れていたようだ。暗くて二人の顔が認識しづらくなるが、どうあってもここを離れる気はないらしい。早いところ本題に入ろうと、話は続いた。

「さて、さっきのアレらだけど」

「…怪奇現象のことですね」

ストレートに走ったものだ。帝サンはうんと頷くと、右手をそつとかざした。何の変哲もない、強いて言うなら綺麗な白魚のような手だ。ここに一体何が、と顔を近づけてみるが、やっぱり何もない。

「魔法、だよ」

突然肩に重みが乗る。顔を上げれば、神代サンがあたしに後ろから乗りかかっていた。

「まほう…」

やっぱりそうだったのか…。実際に目の当たりにしただけあって、驚きはそこまでない。信じられないけど、信じられない目に二度もあつたのだ。まるで小説やゲームの中だけの話を目の前のするとは思わなかったけど。

「そんなもの…この世の中にあつたんですね…」

こうなれば、自称魔法使いさんにも見せてあげたいもんだ。

「まあ、正確に言えば、この『世の中』ではないな」

「…え？」

「いいよ、ややこしくなるからそれは」

今の言い方、まるで魔法は「違う世の中」のものだと言ってるみたいだ。だとすれば、帝サンは…？

…確かにややこしい。魔法だけでも非現実的なのにそれ以外のことはあたしの頭にはキャパオーバーだ。おとなしくしていよう。

「本当だったら、この真実を見抜いた人間は排除しなければいけないんだけど…」

「は、排除？ それってさっきの口封じ…！」

あたしが戦闘コマンドを引き出そうとすると、頭をぼんぽんと叩かれた。神代さんだ。安心しろ、という言葉が降ってくる。

「それはしないから、代わりのことをやってもらいたいんだ」
「交換条件ってやつね」

帝さんが付け加える。

「交換条件…。それをすればあたし、殺されなくてすむの？」
「うん、うまくやってくれたらね」

よ、良かったあ…。全身から力が抜ける。本当に殺されるとは思っていなかったけど、こうして生かされる約束をきちんと頂けて、余は満足じゃ。

初めて見る帝サンのまともな笑顔も、とてもホッとする。

「うん、なんでもするよ！ 何すればいい？」

気を良くしたあたしは、体を乗り出して、帝サンの指示を待つ。
そのせいで神代サンが地面に落ちたけど、気にしない。

「人を捜して欲しい」
「人を？」
「そう」

なんだ、簡単そうじゃん。…という気持ちが伝わったのか、読んだのかもしれないけど、神代サンが寝転んだまま、あたしにそつと告げた。

「チグサを生かす口実だったんだよ」

「え？」

「そうとでも理由をつけないと、オージはチグサを抹消するしかなかったからな」

「…そのために？」

「そ、だから『交換条件』は必ず守れよ」

帝サンがそんなことを考えていたなんて。全然気づけなかった。そのために、あたしがやらなくても十分に出来ることを、わざとあたしに手伝わそうとしてくれてる。魔法とかなんとか、分からないことだらけだけど、帝サンは普通の人間と同じ、優しい人間だ。…それを伝えてくれる神代サンもそうなのだろう。

二人に会って、怖い思いとか、マトモじゃないことばかりだったけど、今はもう二人を信頼し始めている。

「聞ってる？」

「あ、すいません、聞いてませんでしたっ」

慌てて耳を傾ける。帝サンは小さくため息をついて、もう一度口にしてくれた。

「この学校に居るはずだから、見つけたらすぐに引き渡して欲しい」
「分かりました！ このチグサ、命に替えても全うしてみせます！」
「…それを免れるための交換条件だったのだろ」

おつといけない、そうだったそうだった。

…神代サン、そんな哀れな物を見るような目であたしを見ないでください。

「で、名前とか分かりますか？」

「あ、うん、ええと…」

ええと？ …待てども、帝サンの次の言葉は出てこない。どうしたんだろう、と神代サンと顔を見合わせる。神代サンが、上半身を起こして、帝サンの顔をのぞき込もうとしたとき、帝サンの左手が、神代サンの額に突きつけられた。

……え、ええっ？

「ごめん、ユーゼン」

「ああ、どうぞ」

な、何を？ 待って、それって一体…！ 神代サンのあまりのウザさに限界が来ちゃったの！ いやだからってそんな…！

あたしが止める暇もなく、帝サンは指を弾いた。

「ああっ！ 帝サンそんなことしちゃ…！」

けれど、あたしが想像していたことは起こらなかった。もしかして、頭バーンとかそういうことかと思ったけど、そういうことじゃなかったらしい。蛍光灯のような白い光が帝サンの手からこぼれ、神代サンの額を照らしている。その間神代サンも帝サンも目をつぶっていて、何が起きているのか全く分からない。

「――…ありがとう」

「どういたしま…くはっ！」

勢いで飛びつこうとした神代サンを帝サンが顔面平手打ちで止めた。っはー、実に良い音が鳴りましたな。

それにしても二人は一体何をやっていたのだろうか？

「今のは、ユーゼンの記憶を見せてもらってたんだ。ちょうどリストを…ええと、捜して欲しい人の名前を忘れてた」

から、神代サンの記憶を見た、と。なんかカワイイことするなあ…帝サン。絶対女の子の格好して欲しいよ、コレ。

「…魔法ってそんなこともできるんですね。あたしが思ってた魔法
ってもつと派手なものかと思ってたから」

欲望をそつと隠し、何食わぬ顔で帝サンに向かう。帝サンは頷い
て、説明してくれた。

「実は今でも力を制限されてるんだけど、それでももつと、超能力
に近いかもしれない。派手なものといっても、物質では小さな炎が
一つくらいだ」

物質？

「オージの魔法には二つの作用があるんだ。物質を操るものと、精
神を操るもの。鎖を動かしたのは物質、階段を崩したり、今俺の記
憶を見たのは精神を操るものだ」

と…、となると、階段が崩れたのはあたしの幻覚だった、ってわけ
なんだ。…そりゃそうだね、冷静に考えれば、階段がなかったら大
変だ。

すごいなあ、魔法って。すんなり受け入れちゃうあたしも…すご
いけど。なんとなく二人を疑う気持ちはなかった。昔から愚かとか
いてバカと読まれて言われてるくらいだし、分かってないだけかも
知れないけど。

「それで、帝サン、名前分かりましたか？」

「うん、ばっちり。名前はね……」

んん、また固まっちゃった。と、思ったら目をパチパチさせて、あたしを見てる。ええ？ また忘れちゃった？ 帝サンの脳味噌で一体どついう構造に…。

「千草二子？」

「はい」

名前を呼ばれたので返事をする。けど、続く言葉はない。また、神代サンを見るが、神代サンは今度はあたしと顔を見合わせなかった。神代サンも何か気付いたらしい。ぽん、と手を打った。

「そつえば、そんな名前だったな」

「…もしかしてコレが捜し人の名前ですか」

二人は息を揃えてこくりと頷いた。…こんなときだけ息ぴったしってちよつとズルイ。

……ええええ！ あたし？

04（後書き）

展開がのろくて申し訳ない…！いいから早く二子進行してください。
ファンタジーなど初めてで説明の難しさに絶望^^わかりにくかったらばすみませヌ…

まだ本題に入っていない気がしますので、なるべくはやくすすめて参りますので、ユーゼンの半裸が気になる人はぜひオツキアイくださると嬉しいです！あ、半裸に秘密があるとかそういうわけじゃないんで！^^

やっぱりあたしって死神が憑いているに違いない。

「千草二子…ボクたちは、キミを殺しに来たんだ」

え——…うそ、どういうこと？

先ほどまでとは違ってかわった静寂に、あたしの心臓は高鳴り始めていた。帝サンの目は真剣そのもので、嘘を言っているようには見えない。

助けを求めようと、向けた視線を神代サンは冷たく受け止めた。

どうして——あたし、口封じに殺されなくてもいいって、そう思ったばかりだったのに。帝サンと神代サンの優しさを信じたばかりだったのに。

どうして。

「んなこと言っんですかあー！」

「うるさい、千草二子！」

あ痛ッ。

…ここはどこ、あたしはチグサ。千の草と言えども、帝と神の元では風前の灯火な可哀想な女の子……って何言ってるんだ。

「今、何の時間だと思ってる…？」

頭に軽い痛みを覚えながら、声が降ってくる方へと気怠く視線を向ける。

…つるつばげ。じゃないや、立松せんせい…。

「…英語の授業中ですか？」

「正解だ」

立松先生は、太陽の光をその頭で反射させながら、にやりと笑った。これは、第二波の予感。

「ほあっ！」

「遅いつ！」

秘技・千草流真剣白羽取りは物の見事にかわされ、あたしはぱん、と二度目の痛打を食らうことになってしまった。

…無念…。

「おバカさんだよな、ニコチンって！」

やりきれない敗北感のまま授業が終わると、見計らったように声がかけられた。

しゃくに障るほどの高音と、人を小馬鹿にしたように含み笑い。
…来たな、この性悪女め。

「とりあえずニコチン言わないでくれませんかね」

嫌悪感を声に滲ませつつ、顔を向ける。長いまつげのぱっちりお目目と、あたしのそれはもう上を行く素敵な目がガツンとあつて、彼女はごめんごめえーん、と謝った。

花咲壱子…あたしとは正反対の名前を持つ美少女…ちなみに容姿はどっこいどっこいだと勘違、いや思っている。こうやってことあるごとに突っかかってくるんだよ。

「あの先生の授業で眠れる人そうそういないよ？ 頭痛くない？」

まあ、でもなんだかんだ良い子だし、だからこうやって今まで友達でいられてるんだけどね。

「大丈夫、ありがと——」

「これ以上おバカさんになったら大変だもんねっ、ニコチン！」

だからこうやって今まで憎んでこられたんだけどねっ！

「で、何か夢でも見てた？ 結構うなされてたけど」

あたしがぐちぐち言うのも聞こえていないのか、総無視なのか、
壱子はあたしの前の席にひらりと座ると、その高い声で聞いてきた。
うなされてたのね、あたし。どんだけ怖い思いをしているんだっ
て話だ。

「んん、ちょっとね」

言つと、壱子はフーン、と不思議そうに首を傾げた。

夢、って言えば夢だけど。実際は現実起こったこと、なんだよね。帝サンたちと初めて会った昨日。不思議なことがおこって、魔法使いだって分かって、気付いたあたしを抹消しようとして、でも人捜しを手伝えは見逃すって言われて。

…そこまでは良かったんだ、そこまでは。

それから、捜し人の名前があたしだと分かったそのとき。

「あんたを殺しに来た」……そりゃないよ、見事な手のひら返し。

帝サンたちは一体何の目的があつてここに来たんだろう。あたし

は絶対死神に誓っても帝サンや神代サンのことは知らない。昨日会うまでは本当に知らなくて。

…ただ一方的に殺意を向けられてる？ あたしを殺すために二人は来たの？

「…だはあー」

「どーしたの、ニコチン？」

「考えれば考えるほど、鬱になる…」

「駄目だよお、ニコチン摂取しなきゃ！」

んなもん摂取してどーするよ。

「元気だしなよ、ニコチン！ ニコチンの低脳で複雑なこと考えるだけ無駄だってばあ。忘れちゃえっ！」

「果てしなくバカにされてる気がしないでもないけど、確かにその通りなので反論はありません」

あたしは、おでこに手を当てた。

「昨日のことは全て夢、ゆめ、ゆめゆめゆめ…」

いないいない、いないいない、この世に魔法使いなんて、自称の黒ローブの人しか、いないないない。

はい、あと三秒数えればあなたは、昨日のことは全て忘れーる。

いきますよー、はい、いーち、にーい、さーん…。

「よ、チグサ！」

「って、おおい！ 今せつかく人が忘れようとしてたのに！」

空気を読め！ この半裸が！

「何、チグサ、そんなに胸板が恋しい？」

「ひいつ、近づかないでクダサイ！」

あたしは教室の前から堂々としてきた半裸を手近にあつた教科書で叩きつけた。すると、半裸の後ろから「全くだ」と言いながら美少女も登場。

…っーか、何でいるんですか、あんたら。

奇抜な二人に、クラスメイトたちもそれはそれは驚いていらつしやる。ざわざわし始めて…そうだよ、こんな不思議な生物が来ちゃあ驚くのも無理はないよ、ね、壱子。

「きゃあああん！ なんてすてき…！」

って、壱子撃沈っ？

見れば、クラスの女子はみな、全身の骨が抜き取られたかのようにふにやりと倒れ込んでいくではないかつ。

あわわ…背中からフェロモンやら、雅なオーラを感じる…。

「チグサ、おはよう」

こういうときだけ、どーして可愛く笑っちゃうんですか、帝サン。

あのまま教室にいと、クラスメイト全員が機能不全に陥りそうだったので、あたしたちは場所を変えることにした。ちなみに廊下を移動しながらも、取り巻きがわんさかと増えていくのには困った。結局帝サンが鶴の一声もとい天使の微笑みで蹴散らしてくれたので、また静寂を取り戻すことが出来た。

…そうだよ…二人は美少年ズなんだよ。あたしの場合、それよりもっと衝撃的な場面に出くわしたからそっちに傾かないだけで。

「何、じーつと見て」

「いや、何も…」

綺麗な顔だけど…腹ではどう思ってるか分かんないよ？ 腹どころか、「殺す」って完璧宣言されちゃってるし。とにかく油断しては駄目だ、もしもの場合は逃げるが勝ち。

すると肩に、ポンと手が置かれた。

「オージのかわいさに嫉妬してんだよ、な、チグサ！」

「あんたは黙っててください」

ちょっとイラッとしたのは、それが凶星だったからではない。断

じて、違う。

「それにしても、二人ともこの生徒だったんですね。そういえば昨日から制服着てましたけど、『来た』っていったから、てつきり生徒ではないものかと」

神代サンの手を振り払いながら、帝サンに尋ねてみる。帝サンはあたしを横目に見つつ、今日からだと告げた。

「きちんと手続きは踏んでる。今日から、ボクらは三年生なんだ」
「へえ、そうだったんですか。三年生なんですかーへー……さんねんせい？」

今、なんかしっくりない単語が耳に飛び込んできたような？

あたしが帝サンを指さすと、帝さんは頷いて自身を指さした。あどけない顔で、でっかい目がパチパチと瞬く。

「いつこうえ？」

「おー、チグサが二年生だからそういうことだな！」

答えを返してくれたのは、手の甲をさする神代サン。

……えええ、まじっすか？ 神代サンはともかく、あたしてっきり

帝サンは同じ年か一個下かと。あたしは初対面には腰が低いから最初っから丁寧に接してるけどさ、まさか本当に敬わないといけない年上だなんて。

「なんなら、ユーゼンせんぱいって呼んでくれてもいいんだぜ？」
「あんたは黙っててください」

この先輩、微塵も敬いたくなる気にならないのはどうしてだろう？

「オージ先輩か…」

…この先輩がかわいすぎるのはどうしたらいいと思いますか。

06（後書き）

何も考えずにブラーッと話をかいているので、話を区切りのいいところで切ろうとすると、一話一話が変に短かったり、やけに長かったりするかもしれません。それはもう今回のように。

…ってわけでおそらく次回はうんざりするほど長くなるかもしれませんこと、ご了承ください。

そっぴの統一できるひと、とてもソソケします。

この人たちと馴れ合っているものかと自問自答しながらも、でもそのかわいさに負けて、オージ先輩と呼ぶと、半裸野郎が俺も俺もと煩いので、結局二人とも名前で呼ぶことにした。

…でも、先輩らしくないんだよなあ。二人ともそれぞれに。全くもってファンタジーの住人だとは思えない。あたしを殺そうとしてるとも。

結局二人の真意は何うことができなかった。二人はあたしに対して危害を加えようとしなかったし、あたしも何も聞けなかった。ますます迷宮入り…。

二人は授業だからと自分たちの教室に戻っていったけど、あたしはそうする気も起きなくて、ふらふらと外まで来てしまった。

我が校の中庭には、小さな庭園がある。それは西洋のガーデンがモチーフとなっており、赤白ピンクのバラの道で、ところどころアーチが架かっていたりして、結構かわいい。道は十字に走り、人が二人横並びで通れるくらい。中心には女の人が水瓶を持つ噴水なんかあったりして、実は本格的だったりする。あたしはあんまり来たことないけど、こりゃ確かに癒されそうだ。

授業なんてもういいや、せっかく来たんだからゆっくりしていい。う。

ふう、と目に付いたベンチに腰掛けようとする。

「ぶひっ」

「のわあ！」

鳴き声のような音が聞こえて、慌てて飛び退く。ドキバクする心臓を押さえつけながら、ベンチの上を見ると、そこには正真正銘のブタがちょこんと足を折り曲げて寝そべっていた。

「ぶ、ブタがなんでこんなところに…？」

それも白ブタ。毛がうつすら生えていて、恐る恐る触れてみるとざらざらだ。

「学校で飼ってたのかなあ？」

聞いたこと無いけど。

ブタは、あたしに座られたことなんか気に留める素振りもなく、ただ悠々と寝そべってベンチを独占している。なんだか憎めないヤツだ。

「ちょっと、隣いい？」

と、聞いてみても全く無反応なので、無理矢理お尻を押しやって、開いたスペースにあたしも座る。なんか、落ち着く。

「キミ名前なんてーの？」

「ぶひ」

「なるほど、ブヒくんか。なんの捻りもないけど、母さんがつけてくれたの？」

「ぶぶう」

「ふーん…分かんないけど」

あたしは、お尻をむけたままのブヒくんを一撫でして、持ち上げてみた。結構重い。鼻息荒く興奮し始めたので、頭だけあたしの膝にのせて、もう一度ベンチに戻した。ちょうど頭があたしの膝半分くらいだ。気持ちがいいのか、目を細めてる。

「ブヒくん無防備だね」

「無防備なのはキミも一緒かな？」

あ、あれっ。ブタがしゃべっ……。

「どこ見てるのさ、こっちだよ」

途端、風が吹いたかと思えば、目の前には赤いポニーテールの男の人が立っていた。眼光を鋭くして、あたしを睨み据えている。

「だ、誰？」

突然さといい、その髪色といい、昨日の遭遇を思い出す。次から次へと何なのもう。今回の人は制服でもないから、完璧な不審者だ、不法侵入者だ。

「聞いても仕方ないよ。オレは今からキミを殺すんだから」
「殺す…！」

また、その話っ？

なんでこうも、人はあたしを殺したがるの！ あたしの人権どこにいきやがりました？ 今すぐ謝礼と一緒に帰ってこーいっ！

「嫌ですっ」

あたしはブヒくんをぎゅうつと抱きしめると、立ち上がって男の人との間合いを開ける。見れば男の人は丸腰だ。一瞬何か悪い冗談なのかとも考えたけど、その顔つきはそうはみえない。

殺すっていうならナイフでも銃でもあってもいいと思うけど、どこに隠して…。

「おとなしくしろよ」

…右手の人差し指を左手で握った？　まるで忍術を使うような…。

そこで初めて気付く。

そうだ、このテの人って…！

「^{ケッ}結」

「ぎゃああーっ！」

ば、バラがあたしに向かって襲ってきた！　えええ花が動くなんて冗談じゃない！　アハハウフなメルヘンワールドならともかくここはリアルワールドですことよっ？　お花が動いちゃうのはカワイイ不思議の国だけでじゅーぶんだと思うんです！

「痛ッ！」

バラのツルが腕に絡まる。だからあたしはアリスじゃないんだってばー！

完璧にあたしを狙ってる。手で必死に引きちぎるも、次から次へと、花が飛んでくる。操ってるのは、赤髪の男だ。指で印を結んだまま、不気味に笑っている。

「危ないっ」

ツルは容赦なくあたしに降り注ぐ。片手に抱えていたブヒくんま

で絡め取ろうとするとところを、すんでのところで庇う。

あいたあ、誰よあたしの頭をはたいたヤツは！ いい加減にしてよね、これ以上脳細胞死んじやったらどーすんですか。

「ブヒくん、大丈夫？」

ブヒくんを抱きしめていた力を弱める。ブヒくんはその湿っぽい鼻をふがふが鳴らしてあたしにすり寄ってきた。ちよっ、あのクサイんですけど。

思わず体を反らすと、ブヒくんはもぞもぞとあたしの腕から逃れ始めた。

「あっ、ブヒくんどこ行くのー！」

そしてあたしの手からひらりと飛び降り、大きな尻を振りながら駆けていってしまった。

…あれ、ごめん、傷ついた？

「ブタからも見放されて可哀想だよなあ？」

一連の流れを見ていたのか、赤髪の男がくつくつと笑う。なんつかムカツク。

「…むう」

逃げ回っているのに、状況は悪くなる一方だ。それもこれも、場所が庭園なのが悪い。逃げてても逃げてても、ここには無数にある花があたしを狙ってくる。逃げるのだとしたら、この場所から逃げてしまわねば意味はないのだ。助けを求めようにも、授業中だからかあたりには人気はない。こんな騒動が起こってること自体、誰も気付いてないようだ。

「もー！ 卑怯だとは思わないんですかつ、あたしなんか善良な一般市民、そんな未知な力に対抗できるものなんてひとつも持ってないんだからっ！」

やけくそになって、走りながら追いかけてくる赤髪にヤジを飛ばす。あたしにあるのは使えない脳味噌とあっても罪なだけの美貌だ。……それから、見栄も。

「誰が一般市民だよ。お前はそれにすら値しない」
「ぎゃあっ」

もうすぐ庭園の出口だ、というところで腕がツルにとられる。踏み出した足が引き戻されて、あたしは地面に片膝をついた。わあ、もう制服がぼろぼろだ。怒りや怖さも通り越して、やりきれなさを

感じる。

「…一体なんだってんですか」

あたしは腕をとられたまま、睨むように男の人へと目をやる。他の花たちは男の人の命令なのか、じいーっとあたしを見たまま動かない。

「まるでオレが悪者みたく言わないでくれる？　オレはセカイのためを思っただけでやってるんだよ」

「何がセカイかーっ」

殴りかかろうとしたあたしの開いた拳は、いとも簡単に捕まえられて、捻り上げられてしまう。左手にはバラのツル、右手には赤髪の腕。両手はもう使えなくなってしまった。

「まるで分かってないね。キミの存在がセカイを脅かしている。セカイを、滅亡へと導いているのさ」

「な、何を言ってる…」

ぎりぎりど容赦なく締め上げられて、声をだすこともままならない。理不尽だ、理不尽すぎる。人権は実家に帰っただけ？　いいから、怒らないから、おねがい、帰ってきてくださいお願いします。この際死神様でもいいから、助けて。

「キミを殺さないと、セカイは救われない」

最悪な夢を見てからだ。あたしがこんなに苦しんでるのも、怖い
思いをしているのも、不思議なことばかり起きるのも。

魔法使いさんが言った、「あなたは死んでいる」？　そうかもね、
そくだよ、きっとあのときから死んでいた。あたしの平穏無事な生
活なんて！

「キミは感謝するべきだ。自分と、このオレに」

赤髪はそう言うと、どこからともなくナイフを取り出した。とど
めはその手自らやってくれるらしい。振り上げたナイフが目にくら
りと光った。

切っ先がすぐそこにある。

駄目だ、もう。

最後に、フィリピン産のバナナが食べたかつ――。

「チグサ！」

――…た？

迫ってくるはずのナイフは、もはやそこには無かった。

「…あたし、生きてる？」

あたしを締め上げる力が弱くなったので、ここぞとばかりにその手から離れる。ついでにバラのツルも引きちぎってやった。

肩で息をしつつ、何が起こったのか把握しようとする。誰かがあたしを呼ぶ声がした。誰かがあたしを助けてくれた。

聞こえた声は……。

「ぶひーっ！」

って、ブヒくんでしたか！

赤髪の顔にお腹から張り付いて、視界を奪っている模様。なんだ、逃げたんじゃなかったんだ。なかなか勇敢なおブタ様であるっ。

「って、シロに全部持ってかれたなあ」

「ユーゼン先輩っ？ どうしてここに！」

やっぱり、聞こえた声はユーゼン先輩のものだったらしい。あたしの側まで来ると、頭をぽんと叩いて、もがく赤髪を、おなじように赤い瞳で見据えた。

ユーゼン先輩…なぜあたしがここにいて分かったの？

「チグサ、大丈夫だった？」

ユーゼン先輩あるところにオージ先輩もあり。いや、逆かも知れないけど、そこにはオージ先輩の姿もあった。

あたしの顔をうかがって、少し眉をひそめるとあたしの腕の傷に気付いたのか、左手の指を弾き、あたしの腕に添えた。暖かい…。ツタが絡まって血だらけだったあたしの腕は、完璧とはいかないものの少しは癒えていた。血も跡形もなく消えている。

「とりあえず応急処置。よく頑張った」

オージ先輩は、気の抜けたあたしを見て、優しく微笑むと頭を撫でてくれた。うう、そうされると安心して、泣きたくなくなってしまふ。

「うううぐう、おーじぜんばいいい」

「汚いから泣くな」

あ、ひでえ。

そんなあたしたちを余所に、ユーゼン先輩は赤髪と対峙していた。ブヒくんはひつぺがされたらしく、顔にはもうくっついていなかった。

「せんぱいつ、あのひと、魔法使いです」

側でまた二人を見るオージ先輩に告げる。先輩は分かっていると言うが、加勢しようとしてない。ユーゼン先輩は一人で大丈夫なのだろうか。そういえばユーゼン先輩が魔法を使っているのを見たことがない。いつもオージ先輩が指ばっちんするのしか…。

「オージ先輩…」

「大丈夫だ、ユーゼンああみえても強いから」

オージ先輩は二人から目を離して、あたしを見た。その目に迷いは無かった。本当にユーゼン先輩を信頼してる。

…どうして、二人はあたしを助けてくれるんだろう。あたしのこ
と、殺そうとしてたんじゃなかったのだろうか。このまま放ってお
けば、あたしはきつと死ねたんだろう。

でも、こんなときにそんなこと、聞けなかった。

「ったく、小賢しい奴らだよ。ユーゼン、てめえも久しぶりだな」
「どちらさま？」

「こらあ！ 忘れてんじゃねえ！ オレはジャメロンだ。ジャメロ
ンディアス！」

「ハリウッドスターのぱちもん？」

「ばかー！ うるさいだまれー！」

なんだこの緊張感のないやりとり。

…赤髪もなかなかに愉快な人なのかもしれない。

「チツ、そんなこたあもういい。オレはあの女を殺るために来たん
だからな」

ままままだ言ってる…！ なんてあたし…！ 簡単に殺されたら
たままないよ。

あたしはこっそり、オージ先輩の背中に隠れた。…ってこんな華
奢な体にあたしの体が隠れきるかなり心配なんすけど。あ、ここ
となく悲しさが。

あたしがそうこうしてるときに、ジャメロンディアスは戦闘態勢に入ったようだ。ナイフを片手に構えて腰を落とし、踏み込むタイミングを計っている。それとは反対にユーゼン先輩はやたら余裕だ。ポケットに手なんか入れちゃったりして、まったく防御力のないポタン全開シャツがヒラヒラしている。

「オージ先輩、本当に…」

やっぱり信用ならなくて、オージ先輩から身を乗り出したそのときだった。

ガキン！ と金属が激しくぶつかる音が、耳に痛いほど飛び込んできた。すっかり油断していたあたしはモロに衝撃を食らう。

「一体何が…」

恐る恐る向けた視線の先には、驚くべき光景が広がっていた。ジヤメロンディアスが仕掛けたのだらう、振りかざされたナイフは半分に折れ、右足を振り切った状態で立つのはユーゼン先輩。

ユーゼン先輩が、一蹴りでナイフを折ったのだ。

「う、うそ」

うつうつ、嘘でしょ？ な、ナイフってそんなに簡単に折れる

もののなの？ それに、足で蹴ったって！ 怪我は？

ちよつとユーゼン先輩、呑気に両手ポケットインしてんじゃないですよ！

「チグサ、危ない」

「——え？」

くい、と引つ張られた矢先、あたしが元いたところにナイフの折れた先がクサツと音を立てて刺さった。

「んちよつ…！」

サーっと、血の気が引く。

「ちよつとユーゼン先輩！ ここここ、こつちのことも考えてくださいよって、えええ、これちよつとあたし死んでたんじゃないっすか！ 何気に狙ってます？ 狙ってますっ？ あああたしなんか、さつくりぽつくりですからあ！」

「あはは、悪い悪い」

悪いじゃねえよ、無神経なあつ！ オージ先輩も無言で耳塞ぐのやめてくれませんか？ そんなにうるさかったですか、あたし。

「何っ…よそ見てんだよっ」

「俺さ、集中するとさっ、まわりに意識が向かなくっ、なっちゃってっ、さっ!」

…そうは言いますけど、先輩。

さっきから、あたしを向いて言葉を返しながら、ジャメロンディアスの攻撃をひらりひらりと交わしています。あの大きな体をどう動かしたら、あんな軽やかなステップになるんだ。それも、一切見ずに。

「バカにしてんじゃねえっ」

ジャメロンディアスが怒りたくなるのも道理だ。またも取り出した新しいナイフを力任せに振り回しているようだが、全くユーゼン先輩にかすりもしない。

…ユーゼン先輩、本当にやるときはやる強い男なんじゃ。

「そろそろ、もうオシマイだ」

ユーゼン先輩はそう言うのと、ナイフを振り回すジャメロンディアスの手を取った。すると、流れるような動きで鳩尾に膝蹴りを食らわせ、ひるんだところに背中から手刀一本。素早い動作で、あたしもかろうじて見えたくらいだ。

「ぐっ…」

ジャメロンディアスは地面に突っ伏すことになる。ユーゼン先輩は油断することなく、腕を背中へと捻り上げて、相手の動きを制してしまった。

なんだか、あっさり…。あたしがああも逃げ回ってたことが情けない気がする。でもホツとしたことも事実だ。変態変態と思ってたけど、なんだかんだ先輩ちよつとかつこよかったし。

「オージ、ちよいと持ってた」

ひょいっと投げられたのは、ナイフ。オージ先輩が何のためらいもなく手を伸ばすので、ヒヤヒヤしたが、そこも心配いらなかったらしい。ダイレクトに柄の部分を取ってしまった。

「他にも武器隠し持っていないだろうな？」

「ユーゼン、腕あわせて」

ジャメロンディアスの身体をこそそこそあさるユーゼン先輩のもとに、オージ先輩が向かっていく。何をするのだろうと思えば、指ばっちん。突如ひもが現れ、いとも簡単にジャメロンディアスの両手を拘束してしまった。

なんでもできるんだなあ。あの指ばっちん。

…ってアレ。できるの？ ソレ。昨日あたしを拘束するときには
手近にひもがないからって……。

「……………」

あの半裸、やっぱりただの変態に違いない。

確保したジャメロンディアスの身柄は、オージ先輩のもとで預けられることになるらしい。オージ先輩が携帯電話でどこかに連絡すると数分後には黒服の男の二人が到着し、ひもでぐるぐるに縛ったジャメロンディアスをどこかに連れて行ってしまった。

オージ先輩って一体何者？ そんなに簡単に人を使えるってどこかのご令嬢とかなのかもしれない。あ、性別間違えた。

「どうしよつか？」

庭園は、さほど崩れてはいなかった。ジャメロンディアスが魔法で操ったのだと言っても、花には花の意志があったらしい。一段落ついて、各自おのおの持ち場へと戻っていったのだ。

最後に千切れてしまった可哀想なバラを拾って、ユーゼン先輩が切り出した。

「どうするって？」

「授業だよ、今から戻るかって話」

それを聞いて、あたしは俯いて拳を握った。ブヒくんがあたしの足にすり寄っている。いつの間にか気に入られてしまったらしい。聞けばオージ先輩のペットらしく、今回あたしが危機に陥ったとき

も真つ先に主人へと知らせてくれたためにあたしはギリギリ殺されずに済んだのである。あたしにとっても命の恩ブタだけど…ブタって…。オージ先輩がブタって…。

「チーグサー？」

あたしが黙りこくっているのを心配したのだろう、ユーゼン先輩があたしの顔をのぞき込んだ。30センチほどは身長差がありそうだから、かなり腰をかがめている。

「あつ、イエ！ 授業、ですよね…」

本当だったら、戻らなきゃいけないのだろうけど。またすっぽかしたら壱子からおバカにされるのだろうけど。

「チグサ、いいんだよ」

オージ先輩が庭園の出口へ向かいながら、そう言った。

「はい…あたし、聞きたいことがあるんですっ」

言うやいなや、ユーゼン先輩から思いっきり背中を叩かれて全身

が振動した。

「ありえない」

真っ先に出た言葉がソレだった。

「って言うんなら、お前の目と脳が無能なんだろうーな！」

うるせーんですよ、ユーゼン先輩。

アハハと無遠慮に笑う先輩に軽蔑を込めた視線を送り、やや満足すると、もう一度「ありえない」物へと目を移してみる。とは言っても、下から上まで見ていては首が折れてしまいかもしれない。

そこにあるのは、超高層マンションだった。

「…なんですか、ココ」

授業をぶつちぎって、どこにくるかと思ったら。

あたしとしては、山ほどの聞きたいことをとりあえず誰にも邪魔されない場所で聞くことが出来ればどこでも良く、それはつまり学校でも良かったのだが、とりあえずついてこいと言われて、おとな

しくついてきたのがここだったというわけで。

わりと賑やかな住宅街……って、いうかぶっちゃけ高級住宅地じゃないっすか。他のマンションから頭どころか全身くらい飛び抜けた、目の前のでかい建物…明らかにまわりに比べて異彩を放つマンション…まさか、コレって。

「んなもんもわかんねーのかよ。ここは、家。俺たちの家だっつーんだ」

なぜか、崩れ去った。何かが、あたしの中で崩れ去った。

「ゆ、ユーゼン先輩の…?」

まさか、そんなことってあるものか。どれだけ目や脳が無能でも構わない。いくらでも言うよ、あたしは言っちゃいますよ、ありえないって！

「まー、そうはそうだけど、今はオージも一緒だ！」

一体どうしたらこんなところに住んじゃえるんだろう…やっぱりユーゼン先輩も金持ち息子説浮上？

ああもう、無邪気に笑ってるんじゃないですよってんだ…。

マンションの入り口に入ると、さつそく高級っぷりを見せてくれる素晴らしいかな、超高層マンション。緩やかに弧を描く分厚そうな自動ドアがまずお出迎えしてくれた。どうやって入るの…？まさかカードキー？

どうも貧乏人には落ち着かない雰囲気ですわそわしつつ見ていると、オージ先輩がドアの隣に設置されたキーパッドに近づいた。何なに、それともオーソドックスに番号入力？

成り行きを見守っていると、結局そこに顔を近づけるだけでドアが開いた。…おおい、ナニソレ、何で開けちゃったのマンションくん。

それからブタも一緒にエレベータにのりこみ、ボタンは50階をポチリ。ふつかふかの絨毯の上に棒のように立って到着を待つ。おおい、大丈夫なの？ 50階って、エレベータくに休憩は必要？

「なんだよ、さつきから気持ち悪いな」

「チグサ、びびってんの？」

エレベータがピーンと到着すると、すぐそこに高級そうな扉がどばーん。扉つつーか、またオージ先輩が顔を近づけると自動ドアのごとく勝手に道が開けた。あたしの家のオンボロな扉とは大違い…だってアレって立て付けが悪いのか、一回足で蹴りを入れなければしっくり閉まらない。なのにここは勝手に開いてくれるなんて…。

衝撃の数々にふらりと足を踏み外す。

「……！」

地上が、小さく見えた。

そこにはなんの趣味で作ったのか、上から下までガラス張りの一角が。まるで空中に浮いているような気さえして意識がフツと遠くなる。

「おおい、何してんだ。そんなに高いところが珍しいか？　なんとか煙は高いところが好きっていうもんなーアハハハ」

あたしはげっそりしながら、どうにか家の中へと足を踏み入れた。

あたしが、落ち着いたのは一時間も経ってからだった。部屋にお邪魔するまでにすでにカルチャーショックでくたくたしていたのに、中に入ってまでも驚きの設備があたしを休ませてはくれなかった。廊下には豪華なカーペット、40畳ほどはありそうなりビング、きらびやかなシャンデリア、家具もいちいちアンティークで落ち着いてくつろいでなんかいられるわけがない。堂々とでかい顔してくつろぐブタが本当にうらやましい。

「はい、ココア」

「あ…ありがとうございます」

皮のソファに恐る恐る座るあたしに、カップが差し出された。受け取ると、寝ころぶユーゼン先輩の側にオージ先輩は腰掛ける。あたしだけが座るのも何なので、ずるずると滑るように地面に座り直した。…けど、マジでふかふかすぎだつてこの絨毯。

「お腹すいてない？ なんなら作るけど」

オージ先輩が指さすのは、ダイニングとは別立てのキッチン。ここからすでに遠目にしか見えないんですけど…。

「ええと…」

「食べるー!」

と、早い反応で起きあがるユーゼン先輩。

「誰もユーゼンのために作るなんて言っていないんだけど」

と、冷たくあしらわれるユーゼン先輩。しぶしぶ元の体勢に収ま

ってしまった。…二人って本当に仲がいいんだか悪いんだか。でも一緒に暮らしてるらしい…。ここで二人で…どれだけセレブなんですか…。

部屋を見回してみても、二人が生活しているような匂いが全くない。なんていうか、シンプルというより殺風景って感じ。たまに帰ってくる場所みたいな、ただそこで過ごすだけの場所、みたいな…。

「さて、聞きたいことたくさんあるんでしょ？」

逸れていた思考が、オージ先輩によって引き戻される。そうだ、あたしはそのためここに来たんだった。

「…はい、たくさん」

カップをぎゅうと握りしめる。暖かさが手から伝わって、体にじんんとする。

聞きたいこと、それは二人のこともそうだし、ジャメロンディアスのこともそうだし…でも、なんとなく、分かったような気がしていた。あたしが狙われたこと。不思議なことが起こって…、あたしの命は…。

「あたしは、何か理由があって殺されねばならない」

絞り出した声は、かすれていた。

「ジャメロンディアスは言っていました。あたしがいることでセカイが滅びてしまうって。あたしが死ねばセカイが救われるって。それは分かりました。だから二人もあたしを殺そうと、するんですね？」

せきを切ったようにあたしの口からは言葉が溢れていた。あたしがうすうす感じていたこと、それを吐き出すように口にした。間違っていないのか、二人は静かにあたしの言うことを聞いている。

殺す、この二人は今でもそう思っているのだ。

「教えてください。あたしは、どうして殺されねばならないのか、それを」

質問にしてみると、それはとても簡単なことだった。たくさんのことがあったから、たくさん聞きたいことがあったはずなのだけど、今はすべてがこのことに集約されているような気がする。

しばらく口を結んでいたが、オージ先輩が机にカップを置く音で緊張が少しほぐれた。

「じゃあまずはセカイの仕組みについて知ってもわなきゃいけない」「セカイの仕組み……」

「いい？ チグサ。今から言うことを疑ってはいけない。心の底から信じなくちゃいけない。キミにそれができる？」

ユーゼン先輩は手のひらをあたしに向けるように見せた。

…いきなり何を言い出すんだろう。見るからに嘘をつく雰囲気ではないし、今までも信じられないことを目にきて、どうにか信じてやってきた。それを今更、頑なに信じないことなんてあるはずがない。

あたしはそう意味を込めて、オージ先輩の手のひらに自分の手のひらを重ねた。

「分かった。じゃあ説明する」

オージ先輩は重々しく頷いた。

「このセカイに住む人間には命が二つ、与えられている」

10（後書き）

今回と次で、ようやく真実が明らかになります。ていうか長いですね…でもまだ本筋の前段階のような気もしないでもなくなく…。

軽くしりあーすな雰囲気ではありますけど、ここさえ突破すればどうにか、と思います…！基本半コメディですから。もうあと半分は優しさ…ではなく虚しい空気かもしれません（＾o＾）

11 - 真実

世界は一つ。神様も一つ。宇宙も一つ。

その宇宙に散在する惑星はいまだ未知なる存在のまま。

ただ命だけが一人に二つ、与えられていた。

パラレルワールド。

地球の中心。踏みしめる大地の下。地核よりも上。

同じ世界が広がっている。

同じ人間、同じ顔、同じ性格。

だがそこでは常識が一つ異なっていた。

「コチラとは違う、アチラ側の人間は、魔法が使える」

……………ハア？

「チグサ、あからさまに嫌な顔すんな」

どうやら顔に出ていたらしい、慌てて取り繕う。

「いや、いいえ、あの」

正直、意味が分かんなかった。

実際、オージ先輩がしてくれた説明は実に簡単だったのだ。愚かなあたしでも分かる、一人に二つの命が与えられているという理屈分かる。でも、分からない。

「…それって、もうひとりのあたしがいるってことですか？」

「まあ、確かにいたな」

いた？ なにそれ、過去系？

尋ねる前に、オージ先輩は続けた。

「もちろん、一緒にいることはないし、お互い会うこともない。同じ人間でもアチラ側の人間はコチラ側の自分を知らないし、コチラ側の人間はアチラ側の人間を知らない。まさか、自分が魔法を使ったり、使えなかったりなんて知るはずもないんだ」

同じ自分が二人…。魔法の世界アチラ側と、あたしがいる普通の

世界コチラ側。確かに信じがたい…。けど、信じる約束をしたし、確かにオージ先輩たちを最初に見たとき、アッチとコッチとかそんなこと言ってた気がする。

「そんなこと、全然知らなかった…」

「だから言っただろ？ お互いに知らないんだよ。そもそも行き来できるもんでもねーし」

そうになると、不思議なのがオージ先輩とユーゼン先輩だ。

「じゃあ、二人とも、こっちにもうひとりの自分がいるってことですか？」

「残念ながら、それは違うんだ」

…ややこしいな。あたしは向こうにいて、二人はこっちにいない？ ちんぷんかんぷん。

「俺たちは、トクベツなんだ。言うなれば、このセカイの管理者。お前勘違いしてるみたいだけど、どっちかつと、俺はコチラ側寄りだ。オージはアチラ側だからな。二人でセカイの均衡を保ってるんだ」

二人でセカイの銀行を保ってる？

「日銀総裁？」

「真面目に聞けっ」

あいたっ。ユーゼン先輩に頭はたかれた。

「ボクたちは、命が一つずつしかない唯一の存在なんだ。アチラもコチラも世界は繋がってる。魔法があるかないかだけで、あとは同じだ。そのひとの住む場所も、家族も結婚相手も、死ぬときも、言わなければ人生全てだ。だからそれが狂えば、ズレが生じてしまう。セカイすら分かたれて、生存できなくなる。だからボクたちはそれを管理するものなんだ。唯一、セカイに干渉しないものとして」

オージ先輩は、気を取り直してもう一度かみ砕いて説明してくれた。あたしも真面目に聞いているはずんだけど、どうしてもどこか余所の世界の話のような気がしてしまう。ただ、魔法の存在、それがあたしに信じることを後押ししてくれている。

話は壮大だ。だとしたら目の前にいる二人はもって壮大な存在だ。

「じゃあ、二人は…神様なんですか？」

「違うよ」

笑って言う、オージ先輩は確かにあたしたち人間と同じように見える。それだけで、少しホッとする。オージ先輩と、ユーゼン先輩は確かに不思議な存在だ。でも、オージ先輩は俗に言うアチラ世界

でユーゼン先輩は俗に言うコチラの世界で生きているだけの、ちょっと特別な人間なだけなのかもしれない。

「…セカイのことはなんとなく分かりました。まだ、難しいこともあるけど、信じます。もう一人のあたしがいるってことも」

「そう思ってくれることはいいんだけど、…チグサ」

「な、なんですか？」

何か間違っていただろうか？ 少しトーンの下がった声で呼ばれて、腰が真っ直ぐ伸びる。

「アチラ側のキミは、もう死んじやってるんだ」

…え？

「ちょ、ちょっと待ってください。な、何の冗談デスカ？」

「冗談じゃねーよ」

そりゃそうだ、そんな冗談タチ悪すぎる。

すでに衝撃だった命二つ説ですらイッパイイッパイなのに、さらなる衝撃にあたしの頭はいろんな意味で爆発寸前だ。堪えるように、両手の拳を握りしめる。

「で、でも、あたし死んでるって、でもあの、人生一緒なんですよ？死ぬときも一緒ってさっき言ったじゃないですか！なんでもこのあたし抜け駆けしてるんですかっ？」

それが本当なら、なんて自分勝手なあたしだ。いや、それもこれも、あたしだけだ。

一体この年で死ぬなんて、病弱にも程があるっ。せつかく毎日健康的に暮らしてたのに何があったら、そうもあっさりぽっくりいけるん——。

「…あ、れ…」

あたし、死んでる？

家が火事になって、ナイフで刺されて、トラックに轢かれて…。なんだか、見たことある、感じたことのあるような結末。

「あなたは死んだのね…」魔法使いの言葉。

「あ、あたし、死んじゃったんだ！」

机に置いたはずのカップが、バランス悪く倒れた。

「って、うわあっ、じぼっ…」

机に広がるココアが、その領域を超えてあたしの膝までしたたりおちる。ああ、スカートが茶色く染まっていって。

それが、まるで血みたいに。

「なにやってんの、ほらタオルで拭いて」

「…あ、あれは夢じゃなかったの？ あたし、本当に死んでいたんだ…」

タオルを受け取ながら、ようやく納得する。リアルな夢だと思ったら、もう一人のあたしの結末だったなんて。タオルでココアを拭いてみても、綺麗に色が落ちることはなかった。あたしはあたしの半身がすっぽり抜けてしまったような寂しさを、今になってようやく感じた。

「だからだ」

そう言葉を紡いだのはユーゼン先輩。下を向いていたあたしは作業を止めて、そちらを見る。ユーゼン先輩の瞳は、言葉以上に語っている。

「だから、お前も殺さなきゃいけなかったんだ」

あたしが欲しかった答えは、もうそこまで近づいてきていた。

「言っただろ、さつき。アチラとコチラのバランスが崩れれば、セカイは存在できないって。アッチのお前だけが死んでしまった理由は分からない。でも、現にコチラ側のお前は生きてここにいる。だから、このままだとそれぞれのセカイの未来が変わってしまうんだ。今じゃない、長い目で見ると、だ」

「で、でもあたし一人くらいじゃ…」

どうにかあたしがいる、この状況を正当化したくて、縋るように言葉を向けるも、オージ先輩が静かに首を振るだけだった。

「ほんの些細なことでも未来は変わっていく。小さく、でもそれはしだいに大きくなっていく。それは、キミが結婚する相手の運命も変えてしまうし、生まれる子孫も変わっていく。キミが生む経済効果も変わるし、やがてはお金の流れも変えてしまう。つまり、バタフライ効果っていうんだけど」

だ、駄目だ。もうあたしの頭では理解できないことになってきている…。

「チグサ。難しい理論は説明すればまだ山ほどある、けれど理解するのはただ一つのことだろ？ お前は命を一つなくしちゃってるんだ」

理解はあたしの範疇を超えている。信じてきたものだって、覆さ

れてしまった。命はただ唯一のものだと思っていたのに、あたしはもうなくしてしまっていて。あたしはここにいるのに、もう一人のあたしはもういなくて…。

二つの完全な命は、一つを失って不完全なものとなった。不完全な命は、未来も、セカイまでも脅かしている。

——もうはんぶんこのあたしも死ねば、なにもかもうまくいく？

「そ、そうか…、あはは、ようやく分かりました。あたしが狙われたことも、オージ先輩たちがあたしを殺さなくちゃいけないことも」

一度真実が分かれば、意外にもすんなり受け入れることができた。死ななきやいけない事実は、さほどあたしを傷つけたりはしなかったようだ。ただ、先輩たちだって好んであたしを殺そうとしているわけじゃないということが、あたしを安心させる。

悲しいことだけど。でもそれ全てが真実なら。

意を決して口を開こうとしたところを、オージ先輩が遮った。

「チグサ、勘違いしないで。ユーゼンもあんまり脅すなよ。…大丈夫、心配しなくてもいいよ。ボクたちはキミを殺すつもりはないから」

「え…？」

思ってもみなかった救いの言葉に、またココアをこぼしてしまった。

驚くほど広いバスルームは、かぐわしいフローラルの香りで包まれていた。

「す、すごい」

目の前にはどこのホテルでも見たことのないような大きな浴槽。どこぞの高級な石をつかつてるのか光沢の眩しい黒色。それだけでも驚きなのに、広さはあたしがゆうに五人も入れそうなほどあるのだ。

なんだかちょっとゼータク。

ドキドキしながらも、ちゃっぷんと浴槽に入ってみる。湯船に浮かぶ色とりどりの花がゆらゆら揺れる。はあ、とため息が出た。

「余は満足じゃ……」

平凡な家の子では絶対味わえないであろう、この高級なバスルーム。思わず、はしたなくも泳いだりなんかしちゃって。

「ぶはー」

しばらくはしゃいだから、一息つく。ふう、こうやって静かな空間に跳ねる水音ってなんとなく心地良い。

あたしはつるつるの浴槽に腕を乗せて、外の景色を見てみた。なんと、このバスルーム、外に面している部分は全てガラス張りなのだ。一応カーテンは引くことができるようになっていて、ここは地上から何百メートルも離れた50階。隣接するマンションもここまでは到達していないし、よほどのことがない限りこの内部までは見えないだろう。だから恥ずかしいながらも解放感を味わってみようとあたしはカーテンを開け放っていた。

空は淡いピンク色だった。ちょうど夕暮れの時間帯で、雲の隙間からにじむ夕日の光がほのかに町並みを照らしている。不思議な色合いはもやもやしたあたしの心みたいだ。

「あたしの存在がセカイを滅亡に導くなんて…」

ぶっちゃけ今でも信じがたい。あたしなんて今まで平凡に生きてきて、犯罪だつてやったことないし、どちらかというと省エネしたり地球に優しい存在だったと思う。それがもう一人のあたしが死んじやつただけで…。

別世界のあたし、どうして死んじやつたかなあ。あんたがガンバって生きてさえいりゃ、こんなことにならなかったのに。

けれどそんなことを悔やんだってしょうがない。本当だったらコチラのあたしも死んでたんだ。今のあたしが生きてるだけラッキー

って思うことにしよう。

——それに。

「先輩たち、あたしを殺す気はないんだって」

誰にともなく呟いてみる。その後、えへへ、だなんて自分でも気色の悪いと思うような笑みがこぼれて、頬をぱしんと平手打ち。ってなんだって自分はこんなコントみたいなこと…。

でも、あたしは嬉しかったのだ。オージ先輩は、こうも言ってくれた。「はんぶんこのチグサだって生きている、そんな簡単に殺したくない」って。果てしない未来、滅ぶかも知れないセカイよりも、今ココにいるあたしを選んでくれたって、そう思ってしまう。

でも、今こうしてる間も未来は少しずつ変わっている。コチラの世界とアチラの世界が少しずつ分離し始めている。

「そつだよ、喜んでばかりもいられない。先輩たちはあたしだけを選んでくれたんじゃない。あたしを殺さないでセカイを救う方法を考えてくれているだけだ」

花びらをフンツと鼻息で飛ばす。はんぶんこなあたしができることを考えよう。今はそれだけだ。

——それにしても。

湯船にもう一度浸かりなおして、ふと、思う。

人様のそれも男の人の家でお風呂を頂くなんて、あたしなんて思
い切ったことを。

「……」

いくら、ココアを二度もこぼしたからって。そりゃオージ先輩が
汚いって言うから入らせてもらっただけだし、こんなほいほい入っ
ちやって良かったの、あたしっ？

ま、待て待て待て。なにも不純なことじゃないじゃん。ただ、汚
れちゃったから綺麗にするっただけで。いや待て待て待て待て、落
ち着けあたし。

…な、何も緊張することない。男の人って言ってもあたしより可
愛いオージ先輩と、何も考えてなさそうな変態ユーゼン先輩じゃな
いか。意識することはない。

——って、変態？

「チーグサー！ お湯加減どーお？」

「ゆゆっ、ゆゆユーゼン先輩！ 何入ってきてんですかああ！」

ドカーンと扉をブチ開け入ってきたのは、その名の通り変態だっ
た。

「何って、湯加減確かめにだぜー」
「そんな親切いらんわ！」

冗談なのか本気なのか、きょとんと何も分かってなさそうなユーゼン先輩に思いっきりお湯をお見舞いしてやる。湯加減だったらこれで確かめてくれ。熱かったらそのまま火傷してくれ。

「ちよつ、やめろって、誰もお前の裸になんか興味ねえよ」
「逆にむかつくわ！」

いや、興味もたれても困るけど。
それにしてもお湯の上には花が浮かんで良かった。咄嗟に顔の半分までお湯に使ったけど、この花がなかったらどんなことになってたか…考えるだけでも末恐ろしい。

あたしがぎゃあぎゃあ騒いでると、その騒ぎを聞きつけたオージ先輩がやってきて、「ちよつと目を離れた隙に何やってんだ」と本気でお叱り。それから引つ張って連れ去られていった。ざまあみろユーゼン先輩。

脱衣所に置いてあった着替えを借り、あたしがリビングに戻るとそこには色とりどりの豪華な食事が並んでいた。見れば、キッチン

でオージ先輩が料理をしているようだった。エプロンなんかしちゃうところが本当にかわいいよなあ、あの人。ズボンはいてなきや本当に女の子にしか見えない。

「お、上がったかー」

ぐーすか寝ているらしい、シロくんの隣に腰掛けると、つまみ食いしながらユーゼン先輩が現れた。さっきのことあつてか、まともに対応する気にはならない。ので、つーんと顔を背けてやる。

「風呂上がりだってのにこの平凡さ！ 全くオージを見習ってほしいぜ、あの湯上がり美人を」

「んがっ、言うに事欠いてそれっすか…！」

悪かったですね、平凡で！

ったく、ユーゼン先輩は口を開けばそればかり。さっきあたしを選んでくれたって喜んだあのときめきを返して欲しいよ。もちろんユーゼン先輩の分だけね。

「確かにオージ先輩はかわいいですけどおっ…」

それは認める。ああやって構いたくなるくらい美人なのは、嫉妬するくらい認める。

「だろ？ それだけにもつたないんだよなあ…」

ユーゼン先輩はあたしの向かいにどかつと腰を落ち着ける。料理から出る湯気ごしに見える先輩の視線はあたしではなく、キッチンにあるその姿に向けられていた。

「もつたない、ですか？」

「そ、俺たちはトクベツだからよ、普通に世界の一員としてまわりと同じようには生きていけねーんだ。俺たちはあくまで世界の管理者だから、セカイに干渉することはできない。当たり前前に恋することすらできないんだよ」

もつたないねーよなあ、と口をとがらせ、ぼやく先輩。

言われてあたしは、オージ先輩ではなく、ユーゼン先輩をじっと見ていた。確かにそうなのかもしれない。もとから一つの命しか持つていない先輩たち。どういう存在なのか未だに分からないところもあって、だったら今こうやって一緒にいることも不思議で。

でも、それはオージ先輩だけじゃないんだ。いくら無神経でも、変態でも、ユーゼン先輩も同じだ。

「先輩たちって普段はどんなことをしているんですか？」

「一応は普通に生活してるぜ、当たり前人間のようにな。でもそれがまわりに影響を及ぼすことはないんだ。誰の心にも深く残らないし、何も失わないし得ることもない、しゃべる石ころってもんだな」

ユーゼン先輩は新たに食事へと手を伸ばし、ぱくりと食べる。まるでなんでもないように語ってるけど、石ころ、ってすごく寂しいことなんじゃないかなあ…。先輩たちの存在は、聞いてもよくは分からないけど。本当はあたし以上に辛い目にあっていたりするのかもしれない。

「だからさ、オージとも仲良くしてやってくれよな！ 今このときだけは俺らもセカイに干渉できる。ほんの少しでもいいから思い出つてのは欲しいよな」

「先輩…」

まさか、あのユーゼン先輩がこんなことを考えているなんて。非常識で空気の読めないだけの人間じゃなかったんだなあ…。

「や、でも俺が独り占めって状態もオイシイけどな！」

「オージせんぱーい。ユーゼン先輩が調子のとてまーす」

せっかく見直したのに…。やっぱりユーゼン先輩って見込み通りの人間だ。

「何やってんだよユーゼン。ったく、チグサ、何の話してたの？」

「ユーゼン先輩が、そのナリして変態とかもったいないって話です」

バナナがめいいつぱい盛られた皿を手にしてやってきたオージ先輩に伝えると、それは言えてる、と賛同の言葉を頂きました。

オージ先輩の料理は文句無しにおいしかった。生ハムが乗った新鮮なサラダを前菜として、あさりのスパゲティ、キャベツのポトフ、とろりチーズのグラタン、牛ヒレ肉のグリルハンバー、グロールキヤベツ…ってちよつと作りすぎ！ いつのまにこんなに作ったの！…が、先輩の料理の腕はもはやプロ級で、結局あたしが食べたいと言ったバナナも最後にぺろりと平らげてしまった。

「ぷっはー、食べた食べたー」

まさかこんな贅沢にありつけるとは思わなかった。ぽっこりふくらんだお腹をぽんぽん叩きながら息を付くと、オージ先輩から呆れた目で見られてしまった。

「呑気だよな、チグサも」

「いいじゃないですかー…、って『も』ってなんですか、『も』って！」

心当たりがあったので、首をぐるうり回転させてその人物を見た。

「はー、もうお腹一杯だぜえ」

…見たことのあるような格好してくつろぐユーゼン先輩の姿。あたしは慌てて居住まいを直した。

「チグサ、ゆつくりするのもいいけど、チグサもボクらも時間はないんだ。ボクたちは今セカイに逆らっている状態なんだからな。早いところ決着をつけないと」

オージ先輩が空になったお皿を集めているのをあたしも手伝いながら、とりあえず頷く。

それは分かっているんだけど…。あたしが死なずにセカイを元に戻す方法、ちよつと考えただけでもぱつとしない。

「んー、今の状態はアチラにいないあたしがコチラには存在する、つまりこの矛盾を埋めればいいってことでー」

矛盾を埋めるって、そりゃあたしが死ねば一発解決？　みたいなの？

「絶望するな」

「そうは言われましてもおー…オージ先輩い。はんぶんこのあたしが消える以外には…」

と、悩みつつもお皿を持っていくこうとするも、オージ先輩は動か

なかった。じーつとしているので、どうしたんだろうと声を掛ける
と突然がちゃんとお皿を置いてしまった。

「せ、先輩？」

「――逆だ」

「ぎゃ、逆デス力？」

先輩の言葉は的を射ない。何か思いついたらしきことは分かる
んだけど…。とりあえず続きを待ってみると、オージ先輩は突然あ
たしに手を伸ばしてきた。

「わあっ？」

「チグサ！ そうだ、もう一人のチグサを取り戻そう！」

そのまま勢いで背中から地面にゴン、と思いきや、あたしの背中
を支えるもののおかげでそれは免れたようだ。前からは飛びつくよ
うな形であたしに迫るオージ先輩と、後ろには片手であたしの背中
を支えるユーゼン先輩。

――待って、なんだって？

「なるほどな、お前を消すんじゃないくて、戻す、んだよ」

二人に挟まれてドギマギするあたしの背中から声が掛かった。

「も、戻す？ それって、そんな簡単にできることなんですか？」
「簡単にできることじゃない。だから、それが間に合わない場合は最悪お前は死ななければならぬかもしれないかもしれない」
「でも、やる価値はある」

二人はなにやらやる気満々らしい。あたしは二人に気圧される形で「ハア…」と頼りない返事をしてしまったが、よくよく考えるとこれはかなり喜ぶべきことなんじゃないだろうか。

死ななくて、なおかつセカイも救える方法。ファンタジーな二人を前にして、あたしが行うのは魔王を倒す！ ことでも、お姫様を救う！ ことでもなく、自分を取り戻すだなんて。なんだか間抜けな気がしないでもないけど、それが今あたしに求められているハッピーエンドの方法だ。

結局詳しい話はまた明日ということになって、あたしたちは就寝することにした。

「——って、お泊まりですかっ？」

「不服なの？」

「ふふふ不服って！ 服がないのはユーザー先輩だけで十分ですっ！ ……じゃなくて、泊まるって、いやあたし帰りますから、今からでも帰りますから」

何やら話がおかしな方向に進んでいることに気付いて、慌てて修正にかかる。だが、二人はそれを許してくれないようだ。

「あ、部屋はお前一人だからな。言っておくけどオージと同室になるのは俺」

「そんな話をしてんじゃないです、つーか、ユーゼン先輩の狙いはそこですか」

「チグサ、どっちにしたって今家に帰ったところで家はそこに存在してないよ」

「はあ？ 何言ってるんですか？」

「だって、チグサの家燃やしちゃったんだもん」

目を細めて、口をきゅつと結んで、効果音をつけるならば『きゅりんっ』。見事にキラキラオーラが見える。オージ先輩はそれはそれは極上の笑みを浮かべてみせたのだ。

「……」

——けれど、それに騙されてなるものか！

「ななな、なんですってえ！」

「だってアチラ側のチグサの家は燃え尽きたんだよ？ あ、家族は無事だから安心して。どっちの世界でも。けど家の有無だってそれその未来に関わるんだから、遅まきながらも状況を同じにしといたんだ」

「そ、そんな……」

文字通りあたしはへなへなと地面に座り込む。まさかアチラでも
う一人のあたしを失った弊害がこんなところにも。そりゃあたしだ
って普通に安全に過ごせるとは思わなかったけどさ…こんなリアル
に日常を壊されるなんて…。ああ、いくらオンボロとはいえ、父さ
んがガンバって稼いで建てた家が。

それにしても状況を修正するためとはいえ結構アバウトなことす
るのね…。

「じ、じゃあたしは死んだことに？」

「それはないよ。そうしたって根本的な解決にはならない。逆にや
やこしくなるだけだしな。だから家族には連絡だけにしといて」

ああ…父さん母さん、大丈夫でしょうか？ 死んでいないとはい
え、路頭に迷ってやしないでしょうか…。

ヒヤヒヤしながら携帯電話で連絡したら、「あらアンタ生きてた
の」って結構シヨクな物言い。あたしのこと微塵も心配してなか
ったところか、親戚の家でどんちゃん騒ぎをやっていた。そうか、
あそこは結構な金持ちだったからなあ。通常より二割り増しは良い
生活送れそうだなによりだ。…とか言い聞かせるしかない。とにか
く、そっちはばっちし問題ないって考えていいようだ。「友達の家
に泊まる？ あら、しっかりねえ」とかあたしの呑気はこのおばち
やんの遺伝子に違いない。

と、あてがわれた部屋を見回す。

「…母さん、実はこっちのほうがいい暮らしをしていけそうデス」

天蓋付きのベッドなんてそう簡単に目に出来る物ではないだろうよ。

ここはオージ先輩の部屋らしく、ドキドキと立ちつくしていたら、シロくんが部屋に入ってきた。隣ではぎゃあぎゃああと二人の先輩の声が聞こえるから、そこから非難してきたのだろう。

リビングで寝る！ いや、オージはここだ！ じゃあお前が出てけ！ それは無理！ ……なんかそんな声が聞こえるんだけど、あたしは聞かないフリをした。

そんでベッドに飛び込んだらあまあい香りがして、とてもイケナイことをしているようになった気がしたけどそれも全力でスルーすることにして、早々に眠りに就いた。

——もうはんぶんこのあたし、もう少しだけ、待ってて。

13（後書き）

これにて第一部：というか第零部が終わった次第です。
次からは多分、チグサ取り戻し作戦が遂行されます。一応続いてますがシリーズっぽくなるやもしれませぬ。

なんかいろいろ謎です、これからも謎が謎を呼びますが、見捨てず読んでくださると嬉しいです^^yhaaa！

14・マイゴのキオク

——アレ、ここはどこだろう。

ふと目を覚ますと、あたしの体は宙を浮いていた。見渡す限りのピンクの世界。オーロラみたいに神秘的なグラデーションの中心にあたしはいる。

これは夢？ でもそれにしてはともリアルな気がする。舞台設定はよく分からないけど、あたしの自我はハッキリあるし…。

あたしは古典的な方法で確認してみることにした。

「……」

…どうやら夢のようすな。自分の頬をつねってみたけど、全然痛みが無かったし。っはー、こんなにリアルな夢があったもんだなあ。でも、ここはどこよ？ あたしつてば、想像力のひとかけられないよなあ、ただのピンクルームって。…あ、これはあれなの？ 頭の中ピンク色ってことなの？ ちょ、ちょっとチグサさん、そういうのやめてくださいよ…。

「コンニチハ」

「ちょっと待って。あたしはあたしにカツを入れたいね。こんな大

切なときに、そんなやらんばらんでどうすんだ。もうちょっと気合いいれてね、そう危機感ってもんをさ」

「キキカンッテモノヲサ」

「そうそう、危機感ね、危機感！」

ピンクじゃだめだ、おめでたすぎる。っていうか、ヒワイすぎる。チグサ、あんた一体どんな妄想してんですか。これじゃああの変態ユーゼン先輩と変わらないじゃん。ここはもっと、シックでオトナな雰囲気醸し出す、そう黒ってところが妥当。

「クロ」

あ、あたりが真っ黒になった。やればできるじゃん、チグサ。そうそう、それでいいの、それで。あたしってば物わりの良い素直な子だよー……と思ってもいいのか、本当に。

「…何このまか不思議な夢は」

ようやく我に返る。

痛みがないことは実証済みだけど、だからってこんな背景を変えるだけのどるいーむがあつていいものか。

「ユメ？」

「あつ、あなた！」

そういえば、さつきから誰かが話していたような気がする。甲高く、それでいて感情のこもらない子どもみたいな声。今になって気付くなんて遅すぎる…。誰かあたしじゃない別の人物がいることは確かなのだが、相手の顔は見あたらない。

「ねえ、あなたがやったの？ この色、ピンクでも何でもいいから何か明るくしてくれない？」

「ピンク」

また端的な言葉が聞こえて、あたりはぱっとピンク色になった。目の前にどんな子どもがいるかと思いきや……うさぎ？ なんだつてこんなところに、と思いながらも抱き上げてみると、それはあたしの心臓を一瞬止めてしまうには十分なものだった。

「チグサ」

「ヒッ…！」

うさぎがしゃべった、これはもはや眼中にない。そうじゃない、着眼点は違うところにあったのだ。

——問題は、その顔。

体はウサギとして間違いない。白いほわほわの体に、ぴーんと立った長い耳。しかし、その中心に存在するのは愛らしい瞳と鼻ではなかった。

ビン底ぐるぐるメガネ。

付けッ鼻にヒゲ。

極めつけに、恐ろしいほど規格外の、出っ歯。

これはパーティーや宴会でよく見られる間違った人間の格好を指しているのではない。正真正銘、うさぎの顔なのだ。

「なんてブサイクなの…！」

なんとも末恐ろしく、うさぎをさっさと解放する。一体どういう見でうさぎがこんなことになってるのだろう。突き詰めてみれば自分のセンスの皆無を思い知らされて、どっと落ち込んだ。

…あたしの夢だもんね。

ぶさいくうさぎはあたしの気持ちもしらないで、その付けッ鼻をしきりに動かしている。正直気持ち悪いです。すり寄られてちよつと後ずさり。

「チグサ」

「あつ、はい、なんですか？」

ぶざいくうさぎに呼ばれて、つい返事をする。

「チグサ サガシテ」

「え？ さがすつて、何を？」

言ってる意味がよく分からなくて、もう一度問うと返事が返ってこないかわりに、そこかしこに謎の物体が現れ始めた。

うさぎだけじゃない、黒い手足のついたバナナやら、やたらファ
ンシーなぬりかべやら、酔っぱらいのオヤジやら…いや、誰？

「ミツケテ」

「コナゴナ」

「ミッツ フタツ ヒトツ」

それぞれがそれぞれに感情のこもらない声で言葉を発する。あたしはいつのまにかそれらの物体に囲まれて、身動きがとれなくなっていた。

「待って、一体何なの？」

他にもたくさんのお体が、ピンクを埋め尽くしていく。あたしの視界も、ぶさいくうさぎもどこかに埋もれてしまった。

「チグサを」

最後は幾重にも重なった声が鮮明に聞こえた。

「……夢」

あたしは今、見慣れない天井を見ている。白くて、レースがかかっている、…ってこれ部屋の天井じゃなくて、ベッドの天井だ。ふわあ和良好的香りがするかと思っただらそうかあたし、昨日はオージ先輩のベッドで寝たんだ。

ここは現実世界だよな？ ……なんか、変な夢を見ちゃった…。ピンクの世界でぶさいくなうさぎと酔っぱらいオヤジと…。夢、だったのかなあ？

「サガシテ」「ミツケテ」…確かに、あの変な物体たちはそんなことを言ってた。

一体どういうことだろう？ ただの夢で済ますには、何かがひっかかる。あたしはあたしで、なんとなく言われたことをしなくちゃいけないような、そんな気になっていた。

あたしは寝ぼけ眼をさすって、寝返りを打つ。

白い。

そうそう、うさぎね。顔はぶさいくな割に顔以外は普通に可愛かったんだよね。白くて、ほわほわしてて。

そう、ちょうどこんな具合に――

「…こん、な？」

寝ぼけていたのか、伸ばした手は直前で止まる。

「んにゃ…」

ソレは、あたしの目を覚ますには十分なモノだった。

「ぎゃあああーっはー！」

叫ぶや否やどたとたと激しい足音が聞こえ、部屋のドアがものすごい勢いで開いた。

「チグサっ？」

「どうした！」

オージ先輩とユーゼン先輩がすぐに駆けつけてきた。まるであたしが大変な事件に巻き込まれたとも思ったのか必死な形相をしている。

「せつ、せせ、せんぱい！ っ、っ、これ！」

あたしは横たわったまま、ソレを見ないように思いっきり顔を逸らしながら指をさす。どうしましよう！ と訴えかけると、先輩たちは顔の緊張を解いてそんなことか…と言いたげな顔つきになった。そんなこと、とは！

「あーあ、心配してソンした。何が楽しくてチグサのお楽しみ中を見せつけられなきゃいけねえんだ」

「おおお楽しみ中ですって？」

くるりと背を向けるユーゼン先輩に手を伸ばすが、もちろん距離は縮まらない。あたしは身動きできないし、ユーゼン先輩もあたしに構うつもりはないらしい。

「チグサ、そういうのはほどにしなよ」

「オージ先輩も何勘違いしてんですか！」

わざとですか？ この二人、わざとですか？

あたしのこの状況、分かっていないのか、分かっているでそれ本気で言ってるのか。後者だったらあたし、二人の目と脳味噌を呪います。

「これは趣味とか、そういうんじゃないかって！ あたしだってビツクリですよ、朝起きたら、…は、はは、H A D A K Aの男の子があたしに抱きついてるなんて！」

「なんで外国調？」

恥ずかしいんじゃないじゃあああ！　とおそらく涙目なあたしは力一杯の訴え。正直このようなことには一切の免疫がない。パニくるのは至極当然なのだ。

すると、男の子がもぞりと動いた…ので、あたしもヒイイと情けない声を出してしまう。なんだってこんなことになんだってこんなことに、なんだってこんなことにっ！　恐る恐る半目でその正体を確認する。背はあたしのお腹くらいで、白の短髪で、あたしの腰に手を回して…ハダー力で！

「チグサ、目が怖い」

なんだかんだ、その男の子を凝視していたようで。顔がボツと熱くなる。

うつ…あたしいつのまにこんないたいけな男の子を…。知ってる子ならともかく、知らない子を手込めにするなんて…って手込めっ？　いやあああ、フケツよ、チグサ不潔！　どうしよう、これって犯罪じゃないのーっ！

「ほら、シロ。そろそろ起きて。チグサが壊れてるから」

「いやあ！　あたしまだ、捕まりたくないっ…って、シロ？」

どっぴり自分の世界に入ってしまったっていたあたしは、オージ先輩

の言葉に我に返る。シロって聞いたことのある名前。シロって、そういうえば、ブタの名前もシロだった。

「先輩それって…んのあ！」

顔をあげると、ちょうど男の子のピチピチ背中が。まさかこれと寝床を一緒にしていたと思うと、今更ながら鼻の穴から真っ赤な汁が飛び出してしまいそうだ。

そうやってあたしが鼻を押さえているのを見かねたのか、ユーゼン先輩が申し訳程度に着ていたまたボタン全開のシャツを男の子にかけてあげた。おしりまですっぽりと隠れてくれたので、あたしの目の毒は消え去った。…一件落着？

「ふ、ふう…やっと落ち着いた…」

少年はオージ先輩に連れられて部屋から出ていったので、あたしもベッドからふらふらと降りる。

「残念だったな？」

「イエ…ありがとございました、ユーゼンせんぱ——…んぎゃあーっ！」

さらなる猛毒が、アツイむないたそこにはあった。

14・マイゴのキオク（後書き）

新たなお話のスタートといふかなんといふか…

スイマセン。

まっばスイマセン。

「こ、これって、シロくんなんですか…」

驚愕の事実、味噌汁のワカメが口からこぼれた。

時刻は、エーエム7時。朝の爽やかな時間帯である。今朝もオージ先輩が腕によりをかけてつくった朝食の数々が食卓を占めていた。粒の立った白ご飯に、ワカメと豆腐の味噌汁、サンマの塩焼きとそれはもう健康的な朝の顔。実家じゃ滅多に味わえないこれはゼータクである。

と、口をふきふき、隣に座るその姿を見下ろす。

「そうだけど。言ってなかったっけ？ 人間にも変化できるって」「きーてないっす！」

確かに昨日はブタと一緒にベッドで寝たけど…人間になれるって…。

元ブタのただ今人間シロくんはただ今味噌汁をすすり中。ブタだから犬食いつてそういうわけでもなくて、きちんとお椀をもって、箸でおかずを口へと運んでいる。…が、やっぱりそこは子どもらしく、食べ方は汚い。

「あーあーあー、シロくん、こぼしてる」

あたしがつい言葉をもらすと、シロくんはそれに気付いてあたしへと顔をむける。耳も首元もスッキリ見えるほどの短髪で、その短い前髪の下に位置するのは麻呂のような短い眉毛。くりくりした目にぶつкраした鼻と唇。その愛らしさでもって、きよとんとあたしを見ているのだ。

…か、かわいい。

「チグサ、シロに気に入られてるよ」

「そ、そうですね…」

実はさっきから片時もあたしの側を離れなかったり。シロくんは未だにシャツ一枚の姿なのだが、その姿でトイレへ洗面台へと浮遊するあたしをトテトテと追いかけてくるもんだからこれがまた、かわいくて。…そしてあたしが犯罪者のよう。

「……」

常に無表情で実際は何を考えているのかよく分からないのだけど。あたしが口元を拭ってやると、なんとなく喜んでくれているような気がした。

「シロは自分の意志で人間に変化するからな。オージが頼む以外はいつ変わるか分からねーんだよ」

「じゃあさっきだってあたしをフォローしてくれても良かったじゃないですかあ」

恨みがましく、黙々とご飯を食べるユーゼン先輩を見る。今はまたシャツを羽織っているが、その下から覗くのは真っ赤な紅葉が二つほど。一番の犯罪者はこの人だよね、うん。

「そりゃ、チグサがうるたえてるのが面白くてさー」

なんかもう通報したい。

「それよりチグサ、今日は出かけるからそのつもりで」

より一層ユーゼン先輩を睨み付けていると、その隣からオージ先輩が切り出した。

お出かけ？ そっか、今日って土曜日で学校はお休みだったんだ…。

「でも、どこに行くんですか？」

「買い物。チグサだってこの家で住む以上いろいろなものを揃えなきゃ。実家だって燃えちゃって何も残ってないだろ？」

「んぐっ…！」

さ、サンマの骨が喉に引っ掛かった。シロくんがおそらく心配したようにあたしを見ている。いやごめん、大丈夫…ただ、いろいろと衝撃的で。

住むっていうのと、燃えたってことがね…。

「そそ、それはそうですが、あたしお金持ってないし、あのー、いや、やっぱりあたし親戚の家にご厄介になるのもいいんじゃないかと」

これはこれで、まあその、美少年との共同生活ってのもいいけど、それは非常識な変人にしかできない芸当だと思うのだ。朝から思うんだけど…やっぱり先輩達ってば美形なんだもん…味噌汁をすする姿だって、眠そうに欠伸をする姿だって、サマになっちゃってるんだもん。

自分で言うのもなんだけど、平凡の中の平凡のあたしが一緒に暮らしていけると？ いや死ぬ。このまま無事に生きていけるとは思えん。

「お金なら俺たちがなんとかするって！」

「だからそれはどこから出てる金ですかっ」

「チグサ安心して。それに、チグサー人は危ない。昨日だって危ない目にあっただよ。また狙われないとも限らない」

オージ先輩に言われて、むうと口をつぐむ。先輩が言ってるのは、ジャメロンディアスのこと…あたしを急に襲ってきて「お前が死ねばセカイは救われる」ってそう言ってる。

「誰なんですか…あの人は…」

「そういえば、思い出したんだよ、あの赤髪。近代稀に見る、大魔術師だぜ」

「大魔術師って…凄い人ってことですか？先輩たちみたいに？」

「いや、それは違う。あいつは生身の人間。正真正銘の命が二つある人間だ」

あれ、それじゃあどうしてこっちのセカイなんか。だってあの魔法使ってたからこっちの「ジャメロンディアス」じゃない。

「それってセカイに干渉してるってことですか？どうやって？」

それにセカイのバランスが…」

「なんつーかな、干渉どころじゃなくて…超越してるっつーか」

「チヨウエツ？」

「ま、あいつが来る分にはさして問題はないと思う。ただチグサが狙われなければな」

うーん、よく分かんない。まあ結局ジャメロンディアスがあたしを狙ってても、あたしが殺されなければいいんだよね？いや、狙ってる時点で危ういのですが…。

あ…でも、捕まっただっけ？オージ先輩の手引きでどこかに連れて行かれてたし…。

「大魔術師には注意が必要」

たくあんを口に入れつつ、オージ先輩の忠告。…それってどういう意味ですか。

「ま、そういうことだから、今日は一緒にお出かけ！ とりあえず今日は制服でいいから、他にも服とか買っとけ。男所帯だと足りないもんだくさんあるしな、あと下着とかも——」
「そそっ、そういうことは言わなくてもいいです！」

まずはユーゼン先輩、あなたはデリカシーってもんをどこかで買ってきてクダサイ！

連れてこられたのは、家からバスで10分ほどの繁華街。あたしの実家からは少し遠いから、あたし自身来たのは久しぶりだ。ショッピングとか、映画鑑賞とか、ランチとか、なんでもできるから友達と遊ぶときは必ずここに来ている。

「よし、まずは雑貨屋いこーぜ！」
「チグサ、行くよ」

今日は二人の先輩と一緒にだけど。

「…はあい」

今回三人してここまで来たのは、あたしの生活道具を揃えるっていう理由があつてのことだが、正直あたしは気が進まない。あんな高級ルームで男の人二人と一緒に暮らすための道具を買いに行くから、つてのもあるけど、もう一つこつやって買い物をしたくない理由があつた。

「どーした？ チグサ」
「何でそんなにやる気ないんだよ」

まぶっ…眩しすぎる…！

「いや、ほんとあまり近寄らないでください。し、視線が痛いんですってば。まわりからの視線が！」

制服姿の二人もそりゃあ見目麗しかったけれど、今日はそれぞれ私服なのだ。オージ先輩は期待を裏切らないやたらキュートな格好だし、ユーゼン先輩はどこまでも破廉恥でファンキーな格好をしている。これは…振り返らない人がいないわけがない。というわけで通りすぎる人ら全ての視線を集めて、…そんでもって一緒にいるあたしを奇異なものを見るようにして最後にチラ見していく。明らかに醜いアヒルの子が混じってるみたいだ。

…分かってますよう、二人にふさわしくないことくらい！ けれどそれは二人に伝わらない…。二人してきょとんとあたしを見ている。

「何言ってるんだよ。さっさと歩けよ」

「まさかお腹痛かったりする？ 大丈夫？」

気が付けば二人はあたしの両サイドに…。あつ、ほら！ オネーサンから鋭い視線が投げられたじゃん！ 何よあの子ちんちくりんなくせに贅沢な、って痛あいテレパシーが。

けれど、これ以上二人を避けることも出来ず、結局身を縮めなが

ら二人に挟まれるあたしである。

最初にやってきた雑貨店は、日用品なら何でも揃うような大型店舗だった。入る前からドキドキしてたのは、ここが高級なお店だと分かるから。オシャレでいてとても品のあるこのアイテムは、今ちまたで人気らしい。そう噂を聞いたことはあるけど……まさかあたし自身で使うことになるうとは。正直ビンボーなあたしが。

ドキワクが止められずそわそわしていると、ユーゼン先輩から笑われた。

「よし、じゃあとりあえずチグサ。欲しいもん適当に集めてこい！」

と、カゴを渡される。

「あ、集めるって、あたし一人でデスカ？」

「当たり前だ。お前のために買い物に来たんだろ？　俺たち適当に見てるから行って来いよ」

と、そしてそのまま行ってしまう先輩方。

……って、えええ。本当に？　さらに一層アウェー感が。

「どうしよう…」

高級なお店っただけでも緊張するのに、大きなお金を使ったことないあたしがこんなお店で気安く買い物出来るはずがない。…けれど、確かに先輩の言うことも一理ある。せつかくお金を出してもらうんだから、自分の買うものくらい自分できちん決めなきゃ。

よし、と決心してあたしはカゴの取っ手を握りしめた。

「歯ブラシ、茶碗、コップ…それから、ハンガー…はいっか。やっぱり高いし。あたしの服くらいしわくちゃになってもいいし…」

ブツブツ喋りながら、日用品を物色することはや30分。結局一人でぶらぶらとお店を回ったりしている。すぐに決めてしまおうと思ってたけど、同じアイテムでもデザインとか値段が違うものが結構あって、決めるのに時間が掛かっていた。値段も地道に計算しており、今のところ五千弱。た…たかい。

「あと何かあったかなあ…」

顎に指をあてて、うーん考える。男の人と一緒に生活だからなあ、同じものでも勝手が違ったりとかするしなあ。タオルは絶対買うでしょー、シャンプーももちろん。あとは…。

「あ」

ふと、思いつく。

「お布団！」

そういえば、昨晩はオージ先輩のベッドで寝たんだったあたし。これ以上ベッドを使わせてもらうわけにはいかない。それに、あのシーツで寝るなんて！

「でもどうしよう…布団とかだと更にお値段張りそうだし…。一応先輩たちに聞いてみよう」

あたしは、広い通路をUターンし、最初に先輩たちと別れたところに向かうことにした。

「ニコチン！」

…と、そこであたしを呼ぶ声が。

「…壱子？」

そこにいたのは、お嬢様風巻き髪がとてもキュートな女の子。清楚なワンピースをひらりと翻らせ、あたしの元まで駆けてきた。

「やつほお！ ニコチンこんなところでどうしたの？」

「え？ いや…」

「まさか、信じられなあい！ ニコチン、大丈夫なの？」

出会って早々失礼なヤツだ。あたしが持つ買い物カゴに目をやり、本当に心配そうにしている。…大丈夫なのって何がよ。そりゃ、いつものあたしだったらこんなところでお買い物なんか出来ないけどさ。

「だ、だいじょぶだから。壱子は？ 一人？」

「うん、あたしはパパと一緒に来たの！ 昨日歯ブラシ落としちゃってね、新しいの買ってもらおうかと思ってえ」

言うつと、後ろから髪を七三に分けたダンディな男の人が会釈をしながら現れた。…あ、お父様ですか。たかが落としただけの歯ブラシを買い換えるためにこんな高級なお店にくるなんて。知ってたけど壱子はあたしと正反对でとてつもなくお金持ちのお子様なのだ。

「本当に大丈夫？ どうしてそんな見栄を張らなきゃいけないの？」

「…あはは…」

いちいちかんに障る言い方に、顔がひきつる。いけない、抑えてチグサ。

「それにわざわざ全部の日用品買い換えてるの？　まるで新たな生活をスタートします、みたいな…」

「あ、いやいやいや、そんなことないよ。違うの、ただの見栄だし！」

そうだった！　まさか男の人たちと一緒に暮らすだとかそんなこと言えない！

慌てて言うあたしにちょっと疑った視線を送る壱子だったけれど、あたしの貧相な顔を見て納得したのか、そうだねと頷いてくれた。つてやっぱり納得してくれちゃうんですか。

「それより、ニコチン。昨日学校サボったでしょお」
「え、昨日？」

壱子は話題転換が突然すぎる。ちょっと落ち込んでいたあたしは付いていくのに必死になった。

ええと…昨日？　何かあったっけ…と思い出すまでもなく、あった。そうジャメロンディアスの奇襲だ。忘れかけてたけど、それから学校に戻らず先輩たちの家に直行したのだ。だから、学校

をサボったと言つのも間違いじゃない。むしろ正解です。

「…あー、昨日、ねえ…」

「部活はミーティングあるって言ってたのにい」

「あ、部活忘れてた」

もお、と壱子から怒ったような目で見られる。あはは…と取り繕うように笑ってみるも、無駄らしい。

今更だけど、あたし、コーラス部に入っている。コーラス部とは言ってもそこまで本格的なものではなく、ただ小学生や中学生が歌うようなや子どもじみた活動をしているのみである。先週も森のくまさんだなんて童話を歌っていただけだし、まるでお遊びの部活と言っても過言じゃない。

「壱子は、出たの？」

同じコーラス部だ。聞いてみると、当たり前だと胸を張られた。

「文化祭の出し物について話し合ったのよ？ 今度の楽曲とか、ソロとか」

「今回も文化祭出るのっ？」

まさか。去年も童話を歌って、思いつきり笑われたじゃん。まるで幼稚園のお遊戯会だって、先生からも怒られちゃったし。

が、壱子はあたしの真意を読みとったのか、首を横に振った。

「今回は、本格的な歌を歌おうって。オケ部にも手伝ってもらおうしいけど」

…極端なことだ。いかにもあのノリの良さだけは天下一品の部長が考えそうなこと。一度言つと聞かないひとだから、もう決定事項なんだろう。まあいつか、と納得することにする。

「ソロパートはまた今度決めるみたい。そのときはちゃんと来てよお？」

「え、部長じゃないの？」

「うん、そこは珍しく公正みたいだねえ。だから、ニコチンにもチヤンスがあるんだよ」

ふふふ、とバカにしたように笑われる。…ぐうつ、本気でそう思つてないくせに。まあ、部長じゃないならそれこそ壱子に決まるんだろつなあ。声だつて透き通つてるし、歌唱力抜群だもん！

「壱子、そろそろ行こうか」

「パパ！ はあい。じゃあニコチン、またね！」

「あ、うん。またね」

壱子はどこから現れたか、パパに連れられ行つてしまった。嵐の

ように来て、嵐のように去って行ったなあ。あたしは杏子の背中に手を振った。

「…歌かあ」

文化祭はあと二ヶ月後だ。

「って、そうこうしてる場合じゃない。オージ先輩たち探さなきゃ」

物思いに耽っていた頭を振り、あたしは歩き出す。解散してから一度も先輩たちに会ってないから、今から会おうとしてもすぐには見つけれないに違いない。先輩たちつては携帯電話持ってないからこっちから連絡することは出来ないし…。

とりあえず、まんべんなく回ってみよう！

と、歩く足に力を入れたときだった。

「…アレ？」

足下に、何かぐにゅうつと。
…なんか踏んだ。

「……」

ちらりと見下げた視線の先にいたのは、踏みつぶされて気持ち悪く付けっ鼻をひくひくさせるぶさいくうさぎだった。

16（後書き）

動物虐待はいけません。

今まで毎日更新してきていますが、明日の更新は予定していません。もし訪れてくださっている方がいましたら、お気をつけ下さい。（都合によっては明後日の更新もないかもしれません…曖昧で申し訳ないです）

追記（09/04/04）：
こっそり「コーラス部」に修正しました！

ぐるぐるメガネの向こうにつぶらな瞳は見あたらない。とつてつけたような鼻っ柱には繊細さのかけらもない。いくら齧げっしるい齒類と近縁の動物とはいえ、そこまで過激に飛び出さなくてもいいだろう前歯。

——やっぱり、この顔…何度見てもウエキサイティアングツ！

…と、ついネイティブ発音になってしまっほど、この驚きは自分でも収集がつかないもののようにだ。

「……」

無言で見つめ合う。どれくらいの間こうしているだろう。あたしは驚きと困惑とその他もろもろの理由によって動けないでいるが、あたしの視線をとらえているヤツ…ぶさいくうさぎは、あたしに踏みつぶされているために動けないでいる。仰向けになっているため、そのぐるぐるメガネはあたしの方へと向いている。目が見えないせいか、表情が全く読めず不気味だ。

けれど…いくら気持ち悪いうさぎだからってこれじゃまるで動物虐待してるみたいだ。いやでもだからって足を退けるのもどことなく怖い…逃げるとか襲われるとかそういう理屈じゃなくってこう、この現状から動くのが…。

つか、なんでココにいるんですかつ？ キミって確か、あたし

の夢の中に出てきたうさぎだよね？ もはやあたしの妄想でしょう！
なに、とうとうあたしってば自分の妄想を具現化しちゃうほどの
モーソーマスターになっちゃったわけ？

「って、いらんわ、そんな称号！」

まさかの現状打破がノリツツコミ。自分でも無意識だったせいで、
周囲から白い目で見られてしまった。スイマセンと謝るが、結局こ
うやってうさを踏みつぶしている図は白い目の矛先にはもってこ
いに違いない。

と、とりあえず場所を移動しよう。そうしよう。それからどうし
て妄想が具現化したかを考えよう。そうしよう。

——と、足から力を抜いたときだった。

「あつ！ どこ行くのっ！」

さっきまで微動だにしなかったがさいくうさが、目にも留まら
ぬ速さでもってあたしの足下から華麗なる逃亡を試みた！ そりゃ
文字通り脱兎のごとく！

「ああーっ、もう、ちょっと待ってよ、あなたどうしてここにいる
のーっ！」

あたしも負けじと足を踏み出す。このままあのうさぎを放っておくのはなにかいろいろとマズイ気がする。あんなちんくりんなうさぎが他の誰かに捕まっちゃったりなんかしちゃったら、大騒動になっちゃう。

それに、なんだか捕まえないきやいけない義務まで感じる。あれは、あたしが、あたしが捕まえないきや。

買い物カゴをがったがったと鳴らしながら広い店内を駆け回る。うさぎの足は思った以上に早く、いくら無駄に足が速いよねと言われるほどのあたしでもすぐには追いつけなかった。他のお客さんも多いし、ぶつからないようにして、さらにぶさいくうさぎを見失わないようにしてしたら結構大変だ。

「でもってぶさいくうさぎはすったかすったか隙間を縫って行っちゃうし！」

目にも留まらぬ速さという表現は間違っていないのか、本当に誰の目にも留まっていけないらしい。あれだけぶさいくが走り回っているのに、誰一人として驚きの声を上げない。足下を駆けぬかれたお客様は何もなかったかのようにお買い物を楽しんでいらっしゃる。むしろ追いかけてるあたしのほうが驚かれて白い目プラス鋭い目つきで見られている。うう、迷惑は重々承知でゴザイマス。

「んがーっ！ もお、なんでいつつもいつつもこんな不思議の国のアリスちゃんみたいなのをつ」

前はバラのツルに追いかけられる身だったが、今は真正正銘ウサギを追いかけている。ファンタジーだ、もうファンタジーすぎる。どころかもうメルヘンの領域まで達してる気がする。それはどことなく不本意だ。あたしは助けられるお姫様っていうより、どっちかっていうと勇者に助言をするテンプレート村人Aでしようが！

…言つてて虚しくナイデスカ、チグサさん。

「虚しい——つて、ぶさいくうさぎ消えちゃった…あれ、前方に一つの群が…」

もしかしてそこに飛び込んだのかも、と絵本の表紙みたくエプロンドレスを着た自分を想像しかけて止めた。

何だろう…こんなインテリア雑貨のお店に集団で？ いやでも女の子がきゃあきゃあ言ってるのが聞こえるし、中心に人物が……覗かなくても見えてますね。

「ユーゼン先輩っ？」

群から頭一つも二つも飛び出した、中心の男の人は声が届いたのかあたしのほうを振り返る。案の定だ。豪快に笑っているユーゼン先輩そのものがそこにいた。

「おお、買い物は終わったのか？」

「いえ、実はそれが終わって無くて。あ、そうだちょうど良かった、

お布団の話を——している場合じゃないんです！」

「はあっ？　なんだよ」

危ない、危うく流されるところだった。別にここには何も流れていないというツツコミは待ちませんが。

と、女の子たちが一齐にこつちを向く。数としては十人そこらだ。一体誰なんだ……でもこんなにたくさんに目が向くと怖い。明らかに穏やかな目線ではないし。

「あのあのセンパイ？　一体ここで何を……」

女の子たちの方は見ないようにそつとユーゼン先輩に切り出す。すると先輩は小首を傾げて「わかんねえ」と明るく告げた。

……分かりやすい返答をどうも。

「オージ先輩は？　いないんですか？」

「それがさつきはぐれちゃったんだよねー。さつきまでは一緒だったんだが」

ふうん、二人が一緒じゃないのってなんだか珍しい。逆にユーゼン先輩の格好良さが目立ってちょっと残念な気分なんだよね。もしかして……この女の子たちって……。いや、いやいや、まさか。

「そ、それより！　あたし、うさぎを探してて……見ませんでしたか

？」

「うさぎい？　なんだってこんなところに。見てねーよ、オレは。あんたたちは？　見たか？」

「いいえ、見てないですう」

「ねえ、そんなことより、これからどこ行きますか？」

「そうそう、こんな子なんて放っておいでどこか楽しいところに行きましょー？　ねえー？」

うつ、群の面積が小さくなる。なんかみなさんキラキラうるうるした目でユーゼン先輩を見上げてるしつ。

まさかこれ…考えないようにしてたけどやっぱり…ユーゼン先輩を逆ナンして…！

な、なんてことですか！　あたしがせっせと買い物プラス不思議の国のアリス追いかけっこしてるときに先輩一人で楽しんでるなんて。それにオージ先輩というものがあって、他の女のひと！　ぬうつうつ…！

「おい、チグサそんな目でオレを見るな」

「これから女のひとと楽しいところに行く人を暖かい目で見守れるわけがありませんっ。うさぎを見てないならいーです。オージ先輩に聞きますから」

「っておい、ちよっ！」

半裸だし、変態変態とは思ってたけどそっち方面に健全な変態だなんて、見損なった！　先輩はそうじゃなくて、もっと通報したくなるような変態じゃないといけないのに！

そう思って、ユーゼン先輩の群に背を向けてあたしが見つけたの

は、男の人が多いに集まるまた別の群だった。

17（後書き）

大変お待たせし（たかどろかは分かりませんが！）

ました！

忙しさからちょっと抜けました。

これからももしかしたら毎日は難しいかもしれませんが、なんとかがんばって更新していきます！これからもよろしくおねがいします。

オージ先輩が解放されたのは、まるまる30分経ってからだった。

女の人たちに囲まれ楽しそーうなユーゼン先輩を見限ってすぐに見つけた男の人達の群。その中心にいたのがやっぱりというか何とというか、オージ先輩だったわけで。いくら女の子みたいな外見をしてるからって本当に男の人たちを呼び寄せちゃうなんて全くとんだ美少年サマだ。

最初は完璧に無視を決め込んでいたようだったけど、男たちはしつこかったらしい。あたしを見つけるや否や、救いを求めてきた。さすがに子犬のようにはならなかったけど、クールなご様子で「どーにかして」と心の声を聞いた。

あたしも男の人たちに詰め寄られるオージ先輩を見て、軽々とスルーできるわけもなく助けに入ったわけだけだ。

「まったく、本当に許せませんでしたよね！　あの男たち」
「うん……」

腕を組んでぶんすか怒るあたしに、オージ先輩は気のない返事。まさか賛同してくれないんですか、と顔をのぞき込んだら「確かに」と欲しかった二の句を頂く。

男たちが群がっていた場所より移動して、今は自動販売機が二つ並んだ休憩スペースにいる。運良く人気ひとけもないようで、ゆっくりと腰を据えるに至っている。

あたしは手にしたオレンジジュースの缶を一口あおった。

「ほんつとうに失礼な」

あたしが怒っているのは、男の人たちがオージ先輩に詰め寄っていたことではない。いや、それも多少は含まれているけれど、それよりももっと腹立たしいのが、あのセリフ！

「『あんたはお呼びじゃねえんだよ』ですって？ きいつ、むかつぱらが立つつす」

もし立っていたら、地団駄を踏んでいただろう。今はベンチに腰掛けていたので、歯を食いしばるに留めておく。

それはオージ先輩の前に立ちはだかったときだった。ほとんど拉致しかけたところを守りに入っただつたのに、男たちは興がそがれたのか何なのか、このあたしにむかってその暴言。言っておきますけれどね、どっちかというあたしのほうがお呼びなわけです！ オトコであるオージ先輩を呼んじゃうあんたたちに言われたくねえよーっ。

「落ち着きなよ、チグサ」

「せつ……せんぱいー！」

ぶちん、とあたしの中の何かが切れる。わあっと泣きつくようにオージ先輩の腕に飛びついた。先輩自身イチゴミルクを手に入れたが、それよりあたしが持っていたオレンジジュースの被弾を恐れて先輩はわずかに後退った。

「あたしだって自惚れてるわけじゃないですよ、お呼ばれしないことだってわかってますよう、でもですね、でもですね。男のオージ先輩を前にしてお前はいらねえと言われたらどう思いますでしょうか女としてっ。うううーっ」

逃げられないようにオージ先輩の袖をがっちりと掴む。

「あーはいはい、それは悲しいねー」

本当にそう思ってくれてるんだろうか？ 適当に見えるその対応に、チラリと先輩を見上げたら先輩は諦めたように頭をぼんぼん撫でてくれた。慰めてくれるらしい。ちょっと強引に迫りすぎたかも…。でもおかげで気持ちは浮上した。

「ありがとうございます。でもそうですよね、先輩が性別を超えてかわいいのがいけないんですよね！」

「…いきなり何を言うかと思ったら」

あたしは先輩から離れて、先輩の顔を真正面から見た。漆黒の宝

石のような大きくて煌びやかな瞳、スツと通った鼻とふつくらした桃色の唇。どこぞのお嬢様と見まごうばかりの、本当に絵に描いたような美少女だ。肩まで伸びる髪型も合わせ、どうみてもおとなしやかな女の子。

あまりに見過ぎていたんだろう、オージ先輩の眉間にぐぐぐとシワが寄った。

「何なの、チグサ」

「ああ、いえ！ なんでもないんです。…やっぱりあたしが弾かれるだけはあるよなあって…」

って何様か、あたしは。

「あたしが」って基準がそもそも間違っている。この先輩を目の前にして、自分を比較対象にするような女がどこにいる。

オージ先輩はあたしの言葉に嫌そうに顔を歪めていた。

「あのね、男にかわいいは嫌味だから」

ええっ？ 男の人ってそういうもんなのかな？先輩、その表情もとってもかわいいんですけど…。せつかくそういう顔してるのに否定するのはもったいないよなあ、と思っていると、先輩はじーつとあたしを見た。

え、なんで？

「チグサもかわいいじゃん」

先輩はあたしの顎をくいつと指で上げると、何でもないことのようさらうと言ったのけた。

「……！ ……せ、せせ、」

突然の事態に一瞬我を忘れたが、取り戻したあたしは先輩の腕を両手で握りしめてつつと距離を取った。そして、先輩から離れた両手を顔の前に掲げ、歯を食いしばる。

「なんで突然に防御態勢？」

だって、と呟くとあたしは両腕の隙間から先輩の顔を盗み見る。

「そ、そんなこと言うってことは何か望みがあるってことでしょうか？ お菓子ですかっ、飲み物ですかっ、とりあえずカツアゲですかっ」

「はあ？ チグサのリアクションってよく分からない」

「あたしのことがかわいいなんて言うの間違ってます！ それとも先輩、からかってますかっ？」

自慢じゃないけれど、あたしは自分で思いこむのが得意なだけで本当に可愛かったりするわけではない。他人によるあたしの顔の評

価はバカ面アホ面えつと他に…宇宙人面とか！　うえ…本当にかわいくないわそれ…。

あたしが思いだし落ち込みをしているのも先輩は構わず、小さく何か呟いた。あたしにはなんて言ったか聞き取れなかったけど、あたしを貶める言葉ではなさそうだった。

「それよりチグサ、買い物はどうしたの？」

ある意味で言い出しつぺな先輩は華麗に話題転換をなさる。一人興奮していたのがバカみたいに先輩は冷静だ。

あたしだってべべ別に喜んだ訳じゃ…！　と、とにかく何事もなかった感をもしたそうと、ふうと息をつく。

「か、買い物は今している途中ですから！」

「カゴも持たずに？」

「あつ、あれ、あたし」

どんと胸を張ったのも台無し。弾かれるように両手を見るが、そこには何もなかった。持っていたはずのカゴがなくなっている。

「あーあれえー…？」

ごまかすように苦笑いをこぼすも、何の解決にもならなそうだ。はあ、とオージ先輩が呆れたようにため息をつく。

「どこに置いてきたんだか。とりあえず一度あの場所に戻ろうか」
「うう、スイマセン」

「まったく、どうしてそう大きな忘れ物をするかなあ。オージ先輩の助けに入るまではきつともっていた。ってことはそのときに放り投げてきちゃったんだろーな。回収されてないといいけど。」

「……って、アレ？ あたし、何かもつと大きなコトを忘れてるような……。」

「カゴ……じゃなくてもつと何か違う……」
「チグサ？ どうしたの、行かないの？」
「——ああ——」

手を引かれかけて、とうとう思い出す。

「ぶさいくつさぎ——」

「どうしてこんな重大なことを忘れていたんだろー。自分の脳が恐ろしくなった。」

信じてもらえないことを覚悟して、オージ先輩に「ぶさいくうさぎ」のことを話したら、意外にもあっさり信じてくれた。よくよく考えれば指ぱっちゃん魔法使いサン。あたしみたいな超現実的な種族ではなくそもそもファンタジーの住人だ、異常現象には慣れているらしい。

とはいえ。

「チグサはとんだ妄想マスターだね」

そのファンタジー脳をもつてしても奇妙なあたしの恥ずかしい能力。それは痛い…！

「ややや、やっぱりですか。おそろしやあたしの脳を飛び出してぶさいくうさぎはどこぞへと？」

「急に短歌読まれてもこっちとしては反応に困るんだけど」

それほどまでに恥ずかしいのを察してください。

「嘘だつて。まさか生身の人間が想像上の生き物を現実には召喚するなんてありえない。無から有を生み出すことは並大抵のことじゃない

いんだ。アチラ側の世界でもそうあることじゃない」
「しれつと嘘つくのやめてくださいよ」

先輩はそんなあたしに悪いとあっさり謝罪して、また続ける。

聞いた話によればどうやらアチラ側の魔法使いさんたちもそれはほとんどが超能力のような力であるらしく、個々に特性は違うものの、モノを突発的に発現させる能力を持つ者は100人に1人いるかないかくらいのものだとか。それは確かに少なそう。それをまあ、コチラ側のあたしが出来るわけもなく。

「じゃあオージ先輩が？」

特別なオージ先輩に聞いてみるも、そんなわけはないとバツサリ否定。よく考えてなかったけど、本当にどうしてあたしの夢の中に出てきたうさが現実にな？　もしかすると出てきたではなく、またもあたしが夢の世界にいたのか。でもそうやって追ってきたときに本物の先輩たちに会えたわけだしなあ。

ああ昨日からずっと分からないことだらけだ、と考えることを放棄すると、あたしは隣で未だに考え込むオージ先輩を見た。そうだ、昨日のこと…もう一人のあたしを取り戻す方法、まだ聞いていない。今聞いてもいいだろうか？　邪魔かな？

「オージ先輩、一ついいですか」

でもやっぱり聞いてしまった。どうしても気になるし。
先輩は考えるのをやめてきちんとあたしに向き直ってくれる。律儀な人だ。

「聞いてませんでしたよね、アチラのあたしを取り戻す方法」

簡潔に尋ねると、オージ先輩は小さく言葉をもらしてそのことを思い出したようだった。きよるきよるとあたりを見回す。聞かれても理解できる話とは思えないが、一応配慮しておきたいのだろう。幸いにして、この休憩スペースにはあたしたち以外誰もいない。

オージ先輩はじゃあ簡単に話すけど、と前置きして説明を始めた。

「人間の命は、記憶でできているんだ」

確かに簡単ではあるけれど、…いまいち理解しがたい理屈。…もしかして、今からある説明も昨日のようにカルチャーショック飛び抜かして理解の範疇を超えるものだったりするんだろうか？…？ 覚悟はしていたはずだったけど、それもどうなることだろう。

「難しい事じゃないよ。チグサ、今までの常識を捨てればいい。人間の命…きつと心だとか、脳味噌だとか、いろいろ考えてるんだろうけれど、それは厳密に言うとは違う」

「人間の命は、記憶ですか…」

「じゃあ…例えばチグサが二人いたとして、外見も考え方も何もかも全部一緒だとする。けれどそれぞれ育った環境が違ふとき二人を

区別する方法は何かがあると思う？」

あたしが二人いたとして？ んじゃあ、チグサAとチグサBね。チグサAは電気が通っていないような田舎に生まれ育ち、チグサBはハイテクの整った近代都市に生まれ育ったとする。…外見や考え方は一緒なんでしょ？ あたしは住む場所より周囲の人間関係を気にするタイプだから、その二人もきつと住まい自体には嫌悪を抱いていないはず。けれどそもそも住む環境が違うからなあ…それぞれに染まるよね。明るさを得るためにAは火を起こすだろうし、Bは電気をつける。これは考え方で左右されることじゃない。二人ともそれが当たり前だと思ってるんだ。それがお互い、もしくは他人から見たとき二人の違いを知る方法… ってことか。

「二人を区別するのは、それぞれの経験の違いってことですか？」

自分なりの答えを導き出すと、オージ先輩は納得したように頷いた。

「うん、だいたい当たり。経験も記憶の一部だよね」

「ああ…なるほど」

なんとなく分かってきたような気がする。人間を脳味噌も心臓もあるような人型に考えるから駄目なんだ。人間は記憶。もし、記憶だけの存在だったらきつとドッペルゲンガーすらない。…って人型じゃないのは人間じゃないのか。

「なんとなく分かりました。でもそれは、」
「哲学的な話とかじゃなく、これは真実。脳味噌や心臓を無くしたら確かに人間は死ぬかもしれない。けれど、本来の死は記憶の有無に関係するんだ」

あたしの言葉を遮って、ハッキリと断言する。もう何も言えなくなつたあたしに、オージ先輩前置きは終わりだと述べた。これからが本題なのか。

それからの先輩の話は、こう。

もうひとりのチグサも記憶で出来ていたんだから、ここにいるチグサの記憶で新たに作り直せばいい。

あたしは目を丸くした…と思う。

「それっ…矛盾してませんか？ だってさっき記憶が違つと他人だつてそういう話をしませんでしたかっ？」

「おー、チグサ分かつてるね、偉い」

「わーい、やったあ誉められたあ。じゃないってんですよ！」

何ですか今の。バカにされてましたか？

「そもそもあたしの記憶をどうやったら使えるっていうんですかー！」

「そこは魔法でいろいろと」

「…魔法って万能なんですね」

「それはともかく、その記憶をどうするか。…正直そこまでは考えが至ってない。でもそもそも同じ人間なんだ…どうにかできると思うんだ」

先輩の言葉に不安になる。まだ何も分かってないのと一緒になのかも知れない。

…でも、最初から先輩たちも簡単に出来る方法じゃないって言うてた。間に合わなかったり、もし記憶をどうすることもできなかったりしたとき、それがきつとあたしの最後になる…。ううん、それは最初から決められていたことで。逆に先輩たちはあたしを助けようとしてくれるのに…文句なんか、やっぱり言えるわけもない。

「分かりました。ありがとうございます」

そう思い、あたしは聞き分け良く振る舞ったが、オージ先輩からすると予想外の反応だったらしい。首を傾げて見られたので、取り繕うように笑ってみせる。

「大丈夫です、あたしも言葉通り死力を尽くしたいですから」
「チグサ、それは——」

オージ先輩が何か言おうとしたときだった。

「おお、ここにいたのか！」

うるさいくらいの大声があたしたちの間に割って入ってきた。一体何よ、と振り返るとそこにいたのは、大きな紙袋を手にしたユーゼン先輩だった。

ユーゼン先輩は入ってくるなり、あたしに怪訝な目を向けた。

「コラ、チグサ！ オージに何したんだよ」

「…は、はあ？ 来て早々なんですか。オージ先輩が何だって言うんですか」

ちら、と確認するもオージ先輩は至って普通だった。どうせオレのいぬ間にとかそんなところだろう。ひどい言いがかりだ。

ユーゼン先輩はオージ先輩の向かいに設置されたベンチに腰掛けると、大丈夫だったか、とか良いながらオージ先輩に構っている。そんなことしちゃってさ…。

「ユーゼン先輩、さっきまで女の子に囲まれてうはうはしてたくせに」

あたしがぼそりと呟くと、ユーゼン先輩が耳聡く聞きつけてあたしに必死な形相を向ける。

「オージの前で変なこと言うなよ！ うわあ、オージ違うんだ、オレはお前一筋だから」

慌てて弁解しているようだが、オージ先輩は聞く耳持たずなように、あらぬ方をボーっと見ている。こりゃケツサク！ なんとなく胸がすつとした。

…そう言えば、オージ先輩、ユーゼン先輩に邪魔される直前何か言いかけてたな。あたしその前なんて言ったっけ？ 大事なことだったらまた今からでも言うだろうし…聞かなくても大丈夫か。

「それよりユーゼン先輩、その荷物って？」

まだおろおろとオージ先輩の気を取り戻そうとするユーゼン先輩の側には、この店のブランド名が入った大きな紙袋が置いてある。この店のものが紙袋まで人気なのはこのデザインにあるんだろうと自然と理解する。グラデーシヨンの、これだけでお金が取れそうなものだ。さつきから気になってたんだよね。先輩も何か買ったんだろうか？

「ああもう、何言ってたんだ、お前のだろ。置きっぱなしになってたからオレが勝手に会計しといたぜ」

「あ、これあたしのだったんですか！」

慌てて紙袋を受け取り、中身を確認する。確かに、この歯ブラシも、このタオルもマグカップも、あたしが選んだやつだ。吟味に吟味を重ねて値段とデザイン両方を取った大切な仲間たち…。

悪いことしちゃったな、と大きく頭を下げる。

「お金も、本当にありがとうございます」

「それはいいから、チグサ、お前もオージの機嫌取りを手伝ってくれよ」

まだやってるのか…。

オージ先輩はふてくされてるというか、そもそも興味すらないよ
うなのにそこをどうやって機嫌をとれと言っただろう。

「今すぐ先輩から離れればすべて丸く収まるのでは——…ん？」

おそらく呆れ顔をユーゼン先輩に向けていただろうあたしだが、
膝の上に重みを感じて目を落とす。

そこにいたのは、ぶさいくつさぎだった。

「…え、アレ、なんでここに？」

あたしが探さなくちゃという見つける立場だったために、向こう
から来られると激しく調子が狂う。おかげで驚き通り越して冷静な
リアクションを取ってしまった。

先輩たちも、急にあたしが違うことをしゃべり出したので変な顔
してこつちを見ている。これこれ！ と自身の膝の上を指さすも首
をひねるばかりなので、どうやらあたしにしか見えていないらしい。

「オージ先輩、ぶさいくうさぎです、今ここにいるんですけどっ」

刺激を与えないように小声で叫ぶ。オージ先輩はすぐに理解したのか頷くともう一度あたしの膝の上を確認しているようだだったが、ぶさいくうさぎが何なのかすら知らないユーゼン先輩はまだまだ分かっておらず、じじーっとあたしの膝を凝視している。それはそれで変態くさいんだが。

とにかく捕まえようとそーっと手を伸ばす。おとなしく座っているぶさいくだが、瞬発力がすさまじいのも忘れていない。そーっと、そおっと…。

「あっ！」

叩きつぶす勢いで閉じた両手は空気を掴んだだけだった。ぶさいくうさぎはひらりと身を翻してユーゼン先輩の頭の上へと乗っかってしまったのだ。

「ユーゼン先輩いい…そこを動かさないでくださいね…」
「えっ！ 何なんだチグサ！ その猟奇的な目つき！」

せつかくのチャンスを台無しにするわけにはいかない。アリスちゃんみたいな真似はやっぱりあたしには似合わないわけで。

今度こそっ…！

「とおーっりゃあー！」

あたしが放った両手は、見事に捕まえた。…ユーゼン先輩の頭を。

「つてえ！ 何？ 何で急に張り手っ？」

「チツ、仕留め損ねたか…！」

「おいチグサ、お前は何か間違っているっ」

ユーゼン先輩の頭上から逃げたぶさいくは必死なあたしをあざ笑うかのようにぴよこんぴよこんとはね回り、あたしを右へ左へと翻弄する。

なんて小憎たらしいうさぎ！ 小学校のとき、飼育小屋で飼ってたうさぎはものすっごい可愛かったのに。地面からむしり取った雑草とか与えても文句言わずに食べきったのに。ああ、このぶさいくに見せてやりたいよあのうさ次郎！

「うつつ、今度こそ…」

息が切れる。先輩たちも見えていたら良かったのに。あたししか見えないせいで一人てんでこ舞い。次逃げられたらあたしは死ぬる自信がある。

肩で息をしながら、自動販売機の上に乗ったぶさいくうさぎ

を見上げる。

「今度はそつちなの、チグサ？　大丈夫？　ボクが今魔法で…」
「チグサ、負けませんっ」

フオオと、あたしは酔拳のごとく構え、狙いを定めた。

「ホアターッ！」
「おい、危なっ…！」

駆け出したはずのあたしの足は、完全に止まっていた。駆け出すどころではなく、向こうから迫ってきていた。段々と大きくなるぶさいくうさぎの体、と同時に傾くのは自動販売機。どういうことだ——違う、今はそんなことを考えてる場合じゃ…。
途端、あたしは体に重い衝撃を受けた。

「チグサ！」

オージ先輩のあたしを呼ぶ声が聞こえる。そして、激しい爆発音のような物が耳に叩きつけられて、自動販売機が倒れたのだと気付いた。

あ、あれ…あたし、つぶされてる？　さっきまで自動販売機の前について、あたし…。

「おい、大丈夫か？」

頭上から声が聞こえる。

「はい、大丈夫…」

なわけはなかった。ぼーっとしたままつられて返事をしそっとなつたけど。

——なんだろう、この状況は。

ユーゼン先輩、やっぱりいい体してますね。

触ってもいいですか？

ところで、警察に通報したほうがいいでしょうか。

「…どれですか、先輩…」

「は？」

あたしは、自分の腰にかかるたくましい手を掴む。

「正解は、どれでしょうか！」

「つていきなりの無茶ぶりかよ！」

「正解は、突き放す、だよ。チグサ」

分かりました！ とばかりにあたしは密着していたユーゼン先輩の体を押し離れた。

「あ、二人してひでえ。せっかくチグサがぺしゃんになるの守ったのに…」

押し離れたユーゼン先輩は口をとがらせながら、まだ手を伸ばしたままだ。なんとなくやらしい気がしてならない。

「…でも抱き心地はオージが一番だよな…」

もきもきする手はどうやら抱いたときの感触を比べているらしい。いつそ正解は三番、警察に通報で良かったんじゃないだろうか、そうだろう。心の110番いつきまーす。

「それよりチグサ、今はぶさいくうさぎだ。今だけは周りの時間を止めてる。ここらへんにいる？」

「時間止めてるって…うわあ、本当だ、人が止まってる！」

「時間がないから、チグサ早く」

「あ、は、はいっ」

オージ先輩は左手を構えていて、いつのまにやら魔法を発動していたらしい。確かに空間が張りつめている気がする。時間を止める

なんてきつとすごく高度な魔法に違いない。

あたしはすぐに周りを見渡した。時間が止まっているのはあたしとオージ先輩とユーゼン先輩以外のものは全てのように、人間はおろか倒れた自動販売機から飛び散るガラス片までもが浮いた形で止まっている。空気はかろうじて動いているのか、呼吸はすんなりできるけど、これだけが例外なのだろう。

ぶさいくうさぎは自動販売機の近くにはいなかった。たぶん、あの自動販売機を倒したのはぶさいくうさぎなのだろう。普通のうさぎじゃきつとできないだろうけど、あたしの夢から飛び出したうさぎはあいにく普通じゃない。どうしてそんなことを…あのままじゃあたし死んでたかもしれないのに…！

「いた！」

ちょうど休憩スペースを出たところ、笑顔のまま固まった女の人の上で片足を踏み出したまま固まるぶさいくうさぎを見つける。すごい、本当に止まっている。あたしは女の人に当たらないようにそうつとぶさいくうさぎに手を伸ばした。今度こそ、ようやくこの手に…。

「チグサ、待て！」

後ろから、慌てたようなユーゼン先輩の声が聞こえたけれど、それはすでに遅かった。あたしの意識は吸い込まれるように無くなって、あたしの耳にその余韻だけが残っていた。

…はて。

あたしどうして手を伸ばしているんだろう。ってそれはぶさいくうさぎを捕まえるためでしょうそうでしょう。だからこうやって手を伸ばしていても不思議じゃない。いや不思議じゃないけどさ、その手には何もいないじゃないか。白い体も、気持ち悪い顔もそこには見あたらず、ただ見たこともないような景色がそこに。

つかここはどこやねん。

「いらつしゃいませ？」

招かれたあたしが言うことではないつか。

単刀直入に言おう。今、あたしがいるのはさっきまでいたインテリア雑貨のお店ではない。まるでどこぞのお城のような広いホール。そんでおしりにすごい弾力感があると思ったら、えらい豪華な革張りの椅子に座っていた。肘掛けとか、すごい動物の彫刻が施されていて匠の技が伺える…が、絶対肘なんか置けない。

ふっと落ち着くように息を吐いて、今ある状況を受け入れようとする。…この景色。なんだか映画とかでよくみるような、縦長いテーブルのちょうど真ん中あたり。そこにあたしは座っていて、真っ白なテーブルクロスの上に燭台が一本二本…五本。料理が盛られて

いないお皿とナイフ、フォーク。どれもこれもアンティークって感じなんだけど。

ええと、これってつまり晩餐会の始まり？

「あたし、どうしてもこんなところに…」

だって、考えてもみてよ？ さっきまでお店の中にいたんだよ？ こんな瞬間移動みたいなこと…それにこんなところ見たこともない。豪華な内装…、まるで中世の画家がかいたような煌びやかで美しい絵のなかに入ったみたいだ。

どうしても身分違いで、インテリア雑貨店よりも数倍アウェー感が否めない。

オージ先輩の魔法？ でも、ぶさいくうさぎを手にした瞬間だったような気がする。目を開けてここにいたのは。ぶさいくうさぎがあたしをここに連れてきた？

けれど、この場にいるのはあたしのみ。豪華絢爛なもの内装だけで、テーブルの上には何の料理も準備されてないってことはお食事をどうぞってわけでもないらしい。え？ 今から持ってきてくれるの？ しーんとした空間にそれも期待できそうにない。

こうしてじっとしていても始まらないので、少しだけ動いてみることにする。服装を確認したけど、良かったフリフリのエプロンドレスなんか着ちゃいなかった。ジャメロンディアスのせいどころどころほつれた正真正銘の制服。

…って、あたしどうしてこうも簡単に受け入れちゃってるかなあ。こんな状況。いくらオージ先輩たちの来訪によって世界観が180度変わったからって。いきなりワープはないデショ。ナイナイ。

「は……。わっけわからん……」

思わず愚痴っぽくなる。自分と世界と。

とりあえず見て回った感想。豪華。綺麗。派手。高そう。庶民の来るところじゃない。……出口がない。

こんなことってありますでしょうか？ 出口といえばそう、扉がない。ここは独立した一つの箱のようだ。どこから入ってきてどこから出ていくのか。そんな簡単なことが「無理」ってな一刀両断を食らうだけらしい。

ふ、と諦めるように鼻息を出すと、声がひとひら降りてきた。

「ミツケタ」

ぶさいくうさぎの声……違う、聞いたことのある、いや、聞いたことのない声。

誰だろう、振り返ってみると、そこはもう豪華絢爛なホールではなかった。

あたしは公園にいた。……またしてもギャップの激しいワープです。こと。今度は見知らぬ公園に連れてきて一体何がしたいんだろう。人影はない。けれど、そこにはキリンの形をした滑り台と、半円のタイヤ、砂場に、ブランコと一通り遊べる子供向けの公園に違いない。

「オージ先輩？ ユーゼン先輩？」

ここは現実じゃない、切り取られたような公園だけの光景に違和感を覚える。天を仰いで一応呼ばわってみるが、返答はない。本当にあたし一人だけの世界みたい…。

じっとしていると不安に襲われそうになって、あたしは探索を開始する。公園といえば、近所にもあるけれど高校生になってから一度も行っていない。もう公園で遊ぶような子どもじゃないし、それよりもっとシヨッピングとか、カラオケとか大人な遊びをしたほうが断然楽しい。

キリン、タイヤ、砂場…と考え事をしながら回り、最後に立ち止まったのがブランコの正面だった。大人一人がギリギリ立ち漕ぎできるほどの高さで黒いゴム製の椅子が吊ってある。あたしの近所の公園のは木の板できてあり、見覚えはない。…はずだ。

「…はずだよな」

けれど近づいてみるとますます、妙な既視感にとらわれた。なんだかひどく、寂しい想いがこみ上げてくる。同時にチリチリと脳の奥にうずく何かの記憶。

もし、ぶさいくうさぎの時みたいに、ここがあたしの妄想を元に作り上げられたものなら…。考えて首を振る。分からない。

目をつぶって考え込むこと数秒。諦めて目を開けると、さっきまで誰もいなかったはずのそのブランコに小さな女の子が腰掛けてい

た。

——なんだあれ、あたしじゃないか。

「…え？」

さつきからワケの分からないことの連続だったけれど、これこそワケが分からない。だってあたしはここにいるし、そもそもそこにいるあたしは一回りも二回りも小さい頃の自分…少女時代のあたし。小さなあたしは両手を目元に当てて、泣いているようだった。ぐずぐずと鼻水をすすする音、時折漏れる嗚咽。自分の事のように胸が締め付けられる。

「どうして泣いてるの…？」

胸を押さえながら尋ねてみる。小さな女の子は、今と変わらないツインテールを揺らしながら首を横に振るとまた続けて泣いた。見知らぬ公園に、小さい頃のあたし…。何かひっかかるものがある。あたしはあたしの前にしゃがみ込む。

「ねえ、もしかして、迷子？」

「…うん…」

やっぱり。思った通りの返答であたしは確信を得る。本当に。本当だ、…これは昔のあたしそのもの。確か、小学生に

入る前、もうすぐお姉さんになるからってウキウキして家を飛び出したことがあった。どこにでも行けるなんて勘違いして、それでひたすら歩いて回って気付けば見知らぬ公園にたどり着いていた。そこでようやく自分が迷子になってることがどうしようも怖くなって、ひとりでブランコに腰掛けて泣きたいだけ泣いていた。

こんな風に。

「大丈夫…なわけないよね」

自分だもん。それくらい分かる。とつても怖くて、世界中であたしひとりぼっちみたいになくなって、このまま家に帰れない、お母さんお父さんにも会えない、それから死んじゃうんだ。きっとそう思ってる。

どうしようもなく、バカな子だな、なんて思い返して。

「帰ろう」

あたしは手を差し出した。小さなあたしは泣きながら、あたしに顔を上げる。信じてもいいの？　って顔してる。信じるも何も、あなたはあたし。あたしはあなたなんだから、家くらい知ってる。いくらバカなあたしとはいえ、このまま放っておくことなんてできない。ここが現実かそうじゃないのか、そういうことはもう考えてなかった。ただ、手をさしのべなきゃって。…死なれちゃあ困るしね。

「お姉ちゃん…だれ？」

おずおずと手を取りながら尋ねられる。未来のキミだよ、…なん
て言えるわけもない。言ったところでめったくそに笑われる気がする。
というか、あたしだったらそうする。あたしは、内緒といつて
ごまかした。

——あ、これって。

「あたしはにこ！ おねえちゃん、よろしくね」

にこりと邪気のない笑顔を向けられて、取り繕うように笑って頷
いた。

あたし、そういえば。

どうやって、家に帰ったんだっけ。あのときのあたしも同じ状況
にあった。一人公園ですっと泣いていて…、置き去りにされたまま
でいた？ それとも、誰かに連れられて、家に…。

『内緒』

あのときのあたしは、このときのあたし？

小さな手をぎゅっと握って、あたしは小さなあたしを、小さなあ
たしを救ってくれた「誰か」を思い出していた。

『しってるー？ にこはねえ、もうすぐしょうがつこうになるんだよ、おねえさんになるんだよ』

『わあ、すごいねえ。小学校になるなんて、規格外甚だしいね』

『でつしょー。あのねあのね、もやしすき？ にこ、きらいなんだけどね、にこね、たべれるようにしなきゃおおきくなれないの』

『そうだね。おかげさまで大きくなりました』

『きのうはね、おともだちのいぬがね、にこをたたいてね、すつこくいたかったんだ』

『あの凶暴なゴンザレスか…』

『だから、いつかにこ、あのいぬよりおおきくなるんだ！ そんなでもって、えいってふみつぶしちゃうの。もやしっぱいたべなきゃ』

『ゴンザレスも同じように成長するからね、今でも手に負えないよ。あの犬』

『…おねえちゃん、さつきからきいてる？』

『うん、聞ってる聞ってる。なんだか変な感じだけど。…あ、家が見えてきた』

『ほんとだ！ にこのおうち！ おねえちゃん、ありがとう』

ばいばい手を振って、あたしたちは別れた。

小さい頃、迷子になったあたし。知らない公園で泣いていたところを、そう、見知らぬおねえさんに助けてもらった。今まで忘れてたけど、変なおねえさんだったってこと、思い出した。

…これは、そのときの繰り返し？ 見知らぬおねえさんに助けられる小さい頃と、昔のあたしを助ける大きくなったあたしと、現実を二度同じだけど違うあたしとして体験しているのだろうか。記憶が変にだぶって不思議な感覚がする。

—— 本当に起こっていることは、現実なのだろうか。

「チグサ」

「…はい」

目を開けると、安心したように口元を緩める美少女があたしを上からのぞき込んでいた。

「やっと目が覚めた…」

ほっと息をつくと同時に、力を抜いたように首をこてんと傾け、まるで小さな花がつぼみを開くようにそっと微笑んだ。ああ、可憐

な女神さま…。

「オージ先輩…」

「ん？」

「悩殺されそーです…」

問答無用で膝から落とされた。ついでに地面にも落ちる。痛い。

というかあたし、恐れ多くもオージ先輩の膝枕にご厄介になっていたのか。頭がやけに気持ちいいと思っただけ…。寝ぼけてないで、こっそり堪能しとけば良かった。……すいません、なんか誰かさんの変態病がうつってしまってるようですね。

はあ…それにしてもやっぱり、オージ先輩の笑顔って癒される。前にジャメロンディアスに襲われたところに駆けつけてくれたときもそうやって笑ってくれたけど、今はもっと、違う、なんていうか……。たぶん、本当に心配かけたからだな。

「こら、ニヤニヤすんな」

「痛あつ！」

胸のくすぐったさは顔面に受けた衝撃により、霧散した。突然のこの攻撃…この憎たらしい野蛮な声といえは…。

「ゆ、ユーゼン先輩、いきなり酷いです。乙女の柔肌に」

「うるせえ。いつまでもオージをいやらしい目で見てるからだ。しかも柔肌どころか凹凸のないのっぺらだったぞ」

「せめて鼻はありますから！」

「ツツコミどころ違うだろ」

オージ先輩とは真逆に、ユーゼン先輩はいつもの通りあたしに対するデリカシーが欠けている。いくらなんでも顔はないでしょう、顔は。

あたしは気を取り直しながら、おもむろに立ち上がった。このまま地面に横たわっているのも乙女としては頂けない。もう一度椅子に座り直すと、ここが休憩スペースだということが分かった。ただ、さっきまでと同じ休憩スペースだと判断できないのは、自動販売機が何事も無かったかのようにまた悠然と立っているからである。あたしが気を失うまでは見事に地面に倒れていたのに。

「大変だったんだぜ。チグサが倒れてから。時間を止めてる間に自動販売機は元に戻せたものの、大きな音が鳴ったってんで人がわらわら集まるし。チグサ倒れてるからなにか事件があったのかと大事になるし」

呆然としているあたしに、ユーゼン先輩が説明してくれた。うわあ…それはさぞや大変なことだっただろうなあ。確かに自動販売機が倒れる音なんて半端なかったもん。どんなテロかと思うような音に違いなかったよ。それであたしが死人？ そりゃ、事件性強すぎるよ。

結局のところ二人の美貌をふんだんに駆使して、ことをおさめたらしい。いや、二人は違うように説明してたけど、聞く側からした

ら明らかに美貌勝利って感じだもん。だって笑ってごまかした、とかねえ？　それで人が納得するわけないっての。

とりあえずまあ、それらはほぼあたしのせいなので、深く謝っておいた。

「それよりチグサ、気は確か？」

「…え、いきなりどういう意味デスか？」

気は確か？　ってどんな質問…。見るとオージ先輩は微かに眉根をひそめている。うん、心配してくれてるのは分かるけど。まるであたしの頭がオカシイみたいな聞き方ではないですか。

「急に倒れたでしょ。あれはチグサのいうぶさいくうさぎを手にしたから？」

「そうだけ。得体のしれないもんを迂闊に触るやつがどこにある」

叱られてしゅうんとうなだれる。言われてみればそうだけど…あのとき触る以外にどうやってぶさいくうさぎを対処できたの？　今更だけれど。

「でも別に、実害はなかったから大丈夫ですよ。たぶんあれは、良かったんだと思う。だってあたしが手にしたのは…おそらく記憶」

俯いて、確かめるように手をぎゅっと握った。衣擦れの音や息を

呑む声が聞こえたから二人も多少なりとも反応したんだと思う。

「記憶って、どういう意味？」

「現実かそうでないのか、本当はよく分からないけど、あたし小さいころ知らない公園で迷子になったことがあったんです。そのとき知らない女の人に助けてもらったことを覚えてます。…いや、正確に言えば、思い出した、かな。それで今回意識を失ったとき、あたしはその公園で小さい女の子を見つけました。小さな、あたしです。見知らぬおねえさんも、小さいころのあたしも、どっちもあたし…」

言っててやっぱりワケがわからなくなる。自分の記憶も疑わしくなつて、なにがなんだかサッパリって感じ。でも分からないのは二人の方だろう。こっそり顔を上げると、やっぱり思った通りの反応。ユーゼン先輩のポカン顔なんてそりやもう見物なくらいに。

「待てよ、チグサ。それって二人のお前が存在してたってことなのか？」

「頭の中で記憶がだぶるんです、たぶん、そういうことなのかも」

そういうことなのかも、って。あたし、変だなあ。あり得ないの分かってるのに、何故か決まり事みたいにそこは許容してしまう。

「なあ、オージ、そういうことってあるか？ 例えば、魔法の力とかで、過去に戻るとかそういった…」

「ないよ。可能と言えば可能だけど、それは実用的じゃない。魔法

使用者に及ぶリスクの方が強すぎるし、そもそも過去に戻ったところで何になる？」

… たぶん、何も。あたしがあたしの過去にもどって小さなあたしを助けたからって。迷子くらいで死ぬとも思えないし。

「チグサにしか見えないうさぎの存在と、過去と今のチグサ…。それは一体何を意味してる？」

そう、いわばぶさいくうさぎが記憶だったと言える。だとしたらあたしの夢から飛び出した記憶が、もう一度あたしの手に戻って…。でもそれは、複雑なあり得ない記憶。

「アチラ側のチグサが死んだから、コツチのチグサにも影響が出たのか？」

ユーゼン先輩が目を細くしながらあたしを見る。まるで吟味しているようだが、その隣でオージ先輩は軽く握った右手を顎の下に添えた。

「その可能性も否めないけど…。過去に前例がないから調べようもない」

「セカイが異常を排除しようと働いてんのか？」

「そんなことできるんですか？」

「自然淘汰とかあるだろ、そんなんで」

そんなんで、ってユーゼン先輩も適当だな。それは別に世界に備わる能力ってわけではないんじゃない？。でも、もしもセカイというものが自己治癒能力を持っているとするなら、それもないとは言えない。けど、持つてるなんて断定はできないしな…そんな抽象的な…。

「ボクは…何か作為を感じる」

そんな中、オージ先輩がぽつりとこぼした。自分たちの推測でいっばいだったあたしとユーゼン先輩は、一緒に顔を見合わせた。

「もしかしたらチグサ、キミはとんでもないことに巻き込まれていくのかもしれない」

とりあえず今は様子を見るしかない。最終的に下された判断はそれだった。あたしに何かが起こっていることは事実として認めざるを得ないけれど、それってつまりは良きにしろ悪きにしろセカイの異変に関係しているということだ。もしかしたらあたしに起こる現象について、深く理解することができれば、あるいはセカイを救う手だてになるのかもしれない。

「とんでもないことに巻き込まれている」… オージ先輩の言葉は確かに不安を駆り立てるものだけれど、よくよく考えればそれも今に始まったコトじゃない気がする。アチラのあたしの死… 純粋なものとは思えなくて。何かの陰謀があったりするんだろうか。

… 正直、現実離れしすぎて逆に冷静になってしまっ自分がいる。それに、あたしは、一人じゃない。

「いいのあった？」

ボーっとしていたあたしの視界にひょっこりとオージ先輩の顔があらわれて、あたしは慌ててそこにディスプレイされていた服をひつつかんだ。

「は、はははい！ こういうのなんてどうですかっ」

今が買い物途中だったということをやうやく思い出す。あたしの体は特に問題なかったから買い物が続けようってことになって、繁華街にある若者向けのショップが軒を連ねる商業施設までやってきたんだった。ああ、二人を付き合わせてるのにあたしったら、のろま。

「…似合わない」

「…ですね」

何も考えずに手にしていたのは、ワイルドな革ジャンだった。ここは確かに女の子向けのブティックなんだけど、最近の流行モノなのかここぞとばかりにディスプレイされていた。かわいいけど、…確かにあたしに似合いそうもない。あたしはどっちかっていうと素朴系だからなあ…。派手か地味かっていったら地味だしなあ…。あたしはとりあえずそれを戻しておいた。

「それより、あの、ユーゼン先輩は？ さっき二人とも外で待ってるって」

オージ先輩の隣、ユーゼン先輩のベストポジションを確認するが、誰もいない。オージ先輩一人でやってきたんだろうか。いくらなんでも無関係の男が入れば他のお客様に迷惑だとかなんとか、常識知らずのユーゼン先輩にしては正論で、二人揃ってあたしが買い物を終えるまで待つてくれる約束だった。

「チグサが遅いからでしょ。女の子って時間かかるもんなのは分かるけど」

「あー、時間かかるってのは偏見です。女の子でも早い人いるし、男の子でも時間かかる人いますよー」

「そうなんだ…ごめん。でもとにかく遅いから、様子を見に来たんだよ」

「ああ、それはこちらこそすいません。…でも、オージ先輩なら特に違和感はないかと」

ここにいるの。

言つと、オージ先輩は複雑そうな顔になったが、そんな理由でユーズン先輩に様子を見てくるよう頼まれたらしいので、かわいいと言ってしまったときみたいに怒ることはしなかった。

「…良かったら一緒に選ぶよ」

「え、いいんですか、先輩」

「ただし、センスには期待しないでね」

「……」

「どうしたのチグサ」

あんまりにも可愛いこと言うからじゃないですか。やっぱりあたしもユーズン先輩みたいに、オージ先輩にめろめろだ。

「さつき、何考えてたの？」

今度は本気で服を物色していると、隣で服をあさりながらオージ先輩が聞いてきた。本当に違和感ないや、先輩。他にもお客さんいるけれど、誰も不審な目で見ようとはしない。というか、むしろフアンシーなクマさんとかお似合いでしょう、コレ。

ちらちら見てたら、聞いているの？ って不審がられて慌てて頷いた。

「あ、はい、さつきですよ。あ、別に何も考えてなかったというか」

「嘘。ずーっと一点を見つめて微動だにしてなかったじゃん」

「う…先輩そんなに見てたんですか」

うん、って先輩。チグサ、ハズカシーです。

けど、そこまで見られてたんなら隠すこともできないか。あたしは諦めてオージ先輩が言った「とんでもないことに巻き込まれている」という言葉について考えていたことを告げた。

「…ごめん、なんか不安にさせたね」

「いえ、そういうことじゃないんです。…不安にならないといったら嘘になりますけど、でもそんなに怖くはないんですから」

あたしは元気だとアピールするように、適当に手にとった紫のト

ツプスを引つ張り出して自分に当ててみる。これどうですか？　つて聞いたらやっぱり似合わないって言われたけど。うう、もっとあたしに似合うもの…。

「…我慢してる？　普通は怖いと思うよ」

「え？　怖くないですよ？」

今度こそ誉められる服を！　と、半ば必死になりながら探す手を止めずに答えると、隣でオージ先輩の動きが止まったことが気配で分かった。あれ、変なこと言ったかな。こっそり隣を見るとちょうど先輩の顔が迫ってくるところで、戸惑うあたしを余所に先輩は顔をのぞきこんできた。

「えあつ、な、なんですかっ？」

「本当に？　怖くない？」

「はあ…、はい」

何を疑っているんだろ。オージ先輩は結局何が聞きたかったのか、肩が上がりきつてるあたしから離れるとおもむろに作業に戻って、そうか、と呟いた。

——あ、心配、してくれてるんだろーか。

「オージ先輩」

あたしは元の位置に戻って服をしげしげと眺めるオージ先輩の手を掴んだ。掴まれた先輩は目を見開いてあたしを見たけど、構わず伝えたいことを伝えることにする。

「あたし、先輩がいるから怖くないです。不安だったり、分からないことだらけだけど、ここまで守ってくれたのはオージ先輩たちでしょう？ これからも何かがあるとは分かっているけど、なんとなくやるような気がするんです」

安心させるように…と、思ったつもりだったけど、オージ先輩の顔のぽかんとした顔をみたら

、自然に笑みがこみ上げてきた。おそらく力のない笑顔になってしまっただろうけど、これが嘘じゃないってことを分かってくれればいい。

「怖くないですよ」

もう一度、念を押すように告げた。オージ先輩は一瞬面食らったように瞬いたけど、しばらくして掴んだあたしの手ごと自分の顔の前に手を持っていくと、その表情を隠してしまった。

なんとなく、泣いてしまうのかと思ってぎよっとしたけど、手の隙間から見えるほんのり色付いた頬が違うと知らせていた。

…かわいい。

「ノーテンキ」

「あ、やっぱりユーゼン先輩と同じ扱いをする気ですねっ」

掴んだ手を引き戻すのとはばかりで、しばらくそのままにしておいた。こんなオージ先輩も貴重だし。もしかして嬉しく思ってた。それなのかな？ ユーゼン先輩は思い出が欲しいって、そう言ってた。それは他人と関わりをもつことができないからって。

こうやって頼られることも、今まではなかったかもしれない。頼るのが、本当にこんなアホなあたしで本当に申し訳なかったりするけれど。

「…してないよ」

「何か言いました？」

「言っていない」

なんだっただ？

結局、オージ先輩の顔は照れ隠しなのかあたしの手を振り払うと、服を一式二式とあたしの前に差し出し始めた。

「チグサには、こういうのがいい」

本当に選んできてたのか、そこにあるのは、小さな花がちりばめられたワンピースやらパッチワークが可愛いスカートやら、あたしも大好きなカントリー調の服ばかりだった。ちゃんとあたしのこととを分かって考えてくれたのが、驚きと同時に嬉しくて、思わず握りしめてしまった服を慌ててのばした。

「ありがとうございます！」

うん、と頷くとオージ先輩はそれらを持って、あたしが何か言う前にさつさとレジに持って行ってしまった。お会計、してくれらしい。それがますます申し訳なくて、…やっぱり嬉しくて。女の子みたいだし、ここにも馴染んじゃってるけど、今のオージ先輩はなんだか男らしい。

戻ってきた先輩に存分にお礼を言ってお店を出ると、待ちくたびれた顔をしたユーゼン先輩が座り込んでいた。チンピラみたいですよ、って言ったらお前はバカみたいな面してる、って言われてしまつて、否定できずに苦笑い。

「なんか、良かったみたいだな」

「はい、ありがとうございます！」

ユーゼン先輩はオージ先輩を嬉しそうに見つめていた。…って、そっち？ あたしの存在は？ …まあ、いつか。オージ先輩も、満足みたいだし。

「じゃあ、帰るか」

「はい、またお邪魔させて頂きます」

「…なにかしこまってるの」

「今から向かうところか、お前の家だろーが！」

頭をゴツーンと小突かれた。…っていうか、殴られた。頭をさすりながら、二人を見ると楽しそうに笑ってた。

…あたしのおうち。必要に迫られてなくしてしまった帰る家は、そこに新しく用意されている。二人のかっこよくて頼りになる先輩付きで。あたしに悲劇のヒロインという肩書きはどうやら似合わないらしい。どっちかっていうと、幸せ者、になったりして。

痛すぎるほど、ジーンとする歓迎に、あたしははにかんだ。

23（後書き）

ここまで読んで頂き有り難うございます。これで第一章っぽいものが終わりとなります。説明ばかりでよく分からなかった方もいるかもしれませんが、今はまだ分からなくても支障はありません、たぶん。

まるで最終回のような流れでしたが一応続きます。ちょっとした番外を挟みつつ、二章っぽいものに進みたいと思っております。

これからもおねがいします！

番外編・チグサの一日

よく考えれば、ここ二日間あたしは今までは考えられない、とてつもなく非凡でエキセントリックであり得ない事態に陥っていたのではないだろうか。

…ここで「よく考え」なきゃわかんないやつは正真正銘のバカだと言わざるを得ないくらいには。

全ての始まりが、帝王子朗、神代ユーゼンと名乗るセカイの管理者、二人の先輩たちとの出会い。何も知らなかったあたしにとつてはブツとんだ出会いだった。オージ先輩は指を一つ鳴らすだけで魔法を使ってしまう魔法使いで、ユーゼン先輩は常に半裸の変態野郎だったのだから。

二人はもう一つの世界の存在を示し、そこに生きるもう一人のあたしが死んでしまったことを告げた。このままでは、セカイのバランスが崩れて二つの世界が滅んでしまうらしい。はんぶんこなあたしがここに生きているせいで。正直わけわかんないとこあったけど、それがとても重大なことだと分かったから、あたしは死ぬ覚悟を…たぶん勢いだけど、していた。けれど二人は死ななくていいってあたしに言ってくれた。そうじゃなくてももう一人のあたしを取り戻そうって。

そのためには、あたしの記憶が必要らしいんだけど…、あたしの記憶だつて本当に信頼できるものかも実は不安だ。勝手に頭から逃げちゃったり、うさぎさんになって追いかけたと思えばよく分から

ない記憶が戻ってきたり。もしかすると何か違う力が働いているのかもしれない…この現象は二人の先輩も分からないと言う。

本当に、普通の人には味わえない体験をしてきたもんだ。よく分からなくなってくるとそりやもうあたしも頭パーン寸前だったりするんだけど。けれどあたしのそばには心強い仲間たちがいるから、ちつとも怖くない。

うん、そうよね、チグサ。

あたし、頑張れるよねっ…！

「――と、思っただあたし…いいから、チグサ、そう思うのよ…」

朝から手に汗握ってお疲れ様なあたし、千草二子、通称チグサ。怒涛の二日間を終え、ようやく心休まる日を迎えるはずだった今日だが…この家に住む限りはそうそう休ませてはもらえないらしい。

あたしは背にぴたりとついた部屋のドアに神経を集中させないように努力した。

そんなあたしをブタ姿のシロくんがベッドの上から不思議そうに鼻をふがふがいわせて見ている。

せっかく今日はシロくんのHADAKA攻撃がなくて安心していったというのに。恐る恐る目を開けてまでご起床したのに。今日の危険地帯はここじゃなかった…！

あたしは今しがた目撃してしまった光景を頭から早急に追い出す。帰ってきそうになるところを鍵を閉めて気持ち的バリアを張って入

ってこれないようにしてから、

「コラ、ユーゼン邪魔だ近付くな」

「いやあ、ほんと癒される」

「おまえ、いい加減にしろ。あ、こら」

「オージはほんとかわいいなあ」

いとも簡単に帰って来やがりかつ新しい光景を植え付けやがりな
さった。

あたしは耳をふさいでううつと唸った。神経を集中しないどころ
かビンビンに研ぎ澄ませてしまう自分が…悔しいです！

うつ…観念するしかなさそうだ。あたしは起きるとき以上に気合
いを入れ、部屋の扉を開けた。

何も知らずに見てしまった光景と、寸分も違ってない。キッチン
に立つオージ先輩を後ろから包みこむように抱き締めるユーゼン先
輩の姿。

「お、起きたか。おはよー」

「チグサ、まだ寝てていいのに。朝御飯はまだなんだ。今、つくっ
てるから」

あたしはその場にうなだれそうになるのを我慢して、おそらくひ
きつつているだろう笑みを浮かべる。

「いやあの…はあ」

言葉が出てこない。

だつてもう！ オージ先輩は女の子みたいにかわいくて、エプロンだつて似合う。それを男らしいユーゼン先輩がぎゅって…！ お似合いじゃないですかどう見たって！ …でも真実を思うと肩が自然と下がってしまう。なんだかとてもなく残念すぎる。

「だからユーゼン邪魔なの。手伝わないんだつたらあっちに行つて」

「やだーオージと離れたくねえもん」

「…つたく、ユーゼンなんかきらいだ」

「ほら、すねんなつて。俺は好きだぜ」

頑張れ頑張れチグサ！ たとえ一番の非常識がそこにあつたとしても！ 仲間がいるから大丈夫、あたしは頑張れるの！

…朝からどれだけあたしの氣力を奪つてくれる氣だこの仲間たち…。
…。

今日は、あたしの居候準備の日。昨日三人で買い物に出かけたときを買った雑貨の設置と、お部屋の移動をすることになった。結局オージ先輩の部屋がそのままあたしの部屋とすることになってしまった。追い出すみたいで申し訳ないな…と思うが、きゃあきゃあ喜

ぶユーゼン先輩を見てまた違った意味で申し訳なさがこみあげる。
オージ先輩はユーゼン先輩の部屋に移動となるのだ。

マンションまるまる一階分を使った無駄に広い家なんだから空き部屋の一つや二つあるだろうと思うのに、ウォークインクローゼットだの映画鑑賞ルームだのはつきり言って無駄としか思えない部屋で占領されてるらしい。あたしはそのクローゼットでいいとおずおず言ってみたが、女の子なんだからと二人にぴしゃりと言いつけられた…。オージ先輩は本心なんだろうけどそのときのユーゼン先輩の満面の笑みは信用できない…。

ってわけで、今はその元オージ先輩の部屋からオージ先輩が荷物を取り出してる最中。服やら本やら最低限のものしかないみたいで作業はすぐに終わりそうだ。内心ベッドも持ってってくれないかな…。なんて思うが優しいオージ先輩のこと。それは使っていいからと言っに違いない。やっぱりシーツは買っとくべきだったか…。昨晚もドキドキしながら寝たことを忘れてはいない。

あたしがぼーっと見てる間に、荷物は運び終えたらしい。声をかけられてようやく気付く。あたしは慌てて用意していた紅茶を差し出す。

「ありがとうございます、先輩」

オージ先輩は紅茶を受けとるとこちらこそと言って微かに微笑んだ。…わあ、先輩って表情がないときはほんとに無表情なのに、笑うとやっぱり華がある。

あたしはその顔にみとれながら、自分も紅茶を手にした。先輩が好きな味だって言ってたけどあたしは紅茶自体あまり飲んだことが

なく、飲みやすいように少しミルクを入れてある。

「それ」

ふいにオージ先輩が声をあげたので、あたしは首を傾げた。

「そのマグカップ、昨日買ったやつ？」

「あ、これですか？ そうなんです。かわいいでしょう？ 緑と赤とで迷ったんですけど…」

指摘されて、あたしも目を向けたマグカップの色は赤。結局この色を選んでしまった。ちりばめられた銀色の星がかわいくて…。

「うん、チグサには赤が似合うかな。その服も思った通り似合う」

指さされたのはこれまた昨日買ったあたしの部屋着。赤のゆつたりした素材のワンピースだ。下には膝下までのレギンスをはいて動きやすくしていた。

「ほんとですか？ オージ先輩が選んでくれたんですね」

「うん、チグサの薄い髪色には映えるね。かわいい」

さらつと言われてちよつとドキリ。昨日もだつたけどオージ先輩
ってそういうの何の臆面もなく言えちゃうひとなんだ…。や、今の
は服がかわいいって話でしょもうチグサたら自意識過剰だ。

「お、紅茶か。うまそうだな」

あたしがあたしに突っ込みを入れていると、頭にどしんと重みが。
俺も飲みたい、と言うのは紛れもなくユーゼン先輩。さっきまで風
呂掃除に言ってたけどどうやら終わったみたい。…軽く大晦日の大
掃除みたくなってるな。

「うう、分かりましたから。急に来たらびっくりします!」

ひょいと体を屈めて、頭に乗ったユーゼン先輩から逃れる。
先輩は相変わらず半半裸だし…そういう服しかもってないのかね全
く…と動じなくなってる自分に恐怖。

「俺ダージリンな!」

「えっと、これでいいんですよね?」

さっきオージ先輩と自分の分と煎れた葉の缶をとりあげるが、ユ
ーゼン先輩は違うと言って首をふった。

「それはアッサム。俺が好きなのは緑の缶の方だ」

あ、確かに並べられてる。なんだか意外。紅茶にこだわりがあるなんて。

あたしは頷いてダージリンの紅茶をいれる準備を始めた。

午後は眠くなる時間帯。昼間に作ってくれたオージ先輩渾身のランチはやっぱりおいしくて…。食べ過ぎたら案の定眠気が。あらかた部屋の片付けは終わっていたから、腹ごなしにソファにゆったり腰かけていると、向かいでうとうとするユーゼン先輩。やっぱり眠いんだね。…あたしの膝を枕に眠ってる元ブタさんもいることだし。オージ先輩は買い出しに行くとか出かけてしまった。

時計を見ればもう三時だった。いつもならゴロゴロしてる時間帯だ。今とあんまり変わんないか。でもゴロゴロしてたらお母さんから怒られたりして。自分だつてのんびりしてるくせに、あたしにはあれしなさいこれしなさいって。まあしなかったけど。…お母さんたちちゃんとやってるかな。邪魔してなければいいけど…不安。

「……変な感じ」

あたしはそつとシロくんの頭をどけると本物の枕をその下に設置する。立ち上がったあたしは腕捲りをしつつ、ベランダに向かう。目指すは洗濯機。

「あたしこそ邪魔にならないようにしなきゃ」

意気込みつつ、ベランダに出る扉の手前の部屋に入る。そこは洗濯機専用の部屋。汚れものが山のように積み上がっている。昨日今日だけで要洗濯物が大量生産されてしまった。

あたしはさっさとやつつけてしまおうと何の確認もせずその洗濯物に手を伸ばしたが、それが間違いだった。

「…あ」

掴みあげたその物体は……ぱんつ。詳しく言えば、あたしではなく赤地に「絶頂」とかかれたド派手な、とらんくす。

こ、これは…！

あたしは顔が熱くなっていくのが分かった。ぼぼと燃え上がりそうになるが、手が硬直しきって動かない。放したいのに放せない。そのとき、まどろみから解放されたいらしいユーゼン先輩がやってきた。

「チグサあ？ 何やって……」

硬直。目だけぱちぱち。

なんてタイミングの良い。男もののぱんつを持ち上げて赤くなる女の構図はさすがに……危ない。

先輩の固まった顔は、みるみるうちに変化していった。…意地悪

な笑みに。

「はっはーん……チグサ、そういう趣味があたりで」
「ちっ…！」

違いますと言おうとするが、ますます恥ずかしさがこみあげてうまく言葉に出来ない。それに比例して手も動いてくれない。

もあー！ まさしくあたし変態じゃないですかっ！ ユーゼン先輩ばかりを責められないくらいにはっ。

「やだ、チグサちゃんたらイケナイ子だな。ユーゼンくんもさすがに恥ずかしいぜ」

そんなことちっとも思ってたねえ顔してんじゃないですか！ 明らかに楽しんでますって顔してる！

あたしは力を振り絞った。

「そそそ、そんなんじゃないんですってばあ！」
「じゃあどういつつもり？ 手洗いでもしてくれんのか？」
「うぐっ…」

死んでも洗うもんですか！ と威勢がいいのは心の中だけで、ニヤニヤする先輩を睨むしかない。一体これはどんな羞恥プレイ…！ぎりりと握りしめたトランクスはやっぱり離れてくれる気はない

らしい。

「…なにしてんの？」

と、そこで天の助け。おそらく赤ら顔のまま肩で息をしてるであろうあたしを無表情のまま見つめるのは、いつの間に帰ってきたのかオージ先輩。先輩はさすがにこんなあたしを追い詰めたりはしないはず…！…たぶん…前科はあるけど…。

と、救いの眼差しが伝わったか、オージ先輩はちらりとユーゼン先輩を見上げる。ユーゼン先輩はきゅっと縮み上がった。

「チグサに何言ったんだよユーゼン…」

「ああっ、違うんだよオージ！ ちょっとしたいたずら心っていうか！…ってうわ、冷静に怒ってる」

言う通り、オージ先輩のにつこり笑みが炸裂。かわいいだけに迫力は満点。このあとユーゼン先輩がどうなったかはあえて言うまい…。

結局洗濯はオージ先輩にしてもらった。恥ずかしいことしちゃったと経緯を話すと、そりゃ恥ずかしいよねって理解してくれた上で代わってくれた。もともとあたしが勝手にやりだしたことなのに…ごめんと謝ってくれるオージ先輩は偉大だ。偉大すぎる。

その間ふてくされてシロくんと遊ぶユーゼン先輩を横目にあたしがしていたのは夜ごはん作りだった。今度こそ役に立とうと思って無理矢理申し出たのだ。

「お疲れさまです、先輩。夕飯召し上がります？」

腕まくりされていた袖を戻しつつ、オージ先輩がリビングまで戻ってきた。あたしがあんまりにも時間をかけて夕飯の準備をしたせいで、結局洗濯物全て干し終えるまでに至ったらしい。ベランダまで入りきらずに部屋にまで侵入する洗濯物。

「うん、頂くよ」

「おー、俺もー」

準備万端。オージ先輩どころかユーゼン先輩まで反応してすでに机の前を陣取っている。ユーゼン先輩と遊ぶのにも飽きたのか、シロくんがとてとてあたしの側まで走ってきた。

「はい、じゃあ今から持っていきますね」

あたしはシロくん到手伝ってもらいながら作った料理を運び出した。オージ先輩までは行かずとも、鶏肉のソテーに生ハムサラダ、トマトスープとまあまあいい感じの食事が用意出来たんじゃないだらーか。とか思ってみる。

二人もそう思ってくれてるらしく、意外そうに料理とあたしを見比べている。失礼な反応だけど、まあ自分でも意外ですし。

「へえ、うまそうな匂いがしてる。なかなかやるなチグサ！」
「うん、おいしそう。いただきます」

ユーゼン先輩は鶏肉へと、オージ先輩はスープへと手を伸ばす。
ちよつとどきどき。まさか自分の手作りを家族以外の男の人に食べてもらえる日が来るなんて。どうしようチグサ、オトナの階段のぼっちゃったんじゃない？

どうでしょうほらおいしいでしょう、とニヤニヤ二人を見つめて
いると。

「……」
「……」

——二人は無言で地面に倒れ込んでしまった。

「は？　なんですかその反応は」

まだ口をつけていないシロくんと顔を見合わせて首を傾げる。と、
ぴこんと頭が解を導き出してくれた。あたしはすぐさま二人の側に
向かい、突っ伏す地面に顔を寄せる。

「ああ！　おいすぎたんですね！　わあ、チグサどう
しよう。初めての手料理にそんな感激してもらえとは思いません

でしたあっ」

…と思ったのに、何故睨むユーゼン先輩。いつもの陽気で脳天気な雰囲気なんか欠片も見えないほど、影になった表情に眼光だけ鋭くあたしを突き刺している。

「本気で言ってるのかテメエ…」

で、テメエって、なんか先輩、二人称凶暴じゃありませんか…？
うひゃあ、目がぎらぎらしてるっ！ オージ先輩もげんなりした表情で崩れ落ちたままだ。

「どうやってたらこんな…ま、マズイものが作れるんだよっ…！」

息も絶え絶えな先輩に胸がドキドキ…とかそんな馬鹿なことを言ってる場合じゃなくてですね。今なんて言いました？ ちょっとあの「マズイ」とか言っちゃってました？

ちょっと待つてくださいいねと取り繕ってへらへら笑いながら、自分も鶏肉を恐る恐る口に入れる。

「……あたっ、あたしを殺す気ですか！」
「それはこっちのセリフだバカ！」

自作の料理はあり得ないほど不味かった。げぼげぼむせるあたしに掴みかからんばかりに怒りを露わにするユーゼン先輩。…今回はかりは先輩ばかりを責められそうになかった。

敗因は、自分を甘くみていたことにあった。

「きちんとレシピ通りに作ったただあ？ 嘘をつけ、このワラ野郎！」

「ワッ…！ そんな人を草の束みたいに！」

「千の草だろその通りだっ」

事情を説明したユーゼン先輩は酷くご立腹だが、段々あたしの扱い酷くなってきてないだろうか。だいたいチグサつてのは名字なのに…家族みんなバカにされた…。

まだ辛そうなオージ先輩も今回は庇ってはいくれそうにない。

「確かに今まで料理はしたことないですけど…でもちゃんと作りましたよ？ あたし自身のセンスも味覚も及ばないそこでどうやってマズイものができると思うんですか？」

「ここにできてるだろ」

「…うっ」

「ごもつともー。」

はあ…あたしって、何やっても駄目なのね。せっかくあたしにや

れることをやろうと思ったのにまた迷惑かけちゃったし。役に立てなかった、申し訳ない。

そこでオージ先輩と目があつた。呆れられる…そう思ったけど。

「気持ちがありがと。ユーゼンももういいだろ？ それより」

お礼、言ってくれた、先輩。それでもって話題まで変えようとしてくれて…。ボキャブラリー貧弱ですいませんが言わせてください。先輩素敵です。

「チグサ、これ」

オージ先輩は本当に話題があつたらしく、あたしに茶色の紙袋を渡してくれた。あれ、これさっきまで玄関に置いてあつたやつ。

「なんですか？」

「預かつてきた。チグサの両親からだよ」

「…え、あたしの両親っ？」

突き動かされるように紙袋を開いて中を見る。その中にあるのは、太いアルバムやお気に入りの本の思い出のものから、通帳や貯金箱など大切なものまで。

尋ねるように先輩を見上げたら、オージ先輩はあたしの前髪をツンと引っ張った。

「火事の中、これだけは守ったって。あの子には必要なものだから命を張ってでも守りたかったって。渡すように頼まれたんだ」

良かったね、どこか人ごとのように。あたしは引っ張られた前髪がするりと元の位置に戻るのを、遠くに感じて、

「うめ」

「謝らないでくださいね？」

やっぱり、オージ先輩は言うと思った。きっと家を燃やしてしまったこととか、両親の側にいられないこととかそういうの、気に病んでくれてるんだろう。先輩のせいばかりじゃないのに。

懐かしい匂いのする荷物は、あたしをホッとさせてくれる。嬉しくて、やっぱり切ないわ。

「なんだかなー。一緒に住んでたころは全然思わなかったのに。途端離れちゃうと、急に気になっちゃうんだもん。お母さんたち、やっぱりあたしのお母さんとお父さんなんだ…」

当たり前なのね。ふつと笑うと、ユーゼン先輩が頭を撫でてくれた。慰めるというよりは、身に刻んどけよってそんな感じ。二人も絆は得難いものだって知ってるからだ。

「…オージ先輩、行っただんですか？」

「うん。昼過ぎにね。ご両親、元気になっていたよ。チグサのこと伝えたら、嬉しそうにしてた。そんでもってよろしくされてきたから」

「…よろしく？」

「うん、そもそも挨拶にいったんだ。おたくのお嬢さんをお預かりしています、って」

それは…有り難いけど。なんか、オージ先輩それってちょっと方向性間違ってますか？ そのご挨拶の方法は、なんかまるで、そう、おたくの娘さんを下さい、みたいな……。

「チグサ、目を覚ませ」

「いふあいふえふ、ひゅーふえんへんふあい」

「オージ、それはいくらなんでも心配じゃねーか？ こんなでも一応女なんだし、両親としては…」

「ふおーひゅーいふいふえふか」

さつきから失礼すぎる。そしていい加減引きちぎりそうなほどほつぺたを引っ張るのをやめてください。

「え？ そう？ 別に何も言われなかったけど…」

あたしは無理矢理体を遠ざけて、ひっぱられているほつぺたを解放させた。

「ふう。…多分、あれです。オージ先輩ならば害はないだろうと思っただと」

「害って、あのなチグサ、男は可愛かろうが優しくかろうが狼になるときだってあるんだ。すぐに信じて良いものじゃないぞ。まあ、俺たちは見た目通りだけど」

「でしたらユーゼン先輩には注意しなくちゃですね」

笑顔で一步ユーゼン先輩から離れる。ぶつぶつと口をとがらせるユーゼン先輩は無視して、あたしは「そうじゃなくて」と見解の違いを示した。

「多分、お母さんたちにはオージ先輩のこと…」

「何？」

「や、いいですよっぱり」

まさか、オージ先輩を狼どころかメスだと思ってます、なんて言えるわけない。言っても怒られはしないだろうけど、落ち込ませそうだ。

「まあ、でも反対されなくて良かったじゃないですか。わざわざ会いに行ってくださってありがとうございます」

毎日会っていたお母さんたちとはもう二日も会っていない。元気

にしているならなによりだ。アチラ側のお父さんとお母さんは、あたしを失ってどう感じたんだろうか。元気にしているだろうか。そう考えるとすぐお母さんたちに会いたくなつて、すべてをぶちまけてしまいたい気になつたけど、あたしがセカイを救おうとしているなんてうそくさくて、笑われてしまうのがオチだ。

はやく、全て解決できればいい。そのためには――。

どういたしましてと微笑むオージ先輩も、良かったなと豪快に笑うユーゼン先輩も。いつまであたしの側にいてくれるのか、まだ分からないけれど。

あたしは、新しい自分の部屋のベッドにそつと入った。今日はとってもいい一日だった気がする。明日はどんな日になるだろう。また騒がしい、エキセントリックな非日常が来るのかもしれない。きっと、だから。

――あたしにできる、本当のことを頑張ろう。

24 - 文化祭編

——どっち。

あたしは今、迷っていた。

みずみずしくて少し妖艶な、デキる女の真っ赤なルージュ。

今まさに子どものお遊戯会に使われようとしている少し色あせた赤い紙。

——一体、どっちを選ぶべきなの、チグサ。

伸ばし掛けた手は、何度も何度も宙をかく。右に行ったり左に行ったり、最後にはやっぱりぐつと堪えて、こぼれそうになる涙までもぐつと飲み込む。

「おやっさん……」

小さく呟くも、きちんと伝達先には聞こえたらしい。ねじりはちまきがトレードマークの仕事人おやっさんが、何でい、と威勢良く反応した。

「チグサ、てめえまた迷ってんのかい。こういうのはなァ、目で見て考えるもんじゃねエ。心で感じ取るもんだ」

「でも、おやつさん、そんなことしたらまた」

「他人になんか好きなように言わせておけい！ 俺ア、知ってるぜ、
てめえにはな心があるって。いーい、心持ってんじゃねエかい」

「おやつさん…！」

親指で鼻を弾くおやつさんの堂々とした姿に後光がさして見える。
思わず両手を組んで、熱く見つめてしまった。

「親父さん、大根一本もらえるー？」

「へいらっしやい！ 奥さんいつも綺麗だから、大根一丁おまけで
持ってけエ！」

いつものセールストークを繰り広げながら向こうへ行ってしまう
たおやつさんを見送って、あたしはもう一度目の前にある、二つの
カゴを見比べた。

みずみずしくて綺麗な赤い色したトマト、二つで250円。

そこまで艶がかっているわけじゃないけどまあ無難なトマト、三
つで100円。

「……」

250円…100円。

「さあて決まっ たかい、チグサ」

あたしは手提げ袋からこぼれんばかりのお札と硬貨が入ったばん
ばんの財布を取り出して、頷いた。

「三つで百円の、これください」

まだ慣れない自転車は、経験値とは別に乗りやすく、ほぼ力を入
れずに漕げばフイーンとかすかな電子音がする。あたしが住宅街か
ら少し離れた商店街に通うことを知って、すぐにユーゼン先輩が用
意してくれたものだ。最初は少し変わったフォルムのただの自転車
だろうと思ってたけど、まさかこれが電動自転車だとは知りもしな
かった。おかげで乗ったその日はユーゼン先輩に涙ながらの謝罪を
した記憶がある。

あたしは自転車を漕ぎながら、ちらと買ったばかりの野菜入りエ
コバッグを見る。トマトの他にも、キャベツ、にんじん、じゃがい
ものバリエーション。どれもこれも、あたしが吟味に吟味を重ね、
今し方八百屋で買ってきた野菜達である。

結局質より量をとってしまったあたしにおやつさんは「宝の持ち
腐れだな」と言ってきた。多分、このばんばんにふくれあがった財
布を見ての発言だろうけど、一つ考えてみて欲しい。あたしは今ま
で小企業の万年ヒラ社員である父に養われた、正真正銘の貧乏娘。
父さんが見栄を張ってローン組んでまで買ったって家もおんぼろだ

「つたし、地面に落ちた食材は「3時間まで！」と制限をつけては安全だと確信して食べるほどだったわけで。」

「そりゃあまあ生活を切りつめるほどの生活は送ってないけど、お金に関しては細心の注意を払ってこれまで生きてきた。いっとうなるか分からない、高い物には一生手が届かない、あたしは万年ヒラ社員の娘……！」

「……そんなあたしが、いきなり大金渡されてはいはい使えると思いますか！」

「使えませんか！」

「だいたいあたしと先輩たちの価値観違いすぎ！ 常日頃からそう感じてるけど、電動自転車もらったとき然り、今週の食費だってお金を渡されるとき然り。あたしにはぼろっちいママチャリで十分です、食費も週に10万もいりませんって！」

「一体セカイの管理者ってのは何者なんだ。どこからそんなお金が湧いて出てくるのだらう。働いてる様子もなし、世界の1員ってわけでもないんでしょう？ 聞いても心配すんなど言われるだけだ。」

「それでももう、あたしには先輩たちと一緒に過ごす以外に、自分の身を置くところを知らない。セカイを救うまでは、本当に帰るべき場所はその価値観の違う二人と共にある、あそこのマンション。今日もあたしは、自身の小さな心臓を労りながらそこに帰っていく――」

「あだああ！」

帰っていく、な気持ちだったはずが、ゴッスンという重い音と衝撃で我に返る。痛みを堪えつつ何が起こったか見ると、自転車の前輪が道の角にある電信柱に激突していた。

どうやら、思考に耽りすぎてお手元お足元がお留守だったらしい。

……あれ、カゴってこんな形だったっけ。

「ぎゃああー!」

自転車から飛び降りたあたしは、即座に土下座をかました。

24 - 文化祭編（後書き）

久しぶりの投稿になってしまって申し訳ない！

メッセージへのお返事どこでしたらいいのか、わからない（・・ω・
・）のでこちらでさせて頂きます

そーさん

お返事遅くなつてすみません、メッセージ頂いたときは飛び回るほど喜びました！ご期待にそえるように日々精進して参りたいと思いますので、これからもしよろしくおねがいします！ありがとうございます！

今のところ、二人の先輩と過ごす毎日は、至極平凡に包まれていた。……いや、平凡ではないけれど。いろいろと刺激は多いけど。そうではなく、あたしとセカイに関することは一切変化がない。以前捕まえるのに奮闘したぶさいくうさぎもとい記憶はまだ現れていないし、コツチの世界もアツチの世界も、滅亡の兆しを見せていない。二人がいる以外に何も変わらない、いつもの日々。

正直良いんだか悪いんだか、いや悪いんだよね、と結論を下して頷いたら、隣に座ってたオージ先輩が、コホンと咳払い。

「チグサって結構自分の世界に入るよね、ボクたちの話聞いてないでしょ？」

「えっ、あ、何かおっしやいましたっ？」

「耳が遠い上に、耳と脳の距離も三千里ー」

「…ユーゼン先輩」

あたしの睨みにも怯む様子は見せず、ユーゼン先輩はいつものように半半裸で堂々とサラダに手を伸ばした。あっ、それ三つで百円のトマト……気付く様子はない、うん、良かった、とあたしも食事を続けようとしたら、今度はユーゼン先輩がごっほんと咳払いをなさった。

「まだ安いの買ってたのか、チグサ」

半月切りにされたトマトに箸が届く寸前で、先輩。

「な、何のことですか」

「しらばつくれるな。あれほどお金には頓着するなって言っただろ、なんだよこのトマト、全く艶がないじゃねえか」

「そんなことありません、おやつさんのトマトは天下一品ですよ！」

「んな話をしてんじゃねえ」

「痛あつ」

頭をはたかれた。

……うう、どうして先輩気付いちゃったんですか。いやもうこの疑問も今更だ。いつもいつもいつも、言うなれば毎日毎日毎日、見破られてしまっている。それもこれも先輩たちの舌がヤケに肥えきっているせいだ。あたしにはこの百円のトマトですら最高においしいのに二人にとってはそのさらなる上があるんだから。

「チグサ、勘違いしないで。ユーゼンは味がどうのって言うてるわけじゃない。チグサに我慢して欲しくないだけだ」

恨みがましくユーゼン先輩を見つめていたことに気付いたのか、オージ先輩がフォローするように口を挟んだ。目を向けると、オージ先輩は無表情のまま。

「好きな物、好きなだけ買っていいんだよ、って」

……そんな、初孫に喜ぶおじいちゃんじゃあるまいし。

「気持ち嬉しいですけど、あたしだって急に図太くなんてなれないです。努力は、しますから。先輩たちもちよつとだけ我慢してください」

「まあ食材がチグサのように貧弱でも、オージの腕にかかれば一級品の料理ができあがるけどな」

「言い方はアレですけど、まあその通りです」

これがあたしが安い食材を買う理由の一つでもある。最初にここに来た日に振る舞ってくれたおいしい料理の数々、それは食材が良からだと思っていた。いや、それこそオージ先輩の料理の腕があるからこそだけど。でも現実には、高級な食材でなくてもおいしい料理ができあがっていたというわけで。あたしにとっては食材が良からうと悪からうと、オージ先輩の手料理ならば変わらない。

……おかげで調達あたし、調理オージ先輩になっちゃってるわけだけども。まああたしの失態もあることだし……。

「この話は良いとして、チグサ、もうすぐ文化祭でしょって話してたんだよさつき」

オージ先輩はあたしの視線を手で振り払うと、話題を変えてきた。

ふーん、照れてるんだな、これは。オージ先輩って無表情が常だけど、最近は些細な表情の変化も分かるようになってきた……と思う。意外に照れ屋さんだってことも。

「チグサ、オージに見とれるな」

ユーゼン先輩は相変わらずオージ先輩至上主義だし……。理不尽な思いを抱いていると、とって返したように笑顔になったユーゼン先輩は、その顔をオージ先輩に向けて、楽しそうに口を開いた。

「文化祭、楽しみだよなあっ、オージ」
「別に」

「俺、こんな日が来るなんて思ってもみなかったぜー！ ああ、俺ってこんなに幸せでいいんだろうか」
「別に」

かみ合わなさはいつも通り。相変わらずテンションもタイプも違う二人だ。この二人が街を歩けば誰だって振り向くほどののに、実体はこうだなんて誰が思うだろう。

それにしても、ユーゼン先輩何をそんなに張り切ってるのかな？ サラダを口に運びながらそっと二人を伺う。やっぱり今まで思い出を作ることの出来なかった二人にとって文化祭は貴重な瞬間なのかもしれない。と、思うのだけど、オージ先輩の面倒くさそうな顔ったら。

「ユーゼン先輩、そんなに楽しみなんですか？」

「あつたりまえだろ！ なあ、オージ！ 聞いて驚くなよ、なんとオージがな」

「ユーゼンそれ以上言ったら怒るぞ」

ギラリ、オージ先輩の鋭い睨みは、効果抜群！ ああ、ユーゼン先輩が灰になっていきます……！

「オージごめんって……」

ユーゼン先輩哀れ。

一体どういふことなんですか。

「とにかく、チグサ、気にしたら負けだよ。こんな筋肉バカのことなんか忘れて」

「あ、もう、ユーゼン先輩の存在すら抹消許可ですか？」

オージ先輩は深く頷いた。やっぱり哀れです、ユーゼン先輩。

何事も無かったかのように、オージ先輩はパスタへと手を伸ばし始めた。あたしは気になることを感じて、フォークを机に置くと意を決して口を開いた。

「あの……もしかして、オージ先輩、文化祭、嫌ですか？」

ユーゼン先輩が言うことはともかく、真実文化祭は、二人にとっては楽しい思い出の一つになるに違いないのに。それを楽しめない何かがあるっていうなら、ちょっと寂しい……。

もし何かあるんだったら手伝いを、そう切り出そうとしたところで、オージ先輩が口に運ぶはずだったフォークを寸前で止めた。ゆっくり、手元に戻す。

「嫌じゃ、ないよ」

「……」

はな、鼻血が出るかと思った。本気でこういう感覚があるなんて知らなかった。

だだだだっで、だっで！ オージ先輩があんなにとろけそうなほど慈しむような、それでいて神々しくて、めろめろに甘い笑顔を見せてくれるとは思わなかったんだもん！ 一体先輩の顔の筋肉ってどうなってるんですか！ 動き一つ一つに無駄がない、少し口角を上げて目を細めただけでなんで、ああなるんだろう。

……最近をよく笑顔見せてくれるけど、その中で最高クラスだったな、うん。

「何してんの、チグサ、行くよ」
「はっ、はい！」

おかげで直視もできませんが。

顔を背けつつ玄関を飛び出したら、邪魔だとばかりにユーゼン先輩に頭わし掴みで強制歩行を強いられた。

今日は、学校、そう学校でした。

「ふわあ」

「あれっ、ユーゼン先輩、寝不足ですか？」

「ああ、昨日オージが寝かせてくれなくて……」

「きわどいこと言っただけだ先輩、あたしは騙されませんよ。どうせまたいらんこと言っただけにさせられたんでしょ」

「うるせえ」

図星ですか。

以前からよくあるからもう呆れてため息すら出ない。あたしのせいで二人、同室になっちゃったわけだけど、どっちかっていうとオージ先輩のほうが心配だな。何食わぬ顔してるけど、オージ先輩、ユーゼン先輩のことどう思ってるかよく分かんないし。

「そっちこそ、シロと一緒に何も無いのか？」

「……どういう意味ですか？」

「一応年頃の少女少女だから」

につこり笑顔のユーゼン先輩に、こっちもにつこり笑顔を返してやる。

「一応人間の少女とブタの少年ですから。というか年頃じゃないどころか、年の差ありすぎだと思っんですけど。あたし、いくらなんでも10そこらの子に手を出す人間じゃありません」

「分からねえよ、世の中何があるか」

「先輩たちが何もなくて、こっちだって何もありません。だいたいシロくんあんなにかわいいのに、そんな不埒なマネできませんもん」

「ハッキリ言っちゃって。シロかわいそー」

自分がオージ先輩に相手にされないからって。こっちに八つ当たりすることないじゃん、この半裸め。いつか本気で通報してやる。

「それよりシロは？」

今まで話を聞いていただけのオージ先輩があたしに向き直った。

「今日も駄々こねなかった？」

「ああ、はい、多少は……。でも、シロくんいい子だから、ちゃんと留守番してくれるみたいです。でも最後ブタの姿になっちゃったから、寂しいのかも」

シロくんは、ブタとはいえ人間の感情を持つそれこそ人間だ。最近をよく自分の意志で人間になってあたしの側にいてくれる。ただの外出ではシロくんを連れていけても、学校にはさすがに連れていけない。最初はオージ先輩のペットだしブタの姿なら、と連れて行ったけどそのブタこそ注目を浴びちゃってシロくんが怖がってしまった。だからシロくんを思えばこそ留守番してくれるのが一番なんだけど……家に一人つてもきつと寂しい。

「そっか、何かいい方法考えなきゃね」

あたしが頷いたところで、マンションの入り口の自転車置き場でカゴがちよつと凹んだ電動自転車を発見。土下座せんばかりに男二人に謝り倒す少女Cがいたとかなんとか。

25（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

更新は二日にいっぺんやら、三日にいっぺんとかにならそうです。
今のところ。

学校にたどり着いてから、先輩たちと別れ自分の教室へと向かう。よれよれ歩いていると、前から壱子が突進してきた。

「ニッコチーン！」

「ふんがあっ！」

キミ本当にお嬢様ですかと問いたくなるほどの衝撃に、あたしは廊下の壁に打ち付けられた。咄嗟に怒ることもできずげほげほと咳き込んでいたら、目の前の美少女が不思議そうにあたしを見つめていた。

「ニコチン？ 大丈夫？」

「キミがそれを言っちゃいますか……」

恨みがましく見上げると、壱子はニッコリ笑って大丈夫そうだね、と言い放った。一体あたしの何を見ているのか知らないけど、彼女はそう思ってくれちゃったらしい。本気でホッとしてくれるのは喜ぶべきなのかそうでないのか、あたしも判断に困るところ。

とりあえずこんな廊下の隅で死にかけてちゃどうしようもない、と居佇まいを直して、壱子に用件を促す。

「朝っぱらからどうしたの？　こんな熱烈歓迎、初めてだよ」

「あ、うん、歓迎ってわけでもないんだけどね！　あのね、あたし、ニコチンにお願いがあるのぉ！」

「いいよ前半の発言はスルーしてくれっていうお願いだったらいくらでも聞く」

それ以外は一切聞かないと言外に含めて言う。この「お願い」の内容はすでに想定済みだ。あたしは聞く耳を持たないように、壱子の脇をすり抜けあとちょっとだった教室の入り口に足を踏み入れた。

「ニコチンーっ」

「悪いけどそればかりは聞けないの！　ホントお願いだから勘弁して——」

「千草さん！」

「——へ？」

後ろからすがりついてくる壱子をあしらったと同時に、正面からもあたしを呼ぶ声。鬼気迫ったこの声は想定外だ。油断しきって顔を向けると、そこには今まで見たこともない形相のクラスメイトたち（主に女子）が……。

「見たわよ、千草さん！」

先頭切って仁王立ちのクラスメイトは、谷崎さんだ。クラスメイ

トゆえに浅い付き合いならある彼女だけれど、出会い頭に「見たわよ！」なんて報告を受けるほどの友情は刻んでないはずだ、多分。

「……えーと、何を？」

なわけで、あたしもわけもわからぬままにマヌケな返答。

谷崎さんはさらにボルテージが上がって一步あたしに近寄った。後ろに控えている女子たちも同じように一步前に出る。あたしが一步後退ろうとしたら、そこには壺子。わあお、四面楚歌。こっちのことなんか見て見ぬ振りの野郎共はアテにならない。

「今日も一緒だったわね……」

「……えーと、誰と？」

「しらばっくれないでちょうだい！ 先輩たちよ、帝先輩と神代先輩！」

「あー……」

さあどうなの、ともう一步詰め寄られる。谷崎さんこんなに熱い女の子だったっけな！。アイドルにきゃあきゃあするミィハーっ子なのは知ってたけども。

ちらりと後ろを伺う。ニヤニヤ笑いの壺子ちゃん。

……逃れてきた意味、全くなかったってことっすか。

「一緒って言われれば一緒だけどね、別に他意は無いっていうか。たっ、たまたまだから、ほらあれ、道すがら偶然に出会ってね、偶

然一緒に学校に来ちゃったってだけだから！」

「たまたま」と「偶然」に力を込めて言う。ガンバレ、アイドル並にポーカーフェイスで笑うのよ、チグサ！

……でもまあ、これで簡単に引き下がるガールズクラスメイトじゃないってことか。だから何と言いたげにあたしを高圧的に見下ろしている。そしてあたしの脳内も「後悔」の文字で一杯だ。なんで先輩たちと一緒に登校しちゃったんだろ、朝だって二人の人気っぷりに当てられて相当な被害を被ったつてのに。いやいや、いつも別に登校しようとは思うわけよ、でも不思議といつの間にか二人の間に収まっているっていうかね。離れて歩いてもいつのまにか、そこがチグサポジションっての？ うん、別に他意はなくて。そう、家を同じ時間に一緒に出ちゃうだけなんだから。

脳内言い訳以下略。

「ふうん、偶然をモノにしちゃえるほど、仲が良いつてことね」

「あーまあー面識はあるというか」

一緒に住んでいますは絶対に言えない。あたしの命に掛けて絶対言えない。

「いつのまにそんなに仲良くなったの？ 千草さんともあろうものが」

「え、何それちょっと貶めてます？」

千草さんともあろうもの、って一体あたし何者よ。しかし、ちょっと口挟んだだけで、後ろに控える女子たちから「違うの?」っていう視線ビーム。うん、まあ、そういうことにしときましようか。

「えっとね」

「いいからはつきりと本当のことを言ったらどうなのよ」

「そうよ、最初に二人が教室に来たときも千草さんに友好的だったじゃない」

「どっという関係よ」

「もったいない」

「教えなさいよ」

……これが女子の力。一人じゃ言えないことでも、たくさん集まるとバシバシ言っちゃえるってやつ。かしましいのは結構だけど、たまにあたしへの暴言をサラッと挟むのやめてくれない?

とりあえず、これあたし、苛められてんのかな……?

「ほほほ本当になんでもないってば、あたしともあろうものがあるわけないでしょ、二人と関係なんかないって、ただの知り合いホントそれだけ」

「ふーん、あくまでそう言うのね」

「それ以外に何を言えいいか分かんないよ」

「千草さん、どっちかと付き合ってる、なんてことないわよね?」

……は? 付き合う、あたしが?

「なんで？ 一体どこにそんな流れが？ オージ先輩は知らないけど、ユーゼン先輩はどっちかってーと――」

あ。

「『オージ先輩』……？ 『ユーゼン先輩』……？」

わあ。

「ただの知り合いにしては馴れ馴れしいわねー！」

「ぎゃあー、本当ごめんなさい、間違い間違い、言い間違い！ ええと帝先輩と神代先輩、そうそう」

「……まあいいわ。でも本当に知り合いなのね？ だったら、一つ頼まれてくれないかしら」

「うんうん、何でも聞くから、この話はおしまいねそれでどうかお一つ」

ヤケになってそう言ったら、後ろで壱子がムツとするのが分かった。うう、だってしょうがないじゃん、こんな風に囲まれてたら。

「じゃあ、あたしたちに二人を紹介してくれるかしら？」
「……」

きらきら輝く笑顔で、谷崎さん。

思わずき子を振り返る。さっきとは違ってかわって谷崎さんと同じにっこり笑顔。そしてあたしは振り出しに戻ったことに気付いた。

……それにしても転校してきて間もないというのに、二人の先輩の人気っぷりったらこれいかに。

「うつつはああー……」

これまた盛大なため息を一つ、ついなら廊下ですれ違った知らない男子が怪訝そうな表情をしていた。そんな風に見なくてもいいじゃないですか。疲労感上乘せ。

今度は女子が通り過ぎたので、あたしは慌てて顔を隠す。極めつけに柱の影に隠れる。

「……よし、安全確認オケー」

廊下に誰もいないことリサーチ。そしてやつぱりため息。

なんであたし、こんな疲れてのにコソコソやつちやつたりしてんだろ。いや、それも二人の先輩のせいなのだけれど。結局なんとか谷崎さんからのお願いをごまかしたけど、それ以来授業中でさえずつと刺すような視線を食らっていた。何が何でも二人とお近づきになりたいらしい。そりゃカッコイイのは認めるけど、現に前見たときみんな骨がなくなったのか疑いたくなるほどふにゃふにゃになっちゃったじゃん。あたしが本当に紹介したとしてみんな無事なの？ あたしだって鼻血吹きそうになったあのオージ先輩の必殺笑顔を見せられて昇天しちゃわない？

まあ、それも心配だけど、本音は橋渡しをするのが嫌なだけ。み

んな知り合いたいなら自分から行けばいいのに、あたしなんかしゃしゃって二人のプライバシーを侵害するようなことをしたくないだけ。

……なのになあ。

「はあ」

「チグサ、どうしたのため息ついて？」

「わあ、オージ先輩！……じゃないや、みかどせんぱい……」

「チグサ？」

突然あたしの視界に現れた見目麗しき先輩に、何でもないですと首を振る。オージ先輩は最初、様子のおかしいらしいあたしを無表情に見ていたけれど、あたしは話題を変えようと口を開いた。

「こんなところで会うなんてびっくりしました。あの、えっと、ユー……あの人、いないんですか？」

「何それ。ユーゼンのこと？ ユーゼンなら文化祭のクラス出店の準備だつて」

「あ、お二人クラス違うんですね。先輩は？ 準備ないんですか？」

「ボク？ うん、今日は無い。だからチグサと帰ろうと思って誘いに来た」

ぴつと指さされる。あたしにだ。

見ればオージ先輩は通学用のカバン代わりのショルダーバッグを

提げていた。カバンは自由なのでそこは問題ない。けれど、あたしは今まさに手ぶらなわけで。

「ええっと、すみません。今日、あたし部活で……」

「そうなんだ」

「文化祭の準備がそれぞれであるから帰りは別々って言ってませんでしたっけ？」

「聞いた。けど、もし今日チグサに準備がなかったらって思ってた一緒に帰ってたから」

「オージせんぱ……」

一瞬で我に返ったあたしは咄嗟に周囲を見回した。右よし左よし後方よし。前方には相変わらず無表情のオージ先輩がいるのみだ。……よし、今は誰にも聞かれなかったな。

「ごめんなさい、しばらく一緒に帰れそうにありません！ それから登校も、別でいいですか？ あのえーと、準備が早いらしく。それからそれから、そういうことはあたしには言わない方向で！」
「意味が分からない。チグサ、一体どうしたの？ そういうことって？」

本当に分かっていない様子で、オージ先輩は前に掛かるショルダ―バッグのベルト部分を両手でぎゅっと握りしめてあたしを見据えた。んぐっ、無表情のハズなのになぜか子犬に見えるというのは、あたしのイケナイ脳のせい？ もし狙ってやってるんなら、オージ先輩、効果抜群ですから！

「あたしは一体どうもなってますんから、大丈夫です、いつものチグサです！ それでは、お代官さまそのようにっ」

見てはいけない見てはいけない、と顔を背け逃亡をはかろうとしたところで、腰回りに違和感。後ろにぴんつと引つ張られる感触がして、恐る恐る振り返ると、そこには未だ子犬のオージ先輩が……。

「待つて、チグサ」

「ななななな、なんてことするんですか、みつ、帝先輩っ」

慌てて手首を掴む。微動だにしない。……動かないオージ先輩の手は、あたしのスカートを握りしめている。このままちよつとでもめくられようものなら、あたしの可哀想な下着が露わになってしまう。いやオージ先輩がぱんつめくりを試みようとしているわけじゃないのは分かっているのだけれど。

恥ずかしくて言葉がうまく出てこない。そんなあたしに、オージ先輩が真剣な目を注いだ。

「それ、やめて」

「え、これどういうことですか、逃げませんから離してーっ」

「いつもみたいに呼べばいいだろ」

あたしと同じくらいの背のオージ先輩だけど、なんだか少し大き

く見える。仲良くなってからあたしには少し柔らかくなった口調も、今はなんだか違う。先輩、怒ってる……？

「チグサ」

「オージ先輩！」

一歩寄られて、慌てて名前を呼ぶ。本当にそれで良かったのか、安心したようにオージ先輩の手が離れた。手首を掴んでいたままのあたしの手も一緒に落ちる。

「ん、えらい」

オージ先輩は控えめな笑顔でそれだけ言うと、自身の手首からあたしの手を丁寧にはがし、背を向けて行ってしまった。

……びつくりした、怒ってた割にヤケにあっさりだった。別に何を期待してたわけでもなく、本当に、何もおかしくはないんだけど、あたしは離れた手のひらを見つめて、それから行ってしまった先輩の背中を見つめた。

27（後書き）

いつもお読み頂きありがとうございます！

それから、お返事はいらないとメッセージ下さったかた（お名前は伏せておきますね）もありがとうございます…！お優しい…！

これからもどうぞよろしくお願いしま！

文化祭。あたしたちが通う月ヶ丘高校は、毎年月にちなんだ名前を付けて文化祭が行われる。今年も新学期が始まってから一ヶ月ほどしか経っていない今、「おぼろ祭」と銘打った文化祭の準備が始まっていた。「おぼろ」というネーミングセンスは果たしていいのか悪いのか、あたしには見当もつかないが、何か深い意味が込められてあつたりするのかもしれない。校長先生が何か言ってたけど割愛。

その文化祭が行われるのは、夏休み前。つまり、準備が始まってからさらに一ヶ月後の話だ。集まったばかりのクラスが一丸になれるかどうかは、毎年この文化祭、クラス出店次第になるんだけど、あたしたちのクラスは「お化け屋敷」になった。うん、なかなかチームワークが問われそうな良い出し物だ。結構倍率が高いからよっぽどクオリティ高く、なおかつ文化祭実行委員のプレゼンテーション能力が高くないと勝ち取れない枠。そんなこんな去年のクラスはあたしが文化祭実行委員のせいでお化け屋敷争奪戦に負けて酷く罪悪感を感じたのだった……。

……というのが、理由なわけではないけど。

「チグサ、今年はやる気よね」

あたしは、苦笑いで曖昧に頷く。

「コーラス部の方ばかり力入れて大丈夫なの？ クラス出店の手伝いしなくていいの、確かチグサあんたのとお化け屋敷って言うたでしょ」

部員である香織先輩は開脚したままお腹をつけるというストレッチを一旦止めて、あたしを見上げた。あたしは立ったままでつかいCDプレイヤーにCDをセットしているとこだったので自然、見下ろす形になる。

現在地、音楽室。残念なことに自分の教室、というわけではなかったりして。

「大丈夫ですよ、あたしあまり役割ないんです。ほら、それにこっちだって今回本格的なんでしょう？」

そりゃあ確かにねえ、と香織先輩は言っただけど、納得はできていない様子だった。そりゃ納得できないのかもしれないよね……だって今まさに部活に来てるの、あたしと香織先輩だけなんだし。コーラス部は20名いるのに、他の人はクラス出店の準備で、香織先輩はただ副部長の業務として早めに来るだけであって。そもそもコーラス部ってのは、一人でも練習できるからある程度は自宅練習でも可能だ。それからパートごとに練習して、最後に全体であわせるだけだ。これじゃあ後二週間は誰も来ないんじゃないかなー。ちなみに照明やら舞台設定はすべてオケ部まかせらしいので。いいのかそれ。

あたしは小さく息をついて、CDケースに目を落とす。楽曲は一回に三曲、文化祭は二日間だけど学内のみにしか公開されない初日

は一回のみ、二日目の一般公開日に全三回のタイムテーブルが組まれてある。つまり計四回分歌うってことだね。

あたしが今見ているCDの一曲、「愛のコール」というコーラスにしては珍しい楽曲は、二日目の最後のステージのときだけ歌うものらしい。もともと聞いたことない曲だったので、ちょっと聞いてみようと思っただけだ。

「本格的というかねー。部長も大概焦ったんじゃない？ あたしたちにとつちや最後の文化祭だしね、アレでも一応部長になつたくらいなんだから歌に思い入れがあるわけだし」

「愛のコール」まで曲のナンバーを進める。どうやら昔の洋楽のようで、このCD自体には「ジル」の他の曲も収録されている。「ジル」……歌っているグループの名前だ、全然知らないんだけど。ジャケットも白黒だから本当古い人なんだろうなあ。クレオパトラみたいな厚化粧の女性が妖艶に笑っていらっしやる。やっぱりよく分からない部長が選んだだけはあるようだ。

「で……その部長は来ないんですか？」

「さあ？ 今日顔出すって言っておきながら来てないしね。もとよりアイツには何の期待もしてないし、何も信じてないけど」

うわー部長言われてますね。実質の部長は、本当に香織先輩で間違いない。

そうするうちに探している番号まで辿り着いて、動かしていた指を止める。これだ、これ。十曲目、「愛のコール」。

……始まりは悪くない。静かなさざ波のような、ところどころにリユートのようなカラカラとしたギター音が入って幻想的なメロディだ。やっぱリクラシックとかではなく、ただのポピュラー音楽、それもなんだか懐かしい感じがする曲だ。一体コレをどうやってコーラスで……あ。

心臓あたりがさわさわと波打つような、変な感覚。

——ボーカルが入ると同時に盛り上がってきたああっ！

「かつ、香織先輩」

「うん、意外といい曲でしょ？」

思わず顔を向けてしまったが、ちょうど良かったらしい。香織先輩が満面の笑みだったので、つられるようにしてあたしも笑ってしまった。

うん、なんだか不思議な曲。幻想的なんだけれど、アップテンポ。これは機械によるものなのだろうけど、ボーカルの女性……多分、ソプラノあたりになると思う、とにかくその声がすごく、ふんわりしているっていうか、二重っぽいんだけど、そこまで離れてない二重っていうか。ああ駄目、上手く説明できないや。英語だって何言ってるか分かんないし、そもそも英語なのかすらあたしには分かってない。けど、これがすごく心に響く曲だったのは分かる。

幻想的で、明るくて、不思議と心にすうって入る、素敵な曲は確かにコーラス部出し物の

フィナーレを飾るにふさわしい。と、思う。

「確かにねえ、ジルはいい曲歌うんだけど、人に理解されにくい、自分たち中心の曲ばかり作ってきたから。メロディとか構成とか中途半端だったりするしね。けどそれでも熱狂的なファンもたくさんいるのよ？　きつと、今のチグサみたいな感じね」

あたしは興奮しきって頬を押さえていたけど、確かに手のひらまで熱が伝わってくるほど熱い。香織先輩は茶化すように笑っていて、あたしは返す言葉もなかった。

だって、本当に、素敵なんだもん。演奏が静かになると、ボーカルの女性のことさら優しい声が流れた。目をつぶると、なんだか足が地に着かなくてふわふわする。

「……ソロ、誰が歌うんでしょうね」

「来週までには決めるって部長は言ってたわね」

「あた、あたし、これ……」

「歌いたい？」

「いえ！　是非ともご本人に歌って頂きたいです！」

「それは無理でしょ」

ですよね。あーあ、なんだかこんな素敵な曲をあたしたちみたいなお遊びのコーラス部が歌ってもいいのかな。雰囲気ぶちこわさない？　元々コーラス向けの曲でもないのに、これを一体どう歌えば、やっぱりイメージ的にはき子かなあ、歌ってもらうの。うん、それがいいな。

曲が終わると同時に、ホッと息をついた。それからさっそく楽譜を取り出したあたしは、メロディを頭で反復しながら音符を目で追

つ
た。

「最近ニコチン、コーラス部の出し物頑張ってるみたいだよねえ」

廊下の窓から顔を出して一人、「愛のコール」を口ずさんでいたら、突然声が掛かった。歌うのをやめて目を向けると、そこにいたのは壱子。

「び、びっくりした」

「だいじょぶ、谷崎さんじゃないよお」

あたしの「びっくり」の原因に気付いているのか、ひょうひょうと壱子は言つてのけた。分かってくれてるのは嬉しいけど、それで何もしてくれないのが壱子だもんなあ。

あたしはもう一度外に目を向ける。

「壱子は練習しなくていいの？」

「いーの。あたし、ろくろ首役なの！ 首をどう長く見せるか、コレに全ては掛かってるからあ。気を抜けないの」

「ああ、そっか。お化け屋敷だもんね」

「そうだよ。……だいたいパート決めは明後日でしょお？ ニコチンの方が準備早いんだってば」

そうかなあ、そうかもしれないなあ。でもだって、好きな曲だもん、少しでも多く練習したいし。それに教室にいたところであたしがすることなんて何もないわけで。

……歌うことで紛れてたけど、思い出してちょっとため息ついた。

——あ。

「千草さん、ちょっとよろしくて？」

……よろしくないんですが、谷崎さん。

助けを求めて壺子を見たら、頑張っ！ ってガッツポーズ。そ

うだね、キミに期待したあたしがバカだった模様。

最初に谷崎さんたちから取り囲まれて一週間たったけど、それがまさかこんなことになるうとは。そう、あたし、チグサも予想は出来なかった。

どうせ授業中の準備時間だって何もすることないし、どうせ何言ってもあたしには不当な要求をされるだけだし、と関わることをやめていたはずなのに、今度はそれが裏目に出ちゃったらしい。
なんだってこんなことに。

そう、放課後の体育館裏。おきまりのシチュエーション、間違っても告白ではない事態に、あたしは陥っていたのです。

「聞ってるの、千草さん」

聞いてませんよ、だってそんな大勢で取り囲まなくってもいいじゃない、というよりもなぜに外に出たの？ さっきまで教室にいたじゃん、なんでいちいちお嬢様っぽく誘っちゃったの。

「もう一度言うわ。明日までに二人の先輩をあたしたちの前に連れてきて。そうじゃなかったら、一生千草さんとは絶交するから」

「だ、だからなんで連れてくるの？ 自分たちで行っても大丈夫だと思うけど」

「そんな恥ずかしいことできるわけないじゃない！」

えー……。なにその理屈？ どうしてそこで恥じらいが出て来ちゃうのか、チグサ分かんない。でも谷崎さん一行はあくまで大まじめらしく。あたしが頷くのを真剣に待っている。

あたしは一度視線を宙にさまよわせて、最後は地面に降り立った。
——そんなに、どうして。

これは、谷崎さんたちに向けた言葉と同時に、自分へも向けた言葉。

「やっぱり、できない」

本音は、先輩二人と谷崎さんたちの橋渡しをしたくない、だってプライバシーの問題だから。そう、だからあたしは動きたくない。

人付き合いなんてものは当人どうしてすべきものであって、その間にあたしが入るなんておかしいもの。面倒だって気持ちも確かにあるし、二人に迷惑を掛けたりしたら嫌だし。

睨むようにこっちを見るたくさん目の。

……あたしは、こんなに取り囲まれてまでそれを純粹に守り続ける必要があるのだろうか。絶交という言葉に怖じ気づいているわけではないけれど。事を円満に進めるくらいの柔軟性は多少なりとも持ち合わせている気でいたのに。つまりここに先輩を連れてくるだけであたしの煩わしいこの状況も解消されるのは、分かっている。

——こんなの、まるで。

「こら、なにやってんだ」

心の奥底に到達しかけたところで、ハッ和我に返った。背後で声がしたと同時に頭に小さな痛み。あたしの正面にいた谷崎さんは確かにこちらを向いているが、目線はあたしに向かっていない。小さく声をあげるのも聞いた。ちょっとバツが悪そうにしている他の女の子たちも数歩下がってあたしの背後を見ているようだ。

「谷崎さん、今の話だけど……」

「って、なんで華麗にスルーした今」

「あだっ」

首が折れそうなほど頭が後ろに引き倒される。左右二つに結った髪の毛を同時に引っ張られたから生え際も痛い。

否が応でも太陽を背に見えたその反対の顔は、やっぱり。ここは空気を読んで見て見ぬ振りをするでしょう、つてのが伝わるわけがないデリカシーのない男。

「こんにちは、半裸先輩」

「テメエ。助けに来た温情あるセンパイに向かってその言い分が」「すすすいません調子に乗りました」

怖っ。ユーゼン先輩の「テメエ」呼びは本気で怒ったときだと以前に学習済みだ。ユーゼン先輩もあたしがそれで怖がることを理解しているのか、最近では意図して使うことも多くなってしまった。変な弱点を握られてるな……。

最近は登下校も別で、学校では滅多に会わない。ユーゼン先輩がどうしてこんなところにいるのか分からないけど、ともあれこのままではいろいろと事態が収束つかない。っていうかアンタが来たせいですます……と言おうにも言えず心で思ったのみだが、谷崎さんたちには軽く愛想笑いを飛ばしておく。

「あのー……そういうわけで、ここは一旦お開きということで」「……かつ」

谷崎さんたちはまるで体中に針金が入ったかのように硬直したまま、目をこれでもかと言わんばかりにかっぴらいていて。なにこの集団。チグサ怖くて身震い。

それで何をしでかすかと思いきや、谷崎さん、おもむろに両手を突き出して……。

「お前の友達ってキヨンシーばかりか？」

「それまた酷い」

……言われてみればそうだけど。誰も額にお札なんて貼ってないです。

けれどけれど、そのぎらぎらしたたくさんの目は一様にユーゼン先輩に張り付いている。言わずもがな、これってユーゼン先輩危険なんじゃないですか？

思わずぎゅっと先輩の服の裾を握ったとき。

「神代センパイがいらっしやったわああ！」

甲高い叫び声と共に、谷崎さんら一行は砂煙を巻き上げながら怒濤の如く――走り去って行ってしまった。

「あつ、えっ！」

すっかり襲ってくると思つてたあたしは、予想とは違う現実にとだ困惑。あたりは砂埃と悲鳴の余韻を残して、まるで何も無かったといわんばかりの日常に戻ってしまった。ユーゼン先輩も珍しく呆気にとられているようだ。

「行っちゃったな」

「……なんで？」

谷崎さんたち、先輩たちとお近づきになりたかったんでしょう？
どうして今そのチャンスをおじやんにしちゃったのか。

……恥ずかしがってたの、本気だったのかも。

「ともあれ、何も無くて良かったな」

「まあ、ですね、先輩のなけなしの一枚が取られたら、もうあたし黙ってませんでしたよ。きっと先輩をはり倒してました」

「だからなんで俺が悪いんだよ。……じゃなくて、チグサに何も無くて良かったって言うてんだ。俺の出る幕も無かったしな」

先輩は背後から正面へとまわってきて、あたしの片方の結んだ髪の毛を引っ張った。引っ張ったといっても、軽く頭が動いた程度で、傍目にはあたしが小首を傾げているかのようになっているはずだ。

「……と、いうか。何があったか聞かないんですか？」

髪を引っ張られながら、さも当然にあたしの身を案じてくれたことを疑問に思う。ユーゼン先輩ってば空気読まないからまずは興味本位であたしを取り囲まれてたこと、聞くと思うのに。

けれどユーゼン先輩は、まあな、と言うだけでそれ以上は何も興味を持っていないようだった。……突然現れたことといい、なんか変だな。

「とにかく、これから気を付けろよ？ あんま、ほいほい付いて
いかないよーに」

違和感を感じつつも頷くあたしをそのままに、目の前から去ろう
としたコーゼン先輩。

——途端、はらりと左肩だけがはだけて、先輩の胸板がまたさら
に露わに。

「
……」

呆然としたまま、突っ立っているとあたしの右手が先輩のシャツ
の裾を掴んだままだったのが視界に入って、ようやく気付く。

「チグサ……そんなに俺の胸」

「分かりました、変態には気を付けます！」

握っていた裾を投げ捨てた。

あーもう。いろんな意味で災難だった。

思い出しかけた胸板を頭で一刀両断しながら、教室へのルートを辿る。とりあえずあの状態は「愛しのオージに会いに行く」とかなんとかハートマーク付きのセリフを残して先に行ってしまった。

……結局、あの展開はどう転ぶんだろ。

谷崎さんたちは、ユーゼン先輩に会うことができたけど自ら逃げ去っていった。あれってあたしが会わせたことになるのかな？ でもあれって「会う」内に入るのかどうか……。あたしとの「絶交」もどうなるものか。

あー、難しい裁量だ。

ふと、玄関から校舎に入ろうとして、ポケットに入れておいたはずの携帯が無くなっているのに気付いた。

「あー……壱子に持って行けって言われたんだった」

普段は教室のカバンのなかに入れっぱなしだったのだが、谷崎さんたちから呼び出されたとき壱子に渡されたんだった。普段からあまり使わないから、すっかり存在感なかった。

来た道に戻ると、さっきまでいた体育館裏で携帯電話を発見した。一安心して、画面を見れば着信一件、壱子から。メールも壱子から

一件届いている。

『お疲れさま、五時間目は文化祭の準備にあてられるんだってー』

……星マークとかハートマークとか、やたらキラキラした文面が眩しい。しかもお疲れさまって。イジメまがいなこと受けているの知ってるくせにあんだ。一人苦笑してしまう。

「そっか、でももう昼休み終わってたんだ」

携帯電話の時計表示は、五時間目が始まる時刻を少し上回っていた。どうせ早く戻ってもやることはないし、というより今の状況で谷崎さんたちと対峙するのも怖いし、とゆっくり教室に戻ることを決めて。

「だーれだ」

踏み出した足は、予期せぬ行為と声に宙をさまよった。

「……」

真っ暗な視界の中、驚きを通り越して冷静にも考えてしまう。こ

んな行為をするのはあの変態だけだと思っただけど、さっき別れたばかりだし何しろ声が違う。ユーゼン先輩よりも少し高くて、落ちて着いている。

「あれ？ 無反応か」

耳元でまた声がする。

あたしはふりほどこうと目隠しされたその手を容赦なく握りしめた。……が、離そうと思ってもびくともしなかった。

「あ、ダメ、それルール違反だから。顔見たら分かつちゃうでしょ、声だけで当てて声だけで」

「……知りません」

言いつつ、ふんぬつと力を込めてみるも手が離れてくれる気配はない。

「少なくともこんなセクハラ行為に及ぶのは約一名をのぞいて知りません」

「セクハラって心外だね。一度は命を取り合った仲じゃん」

「なんですかその危険な仲は！ 命を取られそうになったことはあります、取ろうとしたことは——あ」

「気付いた？」

やけに楽しそうな声色が耳に届く。確かにこの声はあのときの…。

「今日はブタくんいないんだね？ 邪魔されなくて良かった」

「あああ、あな、あなたは」

「暴れないでよ。あんまり迂闊に動くと……」

耳元に息がかかってぞわりと背筋が凍る。

「結^{ケツ}」

「ぎゃあああ！」

バラが襲ってくるーっ！ いやだ、やっぱり死にたくない！

「ぶふっ」

え……あれ？

一人あたふたしている中、聞こえた噴出音はあたしのものではない。
い。

「……な、に」

「あはははっ！ おもしろいね、顔面蒼白で怯えちゃってさ！」

来ると思ったものはなにも来ず、まだ真っ暗な視界の中で爆笑するソイツの声だけが聞こえている。

あれ、バラは？ 前みたいな、あたしを殺そうとしたあの魔法は？

「大丈夫、今のオレじゃあ魔法使えないから」

「え、それって……」

「まあ、キミをどうこうすることは魔法なしでもできるかもね？」

「ふんぬっ！」

あたしは身の危険を感じると勢いに任せて足を振り払った。が、当たった感触はない。そうなる前に、ソイツの方が先に身を翻して避けてしまったようだ。なんか煮え切らない。

だが、そのおかげで視界はクリアになり、思い描いていた人物がようやく見えた。

「……ジャメロンディアス」

「あーあ、ズルしたね。失格」

「なっになが失格ですか！ 前に殺されそうになったこと覚えてませんよ、どの面下げてのこのこやってきたりなんかしたんですか！

そもそも合格なんぞしたくもない！」

「結^{ケツ}」

「——ぎゃあああ！」

「ぶははっ！ だから何も起こらないって言ってんじゃん！」

「ぐっつ」

何だこの人、めっちゃくちゃ腹立つんですけど！ きーっ、悔しいよう！

とりあえず魔法は使えないらしいし、あたりにバラ園がないことにもとりあえず安堵。そこに勇気をもらい、あたしはびしりと目の前の人物を指さした。

「なんでここにいますか」

「ほら、人を指さしちゃダメだよ」

人の警戒領域にずかずかと入り込んで、伸ばした指を折り畳もうとする。慌てて振り払うも、この得体の知れない余裕に恐怖を感じる。そもそもオージ先輩が呼んだ黒服の人たちに連れて行かれたのに、一体どうやって戻ってきたんだ。

もしかして別人かもと思うも、へらへら笑うこの男は、確かに赤髪で以前あたしを襲ったジャメロンディアスに間違いはない。……けど、明らかにおかしいところもある。

「心配しないで。別にキミを襲いに来たわけじゃないしね」

その得体のしれなさに身を引かけると、安心させるように微笑された。なんでこうも好意的？ これは罠？ こんなキャラだったっけ？

以前あたしを襲ってきたときは敵意むき出しで、逆にユーゼン先輩からやられてるときは可哀想に必死だったのに。

……いやでも、いくらなんでもこれは。

「そんな怒ったように見ないでよ。悪かったって」

怒ったように、ではなく、怪訝な目で見ているはずですが。

上から下まで見る限り、ジャメロンディアスは、——スーツだった。

スーツに、長髪。この時点でおかしいのはもったもだけど、あたしとしてはこのジャメロンディアスがスーツを着ている時点で、すでにアウトだ。まかり間違っても以前あたしを襲いにきたときのジャメロンディアスはこんな格好じゃなかった。もっと、なんていうか、まだ「普通」だった気がする。髪の毛もポニーテールに結っていたのに、今はなぜか下ろしているし……スーツに長髪、なんてミスマッチ。そしてチグサの記憶にもミスマッチ。

「半径一メートル以内には入らないでください」

「あれ、それって意外と近くない？ えー、一メートル、っと。これくらい？」

「ちっち近いですってば！」

あたしは慌てて座り込むと、地面の石を拾って周囲に大きな円をかいた。中に「チグサ領」とかいてジャメロンディアスを追い出す。

「酷いね、今のオレじゃ何もできないって説明したのに」

「そんなの信じられますか！ だいたい前のこと忘れてませんから。あたしのこと、殺そうとしたじゃないですか、どうして戻ってきてまたあたしの前に来たんですか？ 何か企んでるんですか、先輩たち呼びますよ」

呼びますよ……と言った割には、チグサ領は校舎まで繋がっていない。ジャメロンディアスが円の外にいる限り、あたしもここから抜け出せるわけもない。携帯……カバンの中。とりあえず警戒することですか自分の身を守れないようだ。

そう思って両手をクロスして自分の前にかざしていると、ジャメロンディアスが小さく息をついた。

「……なんつか、調子狂う」

「は？ 何か言いました？」

「いや、キミによく似た人を知ってるんだけど、傲慢で自己中心的で孤高な人、キミとは真逆だと思って」

「誰ですかそれは……」

まかり間違ってもあたしではないというわけで。ジャメロンディアスは長い赤髪をパツと払うと、ポケットに手を入れた姿で腰を折り、あたしと同じ高さで視線をあわせながら近づいてきた。円に堂々と入り込んでくる。

「あ、入っ……」

「キミの方が好みかもね、オレとしては」

「こっちに来ないでくださいってば」

チグサ領を堂々と踏み荒らすなんて、狼藉者！ 近寄られるたびにあたしも後退、両手を全面に押し出したら、足下の石らしきものにつまづいて後ろに転倒してしまった。

うわあ、痛いっ。

「なあ、聞いたんだろ、セカイのこと、お前のこと。向こうのお前が死んでるってこともさ」

どうにか立ち上がろうとしたら、お尻に痛みが走って情けなくも呻いてしまう。どうしよう、お尻に青あざなんて出来たら。蒙古斑みたいで恥ずかしい。いいえ、落ちていてチグサ、あなたは今それどころじゃないのよ。

「はい」

何？　と思つたら、目の前に手が出されている。何コレ、手を貸してくれるっていうの？　画鋏しこまれてないだろうな……そんなベタなことはなかった。見上げると、顔に赤髪が落ちてきたので、避けるように顔を背けた。

騙されない、チグサは賢いのである。簡単に敵の手なんか握っちゃうわけがないのである。すると、ジャメロンディアスはまたしても小さく息をついた。

「教えてあげよつか。キミ、死んでないよ」

「えっ——…うわあ！」

顔を上げた途端、腕が掴まれて力任せに引っ張り上げられた。勢

いのままジャメロンディアスの胸元にぶつかりかけたけど、肩口を軽く押されてそれも免れた。たたらを踏みながらもどうにか自力で立ち、ジャメロンディアスを見る。

「な、なな、なんつ」

「オレってコツチの世界とアツチの世界で意識だけ交換できんの。とはいえ、今のオレの体にはきちんとオレの意識が入ってるんだけど。前お前に会ったのはアツチのオレってことさ。オレは意識二つを一つとして共有できる、天才魔法使いなの」

「い、意味わからない！ そうじゃなくて、あたしが……！」

「だからさ、こんな特殊なオレのこと、とある人が目を掛けてくれてね」

とある人、ってそれ、どういうこと……？

「大丈夫、キミは殺しはしないよ。今回のオレはキミを生かすにきたんだ、大事にするよ」

動けなかった。呆然としてみると、ジャメロンディアスから顎を持ち上げられて無理に視線を合わせられた。口の端でにやりと笑われて、なんだか無性に腹が立つ。

「……ふざけんな、なんで大事にされなきゃいけないの」

もう意味がわからん。どうリアクションしていいかわからん。頭の中お祭り騒ぎ、悪い意味で。あたしは思いっきり膝を高く上げると、思いっきり重力に逆らわず、思いっきり引き下ろした。

「痛ええっ！」

秘技、足の甲踏みつけ、だ。あたしの体重の重さと、怨念の強さを味わうがいい。

「な、何すんだてめえ！」

「涙目で言われても怖くもなんともないし。魔法が使えないと分かった以上、あたしとあなたは対等ですからね、チグサ本気モードで行きます」

「あいたたた、髪の毛引つ張るなって！」

「前々から髪の毛長い男の人ってどうしても気になってたんですよえ……すっぱり行っちゃったらどうでしょうか」

「どうでしょうか、ってそれ完璧オレのこと言ってねえだろ！ ユーゼンか、ユーゼンのことかっ」

「男のくせにさらっさらな髪質なんてむかつかます！ あたしだって女の子なのに、あたし差し置いて群がられるなんて悔しすぎます！」

「それは王子郎のことなのかーっ！ いててて！」

思う存分髪の毛を引つ張って日頃のウサを晴らしてやる。なんとなくジャメロンディアスへの憎悪以外の感情も入った気がしないでもないけど、まあこの際いいや。

「コラッ、やめろって！」

ふんっ、思い知ったか！

最後に一引つ張りしてから、スツとした気持ちで髪の毛を手離す。
あー、ムカツク手触りだったこと。

ジャメロンディアスも息を荒くしながら、あたしから離れた。

「ったあ、とんだ問題児。普通だったらお前、停学モンだぞ」

「ッハ！ 停学だなんて恐るるに足らず、ですよ！ ぱちもんごときに何が出来るってんですか」

魔法も使えないし、ハリウッドスターでもないし。

強気に胸を張ったら、突然首根っこ掴まれた。

「わあっ」

「それが、出来るんだよな」

さっきまでの慌てっぷりが嘘のように、髪の毛をなでつけながら小憎たらしい笑みを浮かべてジャメロンディアスが懷から一枚の紙を取り出す。そして首を引っ込めて亀のようになるあたしの目の前にそれを突きつけた。

それは。

「——ぎゃああ！　なんでそれを！」

そこには、千草二子の家族構成から自宅の住所、一年生の頃のお粗末な成績から果ては乙女の恥ずかしき秘密身長体重まで……そう、チグサデータがそこに書き連ねてあったのだ！

「ふーん、軽そうにみえて意外と重いんだ」

「なになっ」

「どうして持つてるか気になる？　ま、当たり前だよ。これを持つって、権限だし」

何を、と問う余裕などない。聞かなくても、ジャメロンディアス
はご機嫌にも言い放ってくれた。

先ほどまでとは、形勢逆転——。

「担任の、せんせーの、ね」

31（後書き）

なんだかいろんな意味で不穩になってきましたもうそろそろわたしの頭の中だいじょうぶかな……

ここまで読んでくださってありがとうございます

話がなかなか進まなくて展開がのろいかもしれませんが、ごゆっくりおつき合い下さると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2431f/>

セカイに対するあたしの使用法

2010年11月5日15時37分発行